北隅部・東隅部・北西壁中央付近を顕著に焼土・炭・炭化材の分布が確認された。炭化材は各壁に対して垂直方向に分布しており、炭化材の周辺に濃密に炭が分布する。また、壁面に沿った床面上に焼土・炭の分布が認められ、住居外部へ繋がった痕跡は認められない。柱穴の調査では柱痕が残存していた痕跡は認められず、屋根等の上屋は撤去されていたとみられ、焼土層等の形成が火災によるものではないことが確実である。確認状況からは木材等によって作られた壁を倒して、そのまま焼成した可能性が想定される。

遺物は南東壁際土坑の周辺や焼土・炭層上より、土器・石製品・鉄製品・玉類が出土している。土器は南東壁際土坑内ならびにその周辺を中心に多量に出土している。南壁際土坑内では高杯を主とし、脚部には立ったままのものも認められたが、横倒しあるいは逆位で潰れた状態で出土している。隣接する破片同士の接合率は高いが、20の高杯や9の鉢のように別々のまとまりの中の破片が接合したり、大半の個体では土坑外から出土した破片との接合関係が認められた。土坑外の隣接した床面上からは壺2、高杯11、甕22・24・25・27、甑30が、P2内からは鉢7・8が出土している。

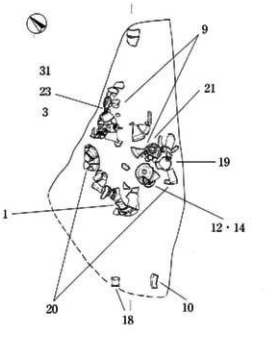


図149　SB018土坑内遺物出土状況（S-1/40）

土坑外での遺物の出土状況は土坑内での出土状況と同様で、一連の行為の結果と考えられる。前述したように土坑内へは壁材焼成後に土器を投棄したという状況からは、焼土や炭で土坑は半分程度埋まっていたと考えられ、特に土坑が土器を投棄する目的で意識されていた可能性は低いと考えられる。壁際の焼土・炭上からも遺物の出土がみられ、4の壺や6の鉢は北西壁側の焼土・炭層上より出土している。

土器群は赤彩系土器群と非赤彩系土器群が完全に確立し、赤彩系器種にはすべて赤彩が施されている。出土状況からも住居廃絶時の一括資料と捉えられ、箱清水式新相を示す資料群と評価される。また、破片資料中には外面に縄文が施文された口縁部片（図152－42～44）が3片含まれ、北関東系（赤井戸式）の土器と考えられる。体部片がなく、全体像は不明であるが、共伴した可能性が考えられる。このほか、破片資料には栗林式（38～41）・吉田式（45～71）が含まれる。鉄製品は小型の柳葉形鉄鏃1点が土坑内より出土している。残存長6.0cmを測り、茎部を欠損する。玉類には勾玉・管玉・小玉が1点ずつある。勾玉は翡翠製で、P2-P3間の床面上より出土している。全長0.9cm、幅0.7cm、厚さ0.25cmを測る小型品である。側面を削り込むことによって勾玉の屈曲を表現している。先行は片側穿孔である。ガラス製小玉は勾玉に隣接して出土している。径0.6cm、厚さ0.55cmを測り、コバルト色を呈する。管玉は北西壁際の焼土・炭層上より出土している。緑色凝灰岩製で、長さ1.6cm、径0.2cmを測る細形の管玉である。石製品には石槌と磨製石鏃がある。石槌は北西壁際の焼土・炭層上より出土している。全長8.0cm、幅6.5cm、厚さ4.2cmを測る。磨製石鏃は土坑際の床面上より1点出土している。無茎で、先端を含め身部の大半を欠損する。

これらの遺物はいずれも焼土・炭層上から出土しており、壁材焼成の後に置かれたことが確実である。このことからは上屋撤去→壁材等の焼成→遺物の遺棄という住居廃絶時の作業工程が復元される。

以上の様相より、箱清水式新相期で、弥生時代後期終末から古墳時代初頭に該当すると考えられる。

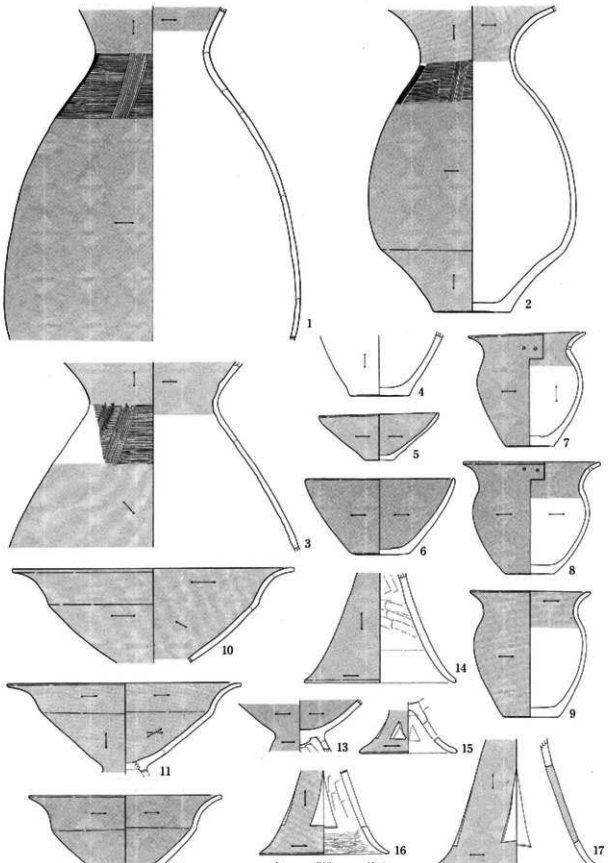


図150　SB018出土遺物実測図（1）（S-1/4）

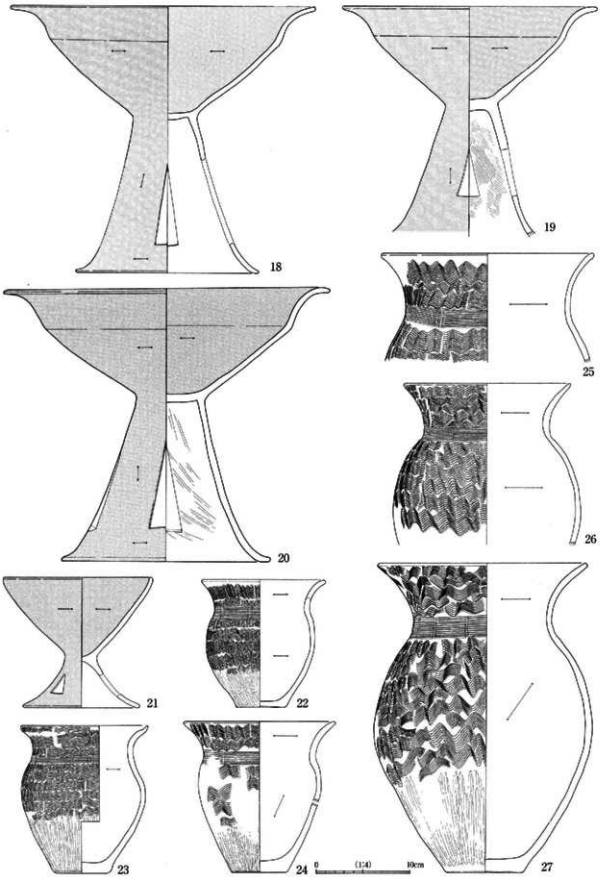


図151　SB018出土遺物実測図（2）（S-1/4）

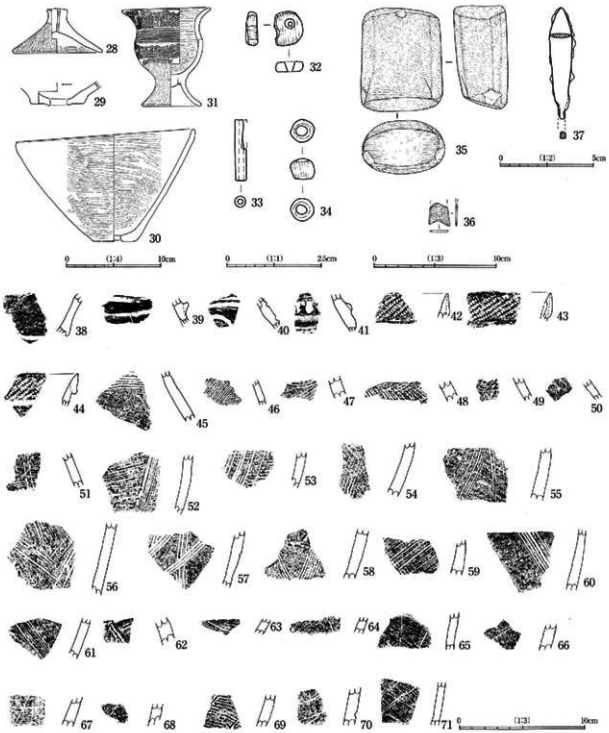


図152　SB018出土遺物実測図（3）（S＝28～31；1/4　32～34；1/1　35・36；1/3　37；1/2　38～71；1/3）

SB025（PL－Ⅻ－13）

SB018上層に重複し、床面下からはSB026が検出されている。一辺約5.0mを測る方形プランを呈する。床面は脆弱で、柱穴や炉などの施設も検出されていない。覆土中層より全長12cmを測るヤリガンナが１点出土している。未処理のため不明な点が多いが、全体像がわかる希有な資料である。なお、出土土器破片は古墳時代前期が主体を占め、該期に位置づくと考えられる。

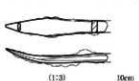


図153
SB025出土鉄製品実測図（S＝1/3）

SB023（PL－18、PL－XII－4・5・12）

調査区のほぼ中央部の住居密集域で検出された竪穴住居である。SB009・SB012・SB013に掘り込まれており、特にSB009が重複する南西側は壁面の確認ができなかった。ただし、床面の形状や柱穴の配置からはそれほど大きく失われたとは考えづらく、長辺は7.5m程度と把握される。幅は4.5mを測り、隅丸長方形を呈する。

床面は貼床が検出されている。東側は壁際まで確認され、ほぼ全面貼床である。柱穴は7箇所検出された。主軸左右対称位置にある4箇所が主柱穴になると考えられる。最も南西側の2箇所のピットは柱穴間の幅が狭く、出入口施設に関わると考えられる。また、主軸上の北東側にピットが認められ、支柱穴になると考えられる。炉跡は北東側の柱穴間で検出されている。中央部が浅く凹む径0.4mほどの円形範囲が非常によく焼けていて、その周辺に焼土が認められた。また、柱穴に及ぶ広い範囲に薄い炭層が広がる。住居の中央部でも炉跡が確認されている。0.55×0.45mを測る不整楕円形で、中央部が熱変しよく焼けていた。ただし、北東側とは異なり、炭層はまったくみられなかった。

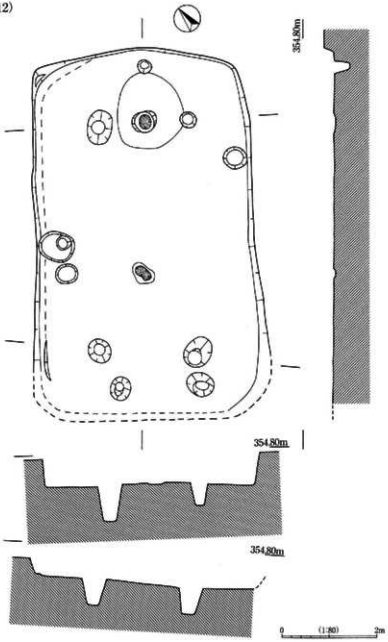


図154　SB023実測図（S=1/80）

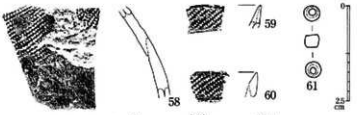


図155　SB023出土遺物実測図（1）（S=1～3；1/3　4；1/1）

出土遺物には土器・土製品・ガラス製小玉がある。土器は住居中央部の覆土中層から床面直上を中心に多量に出土している。接合状況は床面上から覆土上層出土片まで上下方向で認められるが、水平方向での接合はほとんど認められず、平面的に破片が散布するような形態での土器投棄は行われていないと考えられる。土器群には壺・広口壺・高杯・鉢・有孔壺の赤彩系と甕・台付甕・蓋・甑の非赤彩系がある。赤彩系土器群の赤彩率は非常に高いが、5と7の壺は非赤彩である。広口壺11の文様帯は三連止めの櫛描簾状文下に円形の刺突文が付加されている。壺は非赤彩のものを含めて

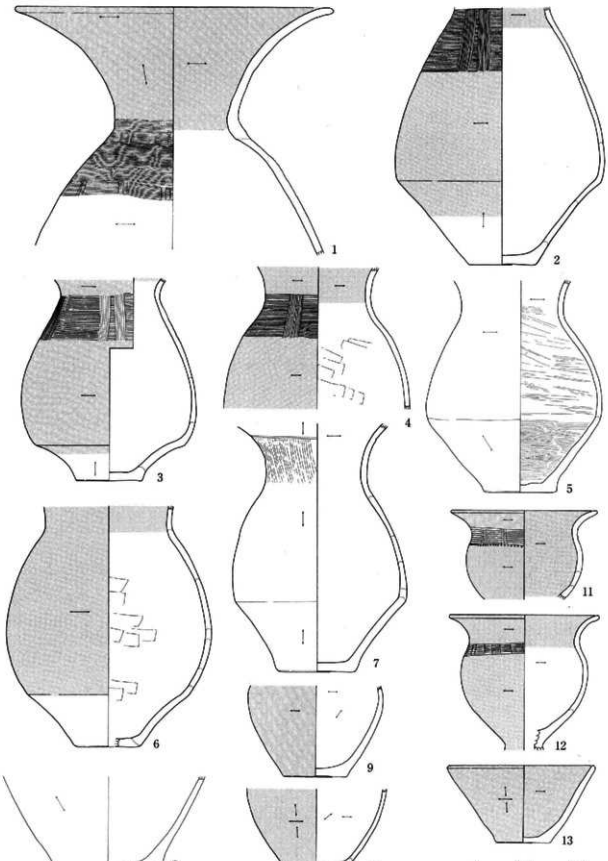


図156　SB023出土遺物実測図（2）（S-1/4）

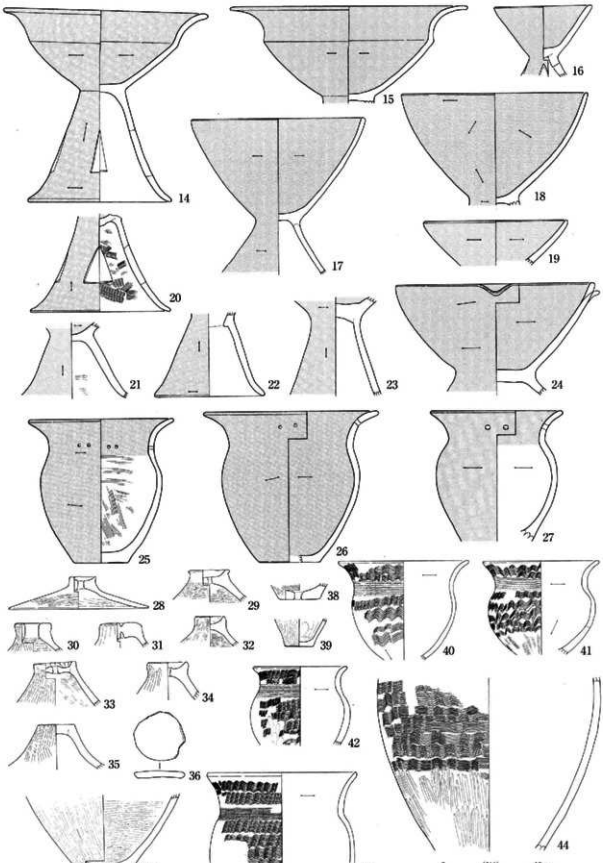


図157　SB023出土遺物実測図（3）（S-1/4）

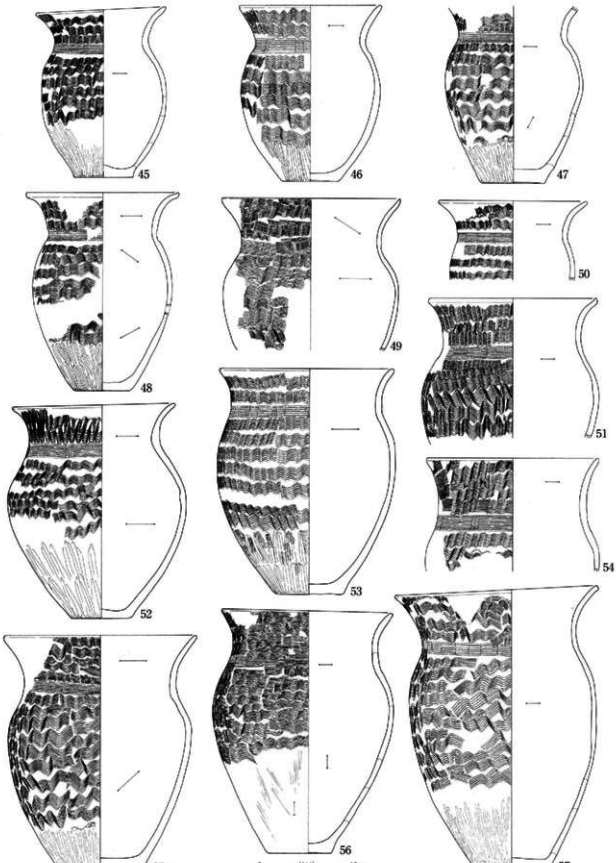


図158　SB023出土遺物実測図（4）（S-1/4）

球胴化が著しくなり、甕には43や55のように内面頸部に明確な屈曲点を有するものが含まれる。破片資料としては、北関東系と考えられる口縁ならびに肩部片が3点認められる。このうち、図155－60はSB009覆土中出土であるが、本住居にともなうと判断している。土製品は土製円盤が1点ある。ガラス製小玉は北東側支柱穴脇の床面上より1点出土している。スカイブルーの小型品で、直径0.4cm、幅0.25cmを測る。

以上の様相より、箱清水式新相で、弥生時代後期終末から古墳時代初頭に該当すると考えられる。

SB032（PL－15、PL－Ⅻ－5・6）

SZ003墳丘下で検出された竪穴住居である。北側でSB051を掘り込み、東側では上部にSB047が重複する。南側はSZ003周溝により破壊されている。

短辺（東西辺）は3.9m、長辺の確認長は3.5mを測り、隅丸長方形を呈すると考えられる。

床面は全面で貼床が確認された。柱穴は2箇所検出されている。2箇所ともに

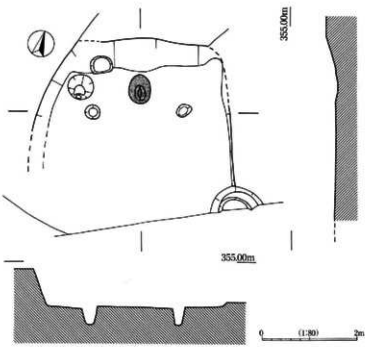


図159　SB032実測図（S＝1/80）

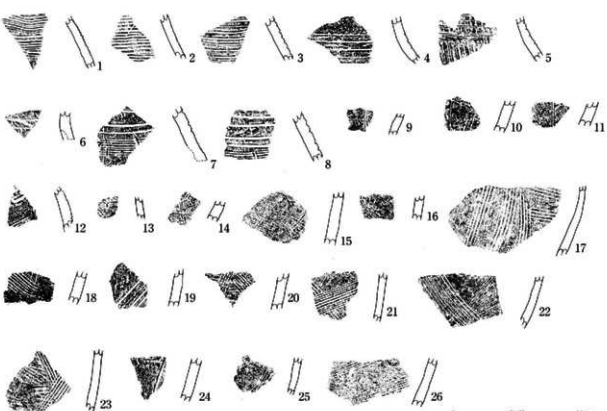


図160　SB032出土土器片断面実測図（S＝1/3）

直径0.3m程度を測り、深さもほぼ同じである。炉は柱穴間を結ぶ線の外側、北壁にほど近い部分で確認された。0.4×0.2mの楕円形を呈し、深さ0.2mの浅い凹み内が非常によく焼けていた。その外側には薄い炭層が検出されている。

遺物は床面直上を中心に土器が出土している。壷は器高70cm程度と考えられる大型品が複数個体出土している。高杯は箱清水式の典型形態（10）とともに、ハ字形に開く新出形態（8）が共伴する。8には脚端部付近に二孔一対の円孔が穿たれ、形態とともに箱清水式では認められない要素が付加されている。甕は頸部形態がほぼ直立に立ち上がった後に緩やかに外反する形態が主体を占める。台付甕は球胴化が著しい体部にハ字形の台部が付く。19・20のように支脚に近い形態の脚部も含まれている。破片資料には櫛描の斜格子状の文様が施文された甕片等が認められ、吉田式が含まれている。なお、11の甕は口縁部波状文帯下に変形した鋸歯文が施文される。胴最大径が体部上半にあり、受口状になる口縁形態とともに古い様相を止める。破片資料同様に吉田式に該当すると考えられ、混入品と捉えられる。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

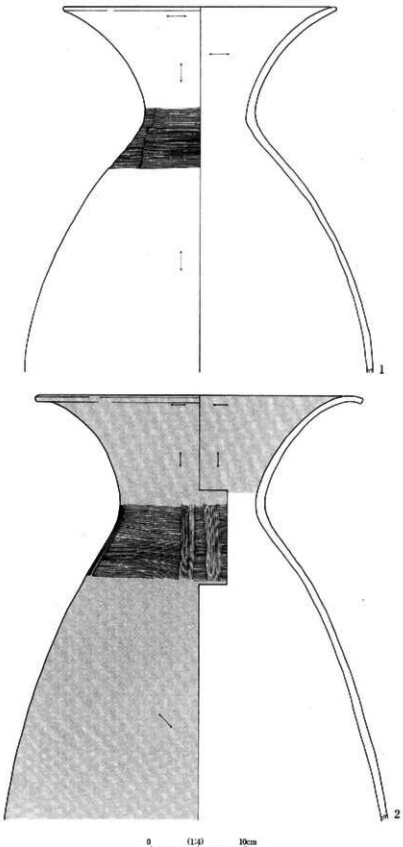


図161　SB032出土遺物実測図（1）（S=1/4）

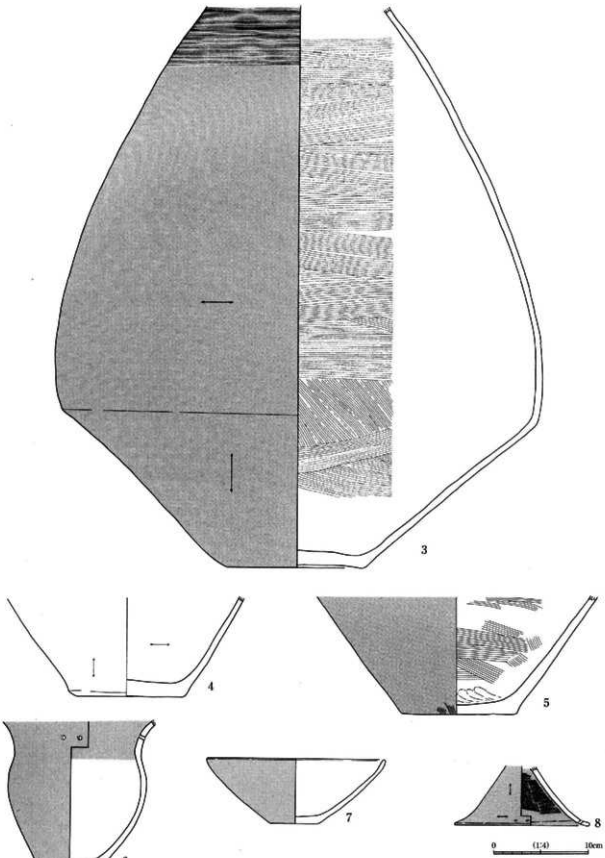


図162　SB032出土遺物実測図（2）（S=1/4）

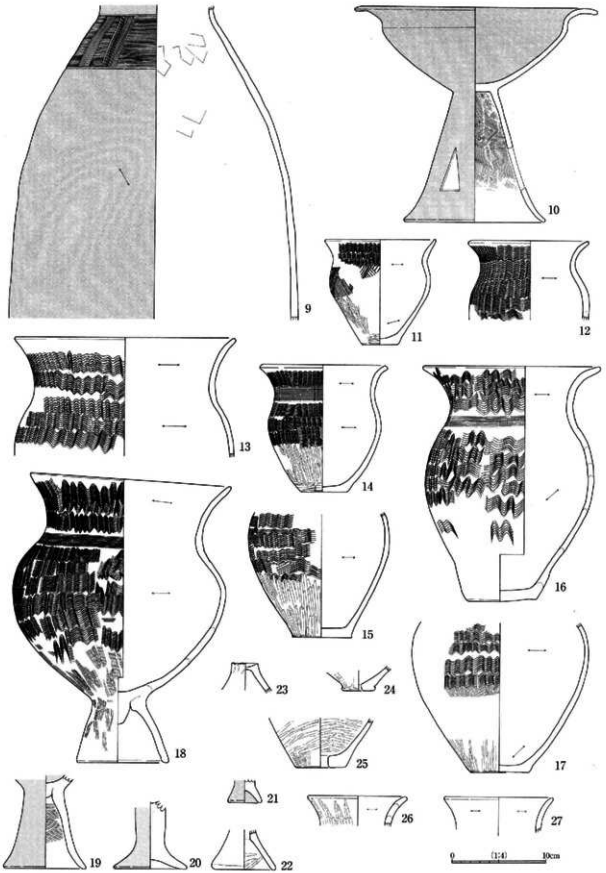


図163　SB032出土遺物実測図（3）（S=1/4）

SB047（PL－15、PL－XII－5）

SZ003墳丘範囲内で検出された竪穴住居である。南西側は調査区外となり、西側でSB032上面に、また、北側でSB051上面に重複している。

4.82×3.4mを測る隅丸長方形を呈する。床面は貼床が検出された。北側隅部付近では壁面まで達していないが、他は壁面まで達し、ほぼ全面で確認されている。柱穴は3箇所検出された。東側は調査区外に存在し、4主柱構造と捉えられる。柱穴の断ち割りでは柱痕は認められず、柱は住居廃絶時に撤去されていたと考えられる。なお、西側の柱穴では検出時に炭化材が柱穴上を覆っていて、炭化材の形成が柱撤去後であることが確実視される。炉は北側柱穴と未確認の東側柱穴を結んだ想定線の若干内側の位置で、床面を覆う炭化材ならびに炭層下より検出されている。0.2×0.15の方形を呈し、浅く凹んだ内側が非常によく焼けていた。周囲には床面上で検出された炭層よりも堆積は薄いが粒子が細かい炭層が検出され、炉に伴う炭層と考えられる。さらに、東側に接してよく焼けた焼土塊が検出されている。

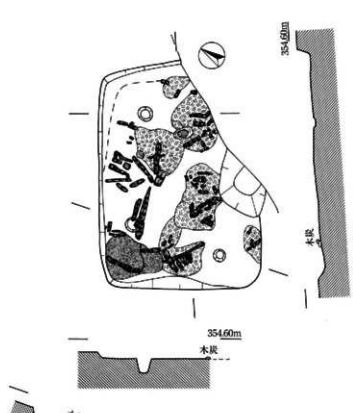


図164　SB047実測図（S=1/80）

床面上からは多量の炭化物と炭層・焼土層が検出されている。炉跡や柱穴を覆う状態で住居全面より検出されていて、屋根等を撤去した後に形成されたと捉えられる。火災住居とは考えづらく、SB045やSB018同様に、住居廃絶の最終段階で壁面構造物等を燃やしたものと想定される。炭化材の残存状況はよく、丸太状の木材のほとんどが壁面に対して垂直方向に検出されている。水平方向の炭化材はほとんど認められないことから、同様な材の使用はなかったと考えられ、より薄い板材や有機質品を使用したことにより、燃えきってしまった可能性が考えられる。壁際に柱穴列が存在しないことが問題となるが、この壁面に垂直方向の丸太材は壁体構造物を抑える杭状施設の可能性が考えられる。ただし、炉に対して対称位置にあたる西壁では、水平方向の炭化材が垂直方向の炭化材上に載った状態で検出されている。検出状況がそのまま壁体構造を示すものとするならば、横方向の丸太材を内側で杭状の材によって抑えていた状況が考えられる。出入口施設が存在すると考えられる西壁のみ壁体の構造が異なる可能性も想起される。焼土は北西隅部付近でまとまって検出されている。この焼土だまりには炭がほとんど含まれず、最も激しく燃えた箇所である可能性が想起される。

遺物は土器が焼土・炭層上より出土している。SB045・SB018同様に焼土・炭層形成直後に土器群が投棄されたものと考えられる。図化・掲載した器種には壺・有孔壺・高杯・蓋・甕がある。1・6・7はほぼ完形品で、1箇所にまとまった破片によって復元された。また、1の壺も体部下半や口縁部を欠損するが、実測部分について

は1箇所のまとまり内での接合で完結している。これに対し、3・5の高杯は炭化材を挟む広い範囲の破片が接合しており、前記の個体とは異なる。高杯が他器種とは異なる取り扱いを受けた結果であるかどうか、さらに多くの事例で検討すべきであるが、注意される出土状況である。

高杯5は脚部に四方の透かしがみられるが、三角形透かし下に三日月形の透かしが組合わさる。通有の箱清水式の高杯は3にみるように三角形透かしが基本であり、本品は他に例をみない特殊な事例となる。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式新相期に該当すると考えられる。

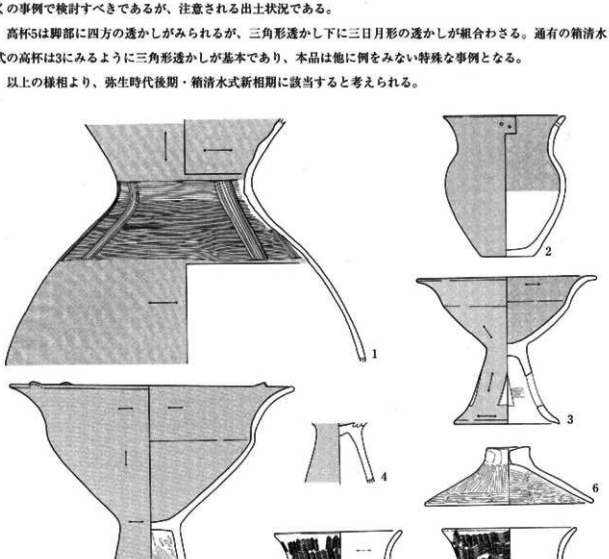


図165　SB047出土遺物実測図（S=1/4）

SB022（PL－16、PL－Ⅻ－6）

SZ002周溝によって南側が掘り込まれ、北側1/3程度が検出された竪穴住居である。

短辺は5.1m、長辺の残存長は2.8mを測る隅丸方形を呈する。SB023よりも大きく、SB018に準じる大型住居であったと考えられる。床面は貼床が検出された。壁際までは達していないが、壁面に沿って床が貼られている。柱穴は2箇所確認された。床面上での炭化物・炭層の検出はなかったが、北西側柱穴内は壁面に寄りかかった状態で炭化材が確認されている。柱穴底部まで達していないことや南東側柱穴での断ち割りの結果、柱痕は確認さ

れず、住居廃絶にともなって上屋が撤去されたと考えられることから、この炭化物は柱の炭化材ではなく、後に落ち込んだものと考えられる。また、南西側の柱穴には覆土中位に石材が落ち込んでいた。柱穴間のほぼ中央の東壁側で1箇所柱穴が検出され、支柱痕に該当すると考えられる。炉は主軸上で柱穴を結んだ線の若干外側で検出された。0.45×0.3mの楕円形範囲が浅く凹み、内部がよく焼けていた。また、炉跡周辺では広く炭層が検出され、北東側では壁面にまで達していた。

出土遺物には土器がある。土器は出土量が少なく、図化・掲載できたものは甕2点である。外面には頸部簾状文と波状文が認められ、頸部形態は肩部より直立ぎみを立ち上がった後に大きく外反する新しい様相を示している。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期と考えられる。

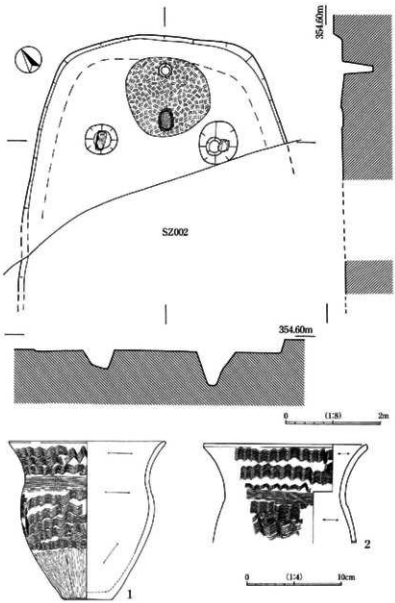


図166　SB022遺構・出土遺物実測図（S=1/80・1/4）

SB006

（PL－16、PL－Ⅻ－12・13）

SZ002墳丘下で検出された竪穴住居である。西側でSB005・SB024に、また、南壁をSE001掘り込まれ、東側は調査区外となる。

南北辺は5.0m、東西辺の確認長は4.5mを測り、隅丸長方形を呈すると考えられる。床面は貼床が確認された。柱穴は西側において2箇所検出されている。東側の柱穴は調査区外に存在することが予想される。炉跡は西側柱穴付近で2箇所検出された。柱穴間に位置する炉跡は西側をSB024によって掘り込まれ、1/4程度が失われている。炉内は黄褐色の熱変が確認され、非常によく焼けていた。SB024側では小ピット状にさらに凹み、内部より勾玉の破片かとみられるが石製品片が出土している。また、前述の炉に接した柱穴間の内側で内部より焼土と炭が検出された円形の浅い凹みが確認された。凹み内部の焼け方が西側の炉に比してそれほど顕著ではなく、また、底面にまで炭層が存在することからは炉跡とは考えずらいが、明確な凹みを伴い、規模が西側炉跡と類似することから炉であった可能性を考えておきたい。

この2基の炉直上では、焼土粒と炭の分布が認められている。2.1×1.6mの不整方形の範囲に炭が濃密に検出され、堆積土は暗褐色粘質土に多量の炭ならびに黄褐色粘質土小ブロックが混入する状態で、周辺とは明瞭に区

分された。周辺に炭の散布が認められなかったことから、SK011として別遺構の重複を想定した。

炭は中央付近を中心にみられたが、この中央部の密な部分でも炭のまとまりが土に混じる状態で、純粋な炭層としては把握できなかった。また、堆積状態が周囲とは区分されたものの、掘方はまったく見いだされず、形態も充分に把握できたとはいいがたい状況である。炭層底部では上層ではまったくみられなかった焼土粒が認められたが、検出量は極めて少なく、本遺構内で火が使用された可能性はほとんどない。密な炭の分布は床面直上までであったが、焼土粒はその下のSB006床面上まで連続していることが確認でき、直下で確認された炉跡との関わりで捉えるべきと考えられる。また、当初、主体的な覆土である炭層底部をもって土坑底と捉えたが、焼土粒ならびに微量な炭は確実にこの土坑底下まで続いており、底面も把握されなかった。出土遺物は炭確認面で銅鋲片が1点出土している。また、炭層直下、SB006床面直上より鉄製品が1点出土している。このほか、炭に混じっての出土遺物はない。

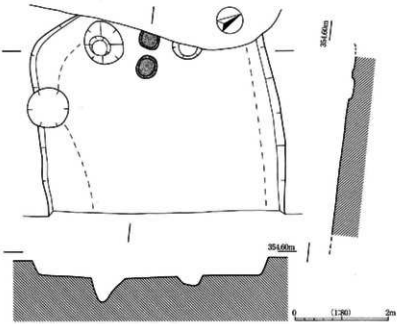


図167　SB006実測図（S=1/80）

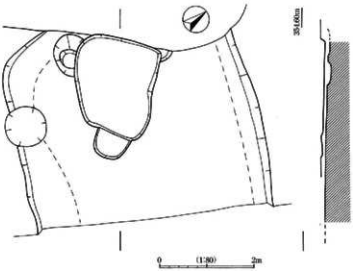


図168　SK011実測図（S=1/80）

確認面で銅鋲が出土したことから埋葬遺構の可能性を考慮したが、木棺などの痕跡や炭が埋葬構造に関わるような状況はまったく見られなかった。さらには壁面・底面ともに確認されず、人為的な掘削痕は見いだされないなど、別遺構の重複を考えることは難しい。SB006住居廃絶に関わる行為の結果と捉えておきたい。

遺物は土器・鉄製品・青銅製品・玉類が出土している。土器には高杯・壺・甕・甑がある。ただし、いずれも破片資

図169　SB006出土土器実測図（S=1/4）

料で、全体が残る土器は認められない。図170は炭層確認面で出土した帯状円環型銅鋼である。幅1.0cm、厚さ0.1cmを測る板状鋼の破片で、1/4程度が楕円形に歪んだ状態である。破断面は両側ともに外側中央部が不自然に凹んでいて、折り曲げによる意図的な切断の可能性が考えられる。ただし、破断面の整形や打ち延ばしなどは認められない。鉄製品は床面直上より1点出土している。残存長5.5cm、幅1.7cmで、厚さ0.2cmほどと薄い。刃部が存在する可能性があり、刀子状の利器とみられる。

図170　SB006出土銅鋼実測図（S=1/3）

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB024（PL－18、PL－XII－12）

SZ002墳丘下で検出された竪穴住居である。上部にSB005が重複するが、その床面下で良好に残存が確認された。南西側隅部はSB016により掘り込まれ、失われていた。一方、東側でSB006を掘り込み、北西隅部ではSB028上に重複している。なお、SB028は本址床面直下で貼床が検出されている。

5.9×4.2mを測る隅丸長方形を呈する。床面はほぼ全面で貼床が確認された。柱穴は4箇所検出され、4主柱構造である。炉は北側柱穴間で検出された。直径0.4m程度の楕円形を呈し、浅い凹みの内部は非常によく焼けていた。なお、周囲に炭の分布は認められていない。炉対称側に当たる南西側壁際部では、南側隅部付近で浅いピットが検出されているが、壁中央部付近で出入口施設に関わる遺構の検出はみられなかった。

遺物は床面上を中心に土器とガラス玉が、南西側柱穴内より管玉が出土している。土器はいずれも床面上より出土しているが、確認規模や床面状況に比して出土土器量は少なく、また、全体形が復元される個体も少ない。壺・甕・台付甕・蓋が図化・掲載できた。11の壺口縁片には口唇部直下に縦2孔以上とみられる円孔列が複数列で穿孔され、12の壺頸部片には櫛描文上に縦2列の小円文が施されている。4の蓋には上部に円孔が1箇所開いている。9の管玉は南西側柱穴内覆土中より出土している。柱穴内には柱痕跡はみられず、柱を含めた上屋撤去後に入り込んだと考えられる。緑色凝灰岩製とみられ、側面・穿孔面とともに非常に平滑に仕上げられている。10のガラス製小玉は北壁際の床面上より出

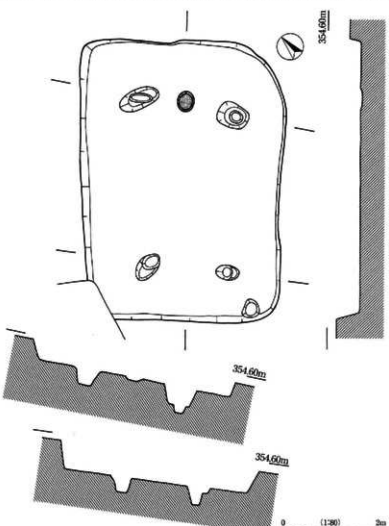


図171　SB024実測図（S=1/80）

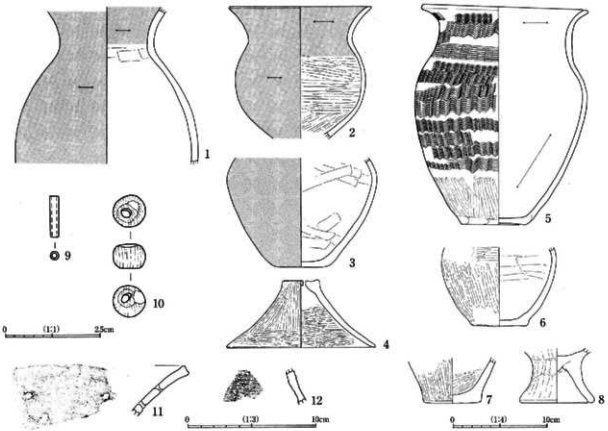


図172　SB024出土遺物実測図（S=1～8；/4　9・10；1/1）

土している。コバルトブルーで、上下面を押圧により面としている。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB021（PL－16、PL－Ⅻ－6）

SZ003周溝によって掘り込まれ、東側の一部が検出された竪穴住居である。検出された南北辺の確認長は3.45mを測り、南側は調査区外となる。西側はSZ003周溝の重複によりほとんど破壊されていたが、周溝底で床面が確認され、東西辺は掘方の底部幅で3.8mを測る。これにより、南北方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する可能性が考えられる。

床面は貼床が検出された。周溝底でも貼床は確認され、ほぼ全面に貼られていたと考えられる。柱穴は北東部で1箇所確認された。北西側はSZ003周溝底で床面が確認されたため、対応する位置で精査を実施したが検出はされなかった。炉跡も検出されていない。ただし、SZ003周溝底の北壁寄りで若干の炭の散布が認められ、位置からは炉跡に関わる可能性が考えられる。

遺物は覆土中層から床面上にかけて土器が多量に出土している。特に東側部分では確認規模に比して多くの土器片が出土し、これが周溝底で確認された床面上

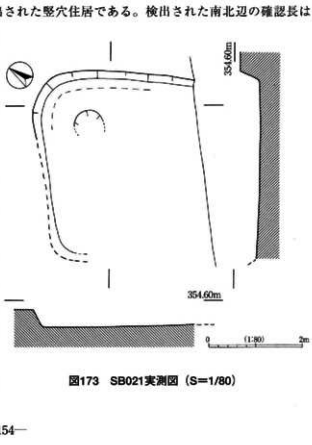


図173　SB021実測図（S=1/80）

へと続いている。ただし、周溝底で確認された床面上では土器の出土量が少なく、周溝の掘り込みの影響を受けている可能性が考えられる。出土した土器片は出土量に比して復元率が低く、接合関係を持たない破片が多い。出土時にも原形を止めない状況が確認されており、破砕・遺棄という状況ではなく、破片の投棄といった状況も考慮される。図化・掲載した土器には壺・高杯・鉢・甕である。このうち、5の鉢は該期土器群の中では稀少な形態である。なお、4の壺とともに赤彩は施されていない。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式に該当すると考えられる。

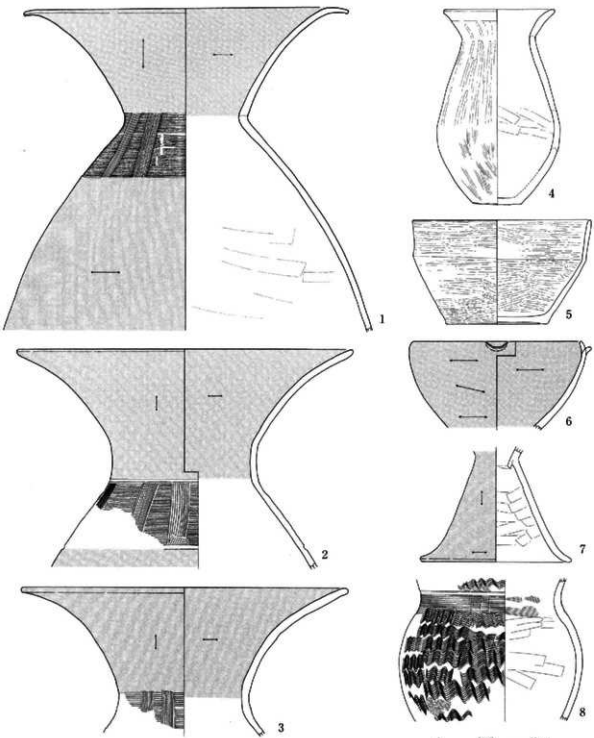


図174　SB021出土遺物実測図（S=1/4）

SB015・SB017・SB020・SB038

調査区南西側の住居密集地点で検出された竪穴住居群である。調査区壁際であるため、全体が検出されたものはない。当初1軒の大型住居として調査に着手したが、掘り下げの結果、4軒の竪穴住居の重複が確認された。SB020・SB015→SB017→SB038の順に構築されたと捉えられる。

SB020　一辺6.5mを測る竪穴住居である。東側でSB017・SB038が重複するが、それらの床面下で確認されている。西側は調査区外となるため東西辺は定かでないが、隅丸長方形を呈すると予測される。

床面は全面で貼床が確認された。柱穴は北側壁際で1箇所確認されている。他に3箇所小ピットが確認されているが、いずれも浅く、柱穴とはならない。炉は検出されなかった。柱穴の確認状況からは調査区外に存在すると考えられる。

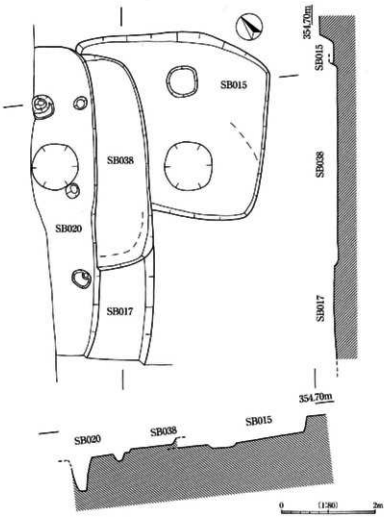


図175　SB015・017・020・038実測図（S=1/80）

遺物は床面上より土器が出土している。南側を中心に出土していて、図化・掲載したものに鉢・甕がある（1～3）。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。なお、検出が一部分に止まるため明瞭でないが、SB018、SB023に次ぐ大形住居となる可能性があり、集落構造上、重要な位置を占めると評価される。

SB015　一辺3.6mを測る方形を呈する。西側でSB038に、南側でSE002に掘り込まれている。

床面は南側を中心に貼床が確認された。貼床が不明瞭となる北側では床面高で覆土とは異なる黒色粘質土が検出され、長方形に浅く凹む。貼床を明確に掘り込んでいるため、長方形土坑の重複の可能性が想定されるが、覆土上位では掘り込みは確認されていない。柱穴ならびに炉跡は検出されなかった。

遺物は床面直上を中心に土器と石器が出土している。土器は高杯・蓋・甕・台付甕がある（7～13）が、完形に復元されたものはみられない。石器は東壁際より扁平片刃石斧が1点出土している。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。なお、該期竪穴住居で方形を呈する類例は稀少で、柱穴・炉の未検出や床面上での長方形の掘り込みの確認など、一般住居でない可能性も想定される。

SB017　東側でSB020上に重複するが床面が不明瞭で、重複部での状況は把握されなかった。また、北側ではSB038に掘り込まれ、ごく一部分が検出されたにすぎず、規模・形態等は不明である。

床面は脆弱で、貼床などは確認されていない。また、柱穴・炉なども検出されなかった。

遺物は床面上より土器が出土している。図化・掲載できたものに高杯・丸底坩・小型の甕がある（4～6）。

いずれも新出系の土器群で、古墳時代前期後半代と考えられる。なお、遺構の性格を断ずる情報に乏しいが、検出された壁面が直線的に延びる点や土器群が床面と捉えた覆土直下の同一高でまとまって出土している点から竪穴住居と捉えておきたい。

SB038　一辺4.5mを測る竪穴住居である。西側で調査区外へと続き、確認長は2.4m測る。このため、全形は不明であるが、方形を呈すると考えられる。

床面は貼床が確認された。柱穴ならびにカマドは検出されていない。

遺物は覆土中層～床面上にかけて、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。弥生土器はごく少量でSB015あるいはSB020に伴うと考えられる。須恵器には杯蓋・杯身・高台付杯がある。杯身20には底面に糸切り痕がみられるが、19・21はヘラ切り後にケズリ調整を加えている。高台はハ字形を呈し、内側接地である。16は羽釜の小破片である。出土遺物中に他の部位に該当する破片はなく、あるいは本住居を掘り込むSE003より混入した可能性が想定される。

以上の様相より、奈良時代後半期から平安時代初頭に該当すると考えられる。

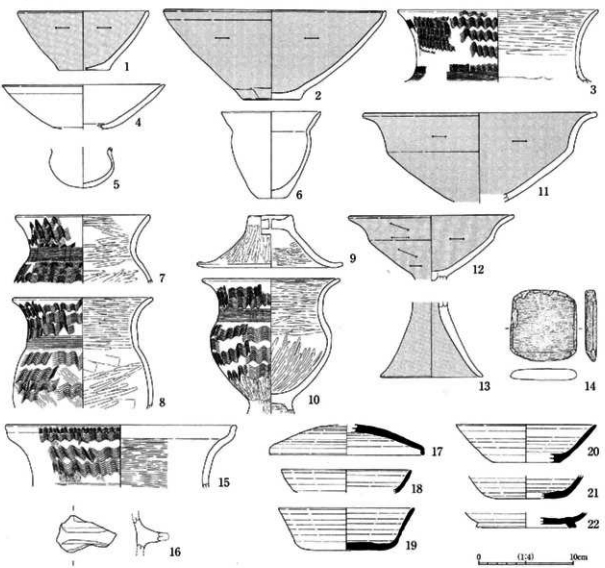
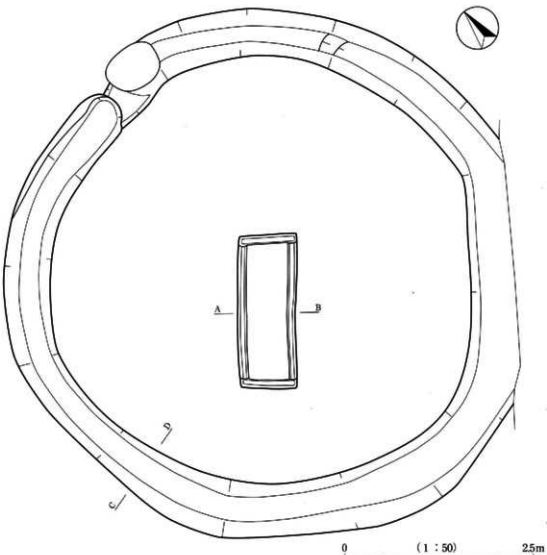


図176　SB015・017・020・038出土遺物実測図（S＝1/4）

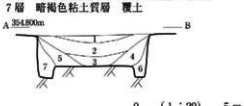
1～3；SB020　4～6；SB017　7～14；SB015　15～22；SB038

SZ005（篠ノ井・高畑５号墓）（PL－19、PL－XII－12）

調査区北端部で検出された円形周溝墓である。全体が検出され、直径は周溝外法で7.0m、周溝内法で5.7mを測る。南側ではSB030上部に重複していると判断されたが、非常に分かりづらい状況であった。また、北側ではSH002の柱穴が周溝を確実に掘り込んでいる。



1層　黒褐色砂質土層　覆土
2層　暗褐色砂質土層　覆土（土器を含む）
3層　暗褐色粘土質層　覆土
4層　黒褐色粘土質層　覆土
5層　黒褐色粘土質層　覆土
6層　暗褐色粘土質層　覆土（土器を含む）
7層　暗褐色粘土質層　覆土



1層　褐色砂質土層　周溝覆土
2層　暗褐色砂質土層　周溝覆土
3層　暗褐色粘土質層　周溝覆土
4層　黒褐色砂質土層　周溝覆土
5層　黒褐色粘土質層　周溝覆土
6層　暗褐色砂質土層　周溝覆土
7層　暗褐色砂質土層　周溝覆土

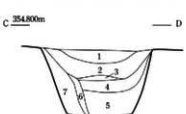


図177　SZ005実測図（S＝平面図；1/100　土層堆積図；1/50）

周溝は幅0.6～0.9mを測り、直線的な部分も認められるが、ほぼ正円を描く。周溝底は平坦で、高さも一定である。断面形態は内外ともに急であるが、外側がいくぶん緩やかで、内側が急激に立ち上がる形態を呈する。

ブリッジ部は北側に1箇所確認された。周溝が連続せずブリッジとなることは確実であるが、SH002に関わる柱穴がちょうどこのブリッジ部に重複していたため、その形状は明らかにしえない。ただし、西側から廻る周溝端部は柱穴掘り込みの影響を受けていたとしても図示した位置付近にほぼ特定され、東側から廻る周溝の確認範囲を考慮すると、ブリッジ幅はそれほど広くはなかったと考えられる。

周溝覆土は暗～黒色系の砂質土を主体とする。堆積は外側からの流入土と内側からの流入土がともに確認でき、外側からの流入土による埋没が始まったと時をほぼ同じくして、内側からも多量な土が流入しはじめたと考えられる。墳丘はまったく確認されなかったが、周溝内への内側からの流入土を考慮すると、低丘であれ盛土は存在した可能性が高いと考えられる。

遺物は周溝底に堆積する5層・黒褐色粘質土層中より土器片ならびに土製勾玉が出土しているが、ごく少量で周溝覆土中にはほとんど遺物が含まれていない状況であった。墳丘外からの流入土である6・7層はもとより、上層堆積の1～4層からも遺物は出土していない。

墳丘中央部からは埋葬施設の可能性が考えられる土坑が検出された。2.6×0.76mを測る長方形土坑で、確認深度は0.15mである。四壁沿いには幅0.1m程度の溝状の落ち込みが確認され、両小口が深くなる。なお、両小口は側板の内側に入りこまず、側板の側面に外側から接する形態である。覆土は四方ともに暗褐色粘質土の同質土であった。底部は平坦であるが、特に床施設が設けられた痕跡は認められなかった。以上の形態からは据え付けられた組合式木棺と考えられる。蓋は確認されなかったが、確認面より黒褐色粘質土（4・5層）の落ち込みが確認されており、あるいはこれが腐朽により落ち込んだ蓋の痕跡の可能性が考えられる。遺物は土器小片が覆土上層ならびに溝状部覆土中から数点出土したのみで、特に副葬品と考えられる遺物の出土はなかった。

出土遺物は周溝内より出土した壺片と土製勾玉を図化・掲載した。壺は底部片で、外面はハケ調整、内面は板状工具によるナデが施される。このほか、出土した土器片には赤彩が施された壺等の破片や波状文等が施文される甕片などが認められる。土製勾玉はく字形を呈し、全長2.5cm、幅0.9cmを測る。棒状の粘土による成形とみられ、屈曲部内面には指頭痕が残る。各面はナデによる整形が行われる。穿孔は片側より実施されており、図示側の円孔周辺は内側より押し出された粘土の盛り上がりが認められる。

以上より、弥生時代後期・箱清水式期の円形周溝墓と考えられる。

ただし、周溝内より土器がほとんど出土していない点や、木棺と想定される痕跡が確認されながら副葬品や埋葬人骨がまったくみられない点、また、木棺に墓壙が伴わない点は、多くの該期円形周溝墓と比べた場合、大きな相違点として注意される。篠ノ井遺跡群聖川堤防地点や55基以上の円形周溝墓群が検出された篠ノ井遺跡群新幹線地点ではほとんどの周溝より土器の出土が認められている。また、埋葬施設内より量の多寡はあれ、土器や銅鏡・ガラス玉、時として聖川堤防地点SDZ7のように鉄剣や鉄鏡などの副葬品をもっている事例が少なくない。隣接する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落域からは鉄製品・青銅製品・玉類等が出土しており、これとの対比においてもその落差は著しいものである。このほか、円形周溝墓は周溝を接してあるいは共有して群をなす傾向が強く、本墓のように単独立地である点も大きな違いである。

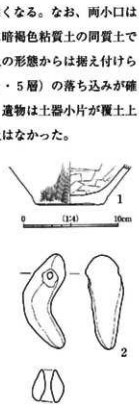


図178　SZ005
出土遺物実測図
(S=1；1/4　2；1/1)

SZ002（篠ノ井・高畑２号墳）（PL－20・21・22・23、PL－XII－12・13）

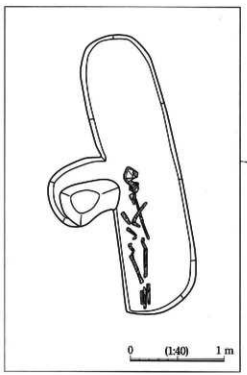
調査区の南側、東壁際で検出された円墳である。東側でSZ001周溝と隣接するが、周溝間の重複はみられない。北東側に隣り合うSZ003とは一定の距離をおいて位置している。

周溝のおよそ2/3が検出され、東側は調査区外となる。直径は周溝外法で20.5m、周溝内法で14.9mを測る円墳である。

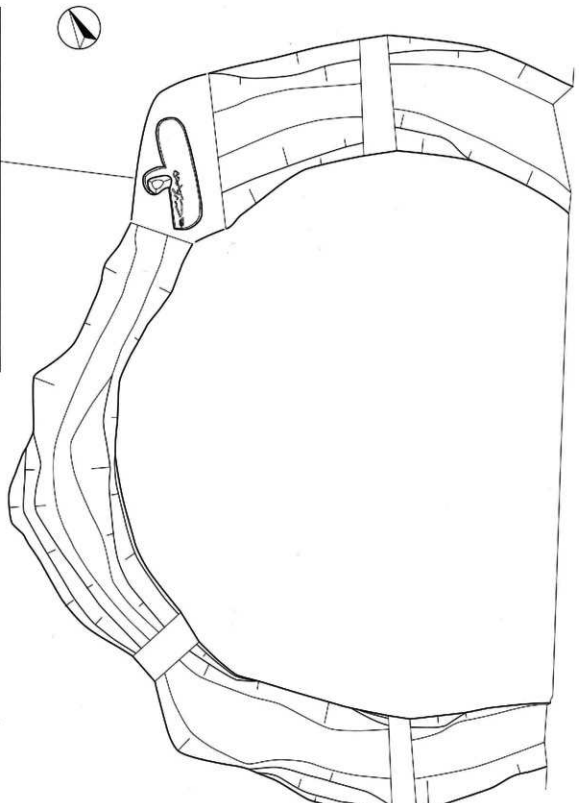
周溝幅は最大で3.2m（北側）、最小で1.5m（西側）と幅が一定せず、西側において細く歪な形態となる。この周溝幅が減じる部分においてはブリッジあるいは造出等の付属施設の存在を想定して精査を繰り返したが、こうした施設の存在は確認されなかった。また、この周溝幅に変化がみられる箇所が角部となり、方形を呈する可能性も考慮されたが、周溝内側ではほぼ正円を描いていることが確認でき、方墳である可能性は極めて低い。周溝内側の形状からは周溝幅の不均一性が墳丘形態に与えている影響は少ないと捉えられる。周溝の断面形態は外側が緩やかで内側で急に立ち上がるが、図示した調査区壁面付近では先行する竪穴住居の影響により本来の形状が現れていない。周溝底はほぼ平坦である。他の古墳周溝でみられるような階段状の掘り込みや一部埋め戻しが想定されるような状況は確認されなかった。

周溝北側の確認面からはSD005が検出されている。3.0×0.8mを測る長方形土坑で、西側で別の方形土坑に掘り込まれている。土坑底直上よりは人骨とみられる骨が検出された。骨は土坑南側で確認され、取り上げが実施できないほど粉化が著しかったが、腰骨から脚にかけてとみられる。北側には骨の広がりはまったく認められず、頭骨や歯は検出されなかった。上半身が確認されていないが、検出された骨片の状況からは伸展状態で埋葬されたと考えられる。骨片が土坑底直上で確認されたことから底板等の存在を予測したが、遺体を包む有機物の痕跡を含め、棺など埋葬に関わる施設の痕跡はまったく認められなかった。また、副葬品も出土していない。副葬品が認められなかったことから本土坑の年代的位置付けは非常に難しいが、掘り込まれた土層を確認すると、周溝確認面に堆積した３層明黄褐色砂層を掘り込んでいる。この砂層は仁和八年（888年）に発生したとされる洪水砂に比定され、これを掘り込むことから９世紀後半以降の所産であることが確実視できる。また、土坑底が周溝底に達せず周溝覆土中位に止まっていることも、古墳に伴うものではなく後世の所産であることを示すと考えられる。周溝の範囲内に収まることはあるいは墳丘の高まりが残存していたことによる必然的な制約ともいえるが、いずれにせよ、直接古墳に伴うものではなく、そこには偶然以上の背景は存在しないと考えられる。むしろ、後述するA区１次面においても類似する土坑が認められることを重視すると、中世以降、本地点周辺が再び墓域へと転じたと評価することを可能としよう。

墳丘は、検出時にすでにSB004・SB006・SB024など墳丘下に存在する先行遺構の覆土が部分的に露出していることが確認され、面的な確認はなかった。そこで調査区東壁を検討すると、SB004・SB006の覆土上層にはこれらの遺構覆土と異なる黒褐色粘質土の堆積（13層・14層）が確認された。その堆積は堆積上面が水平を指向する状況で、自然堆積による凹みの埋没ではなく、凹みを平坦にするという意図的な埋め戻しが想起される。直上には類似する黒褐色粘質土層（７層）が墳丘範囲を覆って広範囲に堆積している。北側では周溝内へ流入しているが、南側をみると周溝の立ち上がりに呼応する状況が確認できる。この点を評価すると、先行遺構の埋没過程における地形の凹凸を埋め戻してから盛られた墳丘最下層の可能性が考えられる。さらに、この土層はより細かい分層把握が極めて困難であったことから、墳丘構築のベース面として整地された可能性も考慮される。７層直上は基本土層である２層耕作土となり、さらに上位への墳丘盛土の存在は確認されない。ただし、墳丘上には認められない３層洪水砂層の堆積が周溝内にのみ確認され、少なくとも９世紀後半代までは周溝埋没面よりも高い墳丘が残存していたと考えられる。



周溝内出土人骨



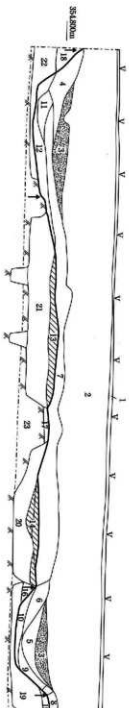


図179 SZ002実測図（S＝1/100）

埋葬施設は検出されなかった。また、副葬品と考えられる遺物の出土も認められない。

遺物は周溝内より土器が出土している。図180に掲載した遺物のうち、6～10、17・18の蓋・甑・脚部片はいずれも箱清水式土器で、周溝の重複により破壊された箱清水期遺構に伴うと考えられる。これらを除外した1～5、11～16は、周溝南側のSB001が重複する付近からまとまって出土しており、ちょうどこの部分は前後の遺構重複がなく、周溝覆土がほとんど攪拌されていない部分に該当することから、本墳に伴う可能性が高いと判断できる。覆土上層より出土した5を除く土器群は周溝外側の壁から周溝底にかけて底部に密着した状態で出土している。配列された様相は認められず、また、出土土器片間にほとんど接合関係が認められなかったことから、本来墳丘上に存在したものが、周溝埋没が始まる以前の初期の段階で転落したと捉えられる。

1はS字状口縁台付甕である。口縁部の小片で、体部は残存していない。本例のみ雲母粒を含む白色胎土で、他と大きく異なる。2はく字状口縁ハケ調整甕の口縁部片である。外面はナナメハケ、内面はヨコハケが施されている。3・4は小形丸底坩である。3は球形の体部片で、頸部内面には明瞭な屈曲点を有する。4は口縁部が有段口縁状に大きく開き、体部最大径を上回る形態を呈する。11～15は高杯の脚部である。いずれも屈折脚高杯で中空成形である。外面調整は縦方向のミガキであるが、12・13には1次調整のハケメが観察される。脚内面は13がケズリで、11・15がユビナデで、14は輪積み痕を明瞭に残す。16は器台である。杯部は小型で浅く、脚部はハ字状に大きく外反する。外面はハケ調整で、脚部にはその後粗いミガキが施される。脚内面はケズリである。なお、杯底部中央の円孔は認められない。19は把手状の棒状品で、剥離・脱落したと考えられる。断面円形を呈するが、残存部中央を指で潰し、水滴形にしている。

さて、これらの土器群のうち、3・4の小形丸底坩と11～15の高杯、16の器台は型式上共伴関係として積極的に評価でき、本墳に伴うと判断できる土器である。また、1・2の甕は小破片のため、前代に遡る可能性が残り、本墳への帰属を積極的に評価することに躊躇を覚える。

青銅製品ならびに鉄製品としては銅鈴・鉄鏃が出土している。銅鈴は小破片が周溝南側の覆土中より出土している。残存状況は極めて悪く、端部が一部でみられるのみで幅も特定されない。出土時には3片に割れていたが、すべての破片が同一個体とみられ、本来はひとつであったと考えられる。意図的な破砕や打ち延ばしの痕跡、あるいは垂飾品等への転用痕は認められない。出土位置からはSB004に本来帰属する可能性が想定される。鉄鏃は

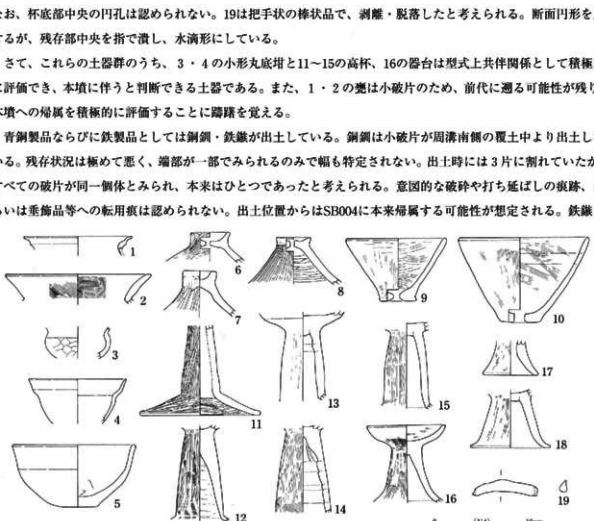


図180　SZ002周溝内出土土器実測図（S＝1/4）

2点出土している。図181－3は全長4.9cm、鏃身部最大幅1.3cmを測る圭頭鏃である。切先を欠損しているとみられるが、ほぼ完形品である。南側周溝の内側底部直上より出土し、SB019等に伴う可能性が考えられる。4は残存長3.8cmを測る、鉄鏃関部付近の破片とみられる。関は直角関で欠損する切先へ向けて刃部となる。茎部は長方形を呈するが、不自然に屈曲する。錆化が著しく、欠損を含めて本来の形状を留めていないと判断される。3同様に周溝南側の覆土中より出土し、重複遺構からの混入の可能性が考えられる。

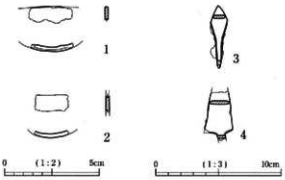


図181　SZ002周溝出土金属製品実測図

（S＝1・2；1/2　3・4；1/3）

以上より、SZ002は古墳時代前期後半代の円墳と考えられる。

SZ001（篠ノ井・高畑1号墳）（PL－20・21・23・24、PL－XII－7・8）

調査区の最も南西側で検出された古墳である。東側で2号墳の周溝と近接し、西側およそ1/3が調査区外となる。西側調査区外に造出などの施設が存在する可能性が残るが、検出部分でみるかぎり、周溝は円形を描き、円墳と判断される。直径は周溝外法で19.2m、周溝内法で14.0mを測る。

周溝は途切れることなく円形に巡ることが確認された。周溝幅は2.1～2.5mを測り、2号墳と接する東側で若干細くなる。なお、北側で若干周溝幅が広くなるが、これは重複遺構（SB003）の影響によって若干外側に広がった結果である。

周溝底は東南側で階段状の掘り込みが確認され、北へ向かって深くなっている。北側ではこの階段状の掘り込みは認められず、緩傾斜を有して徐々に浅くなる。その結果、西壁断面では南側と周溝底がほぼ同一高になっていることが確認された。また、この階段状に深く掘り込まれた部分は基盤層の黄褐色粘質土ブロックが混じる暗褐色土で上層覆土とは大きく異なり、遺物もまったく含まれていなかった。周溝東側ではちょうどこの階段状の掘り込み上部より土器群がまとまって出土しているが、いずれも浮き上がった状態で検出されている。ただし、土器群はほぼ階段状掘り込みの覆土上面より出土しており、周溝南側で周溝底に密着して出土した土器群とほぼ同じ高さとなる。これらの諸点からは、周溝は掘削後に埋め戻しが行われ、ほぼ一定の高さに整形された可能性が想定される。また、この想定に基づくと、階段状の掘り込みは周溝掘削の作業単位となる可能性が考えられる。

墳丘については、墳丘範囲内で検出されたSB003掘り込み上面を覆う土層の存在が確認され、墳丘盛土の残存が面的に予測された。調査区西壁を検討すると、20層基盤層、16層漸移層によって形成される旧表土層上に15層として一括した暗褐色粘質土層の堆積が認められる。この土層はSB003上面を含めて墳丘範囲を覆い、さらに類似した暗褐色系の粘質土が小ブロック単位で堆積していることが確認できた。類似土層のブロック状堆積は他では認められない状況で、面的な確認状況と合わせて墳丘盛土最下層と捉えることができる。その直上の6層暗褐色粘質土層は墳丘を広く覆って堆積し、周溝内へも流入している状況が確認された。周溝内においては仁和洪水砂に比定される4層洪水砂層が上部に堆積していることから6層の堆積は9世紀後半代以前に遡ることが確実である。また、墳丘上を掘り込んで構築された平安時代のSB002は掘り込みがほとんどみられなかったことから、SB002構築時にはさらに高く墳丘が残存していたことが確実視される。すると6層形成の背景を自然堆積に求めることは難しく、墳丘盛土であった蓋然性が高いと考えられる。さらに周溝内への流入が削平・整地によって発生したと想定するならば、墳丘の大幅な削平がSB002以後仁和洪水発生までに限定できることを示すと捉えられ、注目される。

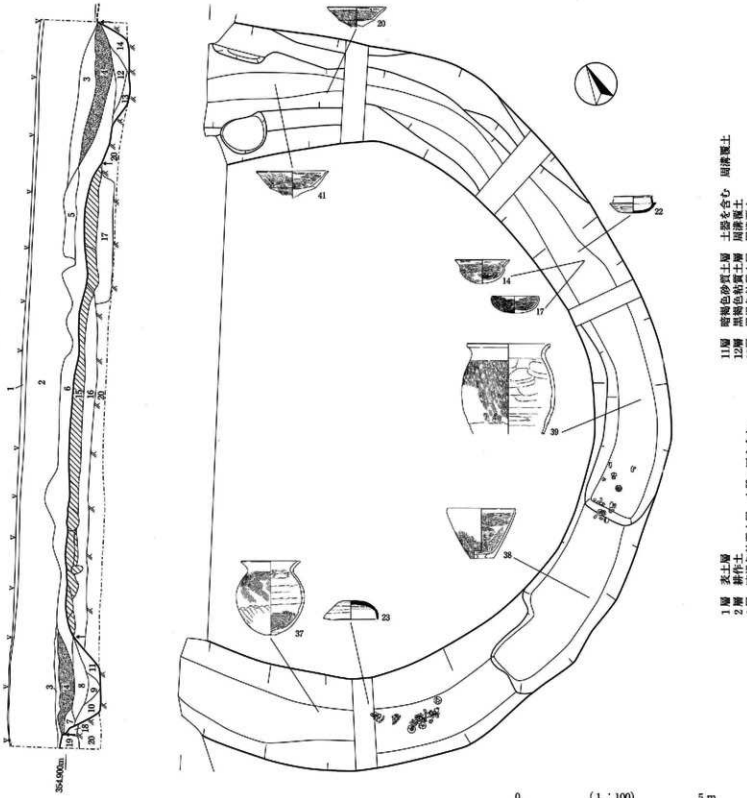


図182 SZ001実測図（S＝1/100）

埋葬施設は墳丘の削平とともに失われたと考えられ、痕跡を含めて検出されなかった。また、副葬品と考えられる遺物の出土も認められない。

本墳に関連する遺物は周溝内より土器群が出土している。土器群は周溝覆土中より出土し、周溝東側と南側の２箇所で周溝底よりまとまって検出されている。

周溝南側の土器集中①では、周溝底に密着した状況で土師器高杯・甕が出土している。土器群の主をなすのは小型高杯で、周溝に併行して帯状に破片が出土している。破片の状況を観察すると、ほとんどの個体が脚部と杯部が分離して杯部は逆位、脚部は横倒しの状態であった。接合関係は周辺の破片が接合してほぼ復元される状況で、設置後、破砕された可能性が高いと考えられる。大型の有稜高杯はこれらの外側に接して配置される。９の有稜脚部の大型高杯は正置される。同一個体とみられる杯部は隣接して正置状態で割れており、意図的に杯部をはずし配置されたとみられる。また、７の椀形杯の大型高杯はこのまとまりの両側に杯部と脚部が分かれていた。これは設置以前に杯と脚が割られたと考えられ、８とともに大型高杯の取り扱いが小型高杯とは異なることを示している。さらに甕がこれらの土器群の北側に若干離れて単独で位置していた。なお、この甕は土器群での配置状況や外面がミガキ調整によっていることから、壷を意識して使用された可能性が高い。以上より、小型高杯が５個体設置され、それに接して大型高杯が正置される。これらを挟むように大型高杯が杯と脚を分離した状態で配され、北西側に若干距離をおいて甕が設置されたと考えられる。破砕はいずれの段階か定かでないが、大型高杯が分離・配置されていることからはすべてを設置し終えてからではなく、設置された小単位で行われた可能性が考えられる。

土器集中①では出土した土師器高杯と甕をすべて図化・掲載した。高杯は７点である。３と４、８と９は直接の接合関係はないが、胎土・焼成などより同一個体とみられる。高杯は大きく３種に分類し、把握することができる。第１群は脚部の膨らみが顕著で、杯屈曲部に顕著な接合痕を残さないもので、１・２・６が該当する。色

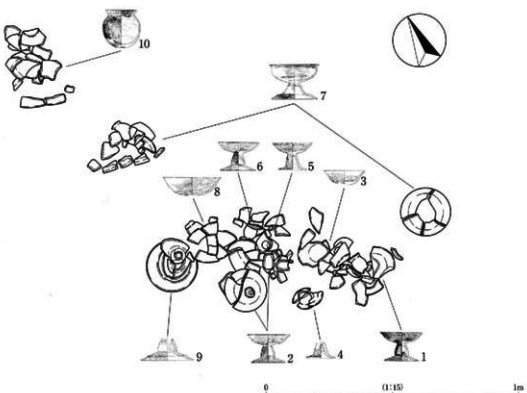


図183　SZ001周溝内土器集中①出土状況（Ｓ＝1/15）

調はいずれも明橙色である。1と6は器高・口径ともにほぼ同大で、内外面の調整、脚部と杯部の接合方法、脚裾部の接合方法など成・整形でも非常に類似する。2は1・6と形態・大きさなどで類似点が多いが、脚裾内面にまで横方向のミガキ調整が施され、高杯の一般的調整方法から逸脱して異彩を放つ。第2群は脚部の膨らみが弱く、杯屈曲部に明瞭な接合による段部をもつもので、3・4・5が該当する。この2個体は第1群とは対比的に区分されるが、相互の類似性は低い。特に杯部の形態は3が直線的に開く中期高杯の伝統的形態を保つのに対し、5は浅く内湾ぎみで第1群の形態に近い。第3群は脚部有稜の大型高杯で、7・8・9が該当する。7は杯部が椀形を呈し、脚部は膨らみが弱くハ字形に開いて有稜の脚裾部へと続く。椀形杯の内面は黒色処理される。外面は表面の剥離が顕著で、打ち欠きが行われた可能性が高いと考えられる。8と9は杯・脚ともに稜を有する大型高杯である。杯部は第2群同様に接合部で擬口縁状に稜を形成し、脚部は膨らみが顕著で第1群に近い。杯内面は黒色処理が施される。杯部外面には表面の剥離が観察され、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。なお、8と9の色調は第1群に類似し、脚形態とともに関連性が想起できる点で注意される。甕は1点で、器高15cm、口径12.1cmを測る小型の甕である。外面調整はハケによる1次調整の後に全面ミガキ調整が行われたとみられる。口縁部内面はミガキ、体部内面はヘラ状工具によるナデ調整である。

周溝東側の土器集中②では、前記したように周溝の階段状掘り込みの上面より土師器高杯・杯、須恵器甕が出土している。階段状掘り込みの底面より浮いた状態であるが、南側の周溝底とほぼ同一高にまとまっていることから、埋め戻しによって整えられた周溝底上より出土していると捉えられる。土器群のまとまりはみられるが、南側の土器集中①ほど明確に設置された状況は看取されない。土師器杯2点は打ち欠きの痕跡が認められたうえ、正置された状態で出土していて意図的な配置の可能性も想起される。土師器高杯はそれぞれほぼ完形に近く復元されたが、破片は比較的広範囲に散らばる状態で出土している。さらに、13の脚部と11の杯部の重なりや15の脚

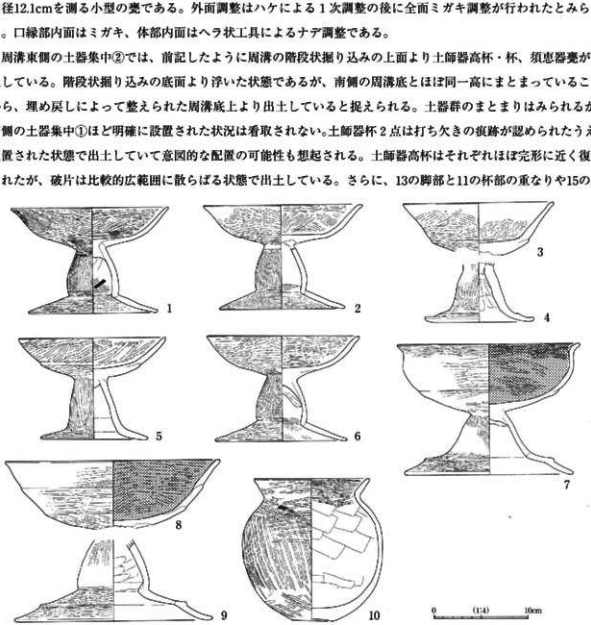


図184　SZ001周溝内土器集中①出土遺物実測図（S＝1/4）

部と14の垂直方向の位置関係からは、土器集中①のような周溝内への土器配置が行われたとするには不自然な状況と考えられる。墳丘からの転落を想定することが素直であろうが、周溝のほぼ中央で打ち欠きがみられる杯周辺に高杯がまとまって位置することからは意図的な投棄の可能性も指摘しておきたい。また、北側に隣接して出土した須恵器甕は出土高が他の土器群よりも若干高い部分で一定する。高杯・杯とは周溝内に入り込んだ時期に時間差が想定され、墳丘からの転落と捉えられる。以上より、土器集中②は周溝内への土器投棄と墳丘上に設置された土器群の転落によって形成された結果と考えられる。

土器集中②では土師器杯２・高杯３・須恵器甕１を図化・掲載した。図化できない別個体の小片も混じっており、この点、墳丘からの転落が混じるとした先の想定と矛盾しない。11の杯は口縁部の外反はほとんどみられないが、口縁内面は内斜した面を有する。外面には表面の剥離がみられ、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。また、丸底の底部には鋭利な工具による線刻状の刻みが観察される。12の杯は口縁部が大きく外反し、口縁内面には内斜した面を有する。また、杯内面には黒色処理が施される。底部は欠損し、接合する破片などは認められなかった。体部下半外面には表面の剥離が認められ、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。杯２点にはともに打ち欠きの痕跡が認められ、さらに２点ともに正置して出土した点は注意される。高杯は３点出土しているが、このうち、13と14の２点は口径・器高・底径にみる大きさや形態、整形、調整、色調（明赤褐色）のいずれの点でも非常に類似し、注目される。杯部は水平な底部から屈曲して直線的に開く形態を呈する。屈曲部は接合部を生かし、稜をなす。脚部は細く、ほとんど膨らみを持たない。シボリ技法によって成形され、内面は縦方向のナデ調整が施される。脚裾部は脚部に被せて接合し、内面に接合痕をそのまま残す。調整はミガキで、杯外面は半時計回りの方向に弧状にミガキがなされる。胎土・色調もほぼ同一で、素地造りから形態・成形・仕上げといず

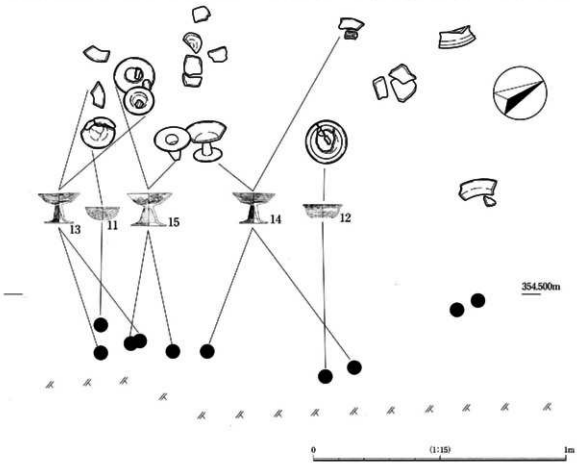


図185　SZ001周溝内土器集中②出土状況（Ｓ＝1/15）

れの工程も同一の手順とみられ、ミガキや脚内面にみるクセは同一者による製作と評価することができる。15は13・14とは異なり、重心が下方にあって安定観を与える中期後半代の特徴的形態である。杯部は屈曲部の稜が不明瞭で、内湾気味に口縁へと延び、丸く収める。脚部は弱いながらも膨らみをもってハ字状に大きく開き、脚裾部の水平方向への広がりはほとんどみられない。なお、形態・大きさ・胎土・色調などで周溝内出土品である22（図187）と極めて類似する。杯脚接合部外面のハケや杯内面をハケ後ミガキによるという調整や杯脚接合のホゾを指で2回潰し、脚内面をヘラ状工具でナデ調整し、部分的に輪積痕を残すという脚内面に残る製作のクセは両者に共通し、これも13・14同様に同一製作者による可能性が想起される。須恵器甕は口縁から体部上半で、底部は残存していない。口縁部は肥大化して面をなし、直下に1条のシャープな突帯を有する。頸部外面はカキメ調整が施され、文様は施文されない。肩は頸部よりほぼ水平方向に延び、よく張る。体部外面は平行タタキ調整で一定間隔に圏線様のカキメ調整が施される。内面は丁寧な青海波の半スリケシである。

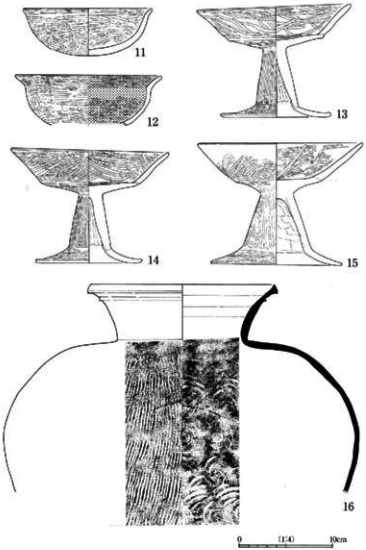


図186　SZ001周溝内土器集中②出土遺物実測図（S＝1/4）

このほか、周溝覆土中より土師器高杯・杯・壷・甕・甑、須恵器杯が出土している。周溝底にほど近い部分から出土したものは図182にその位置を明示したが、特にまとまった状況や周溝内に設置されたと想定される状況ではなかった。周溝底に密着する状況もなく、大半は墳丘上に設置された土器群が転落したと考えられる。

周溝北西側より出土した2点の高杯（24・25）はともに脚部を欠損する。25は復元口径19cmと大型の杯部となり、内外面ともにハケメによる1次調整後、ミガキを施す。このハケメによる1次調整は屈曲部の接合面ならびに端面にも認められ、杯底部を成形して1次調整を施した後、口縁部を積み上げたことがわかる。口縁端部はナデによってシャープな面を作り出している。

周溝東側からは土師器杯・須恵器杯が隣接して出土している。19の土師器杯はほぼ完形品で、丸底から半球形の体部を経て口縁部で大きく外反する。口縁内面は内傾する面をなす。内面は黒色処理が施される。17の土師器杯は口縁部が明らかに内湾する半球形の杯である。外面は全面にわたってヘラケズリによって整形され、その後ミガキが施される。37の須恵器杯はほぼ完形品で、口径10.3cm、器高4.6cmを測る。口縁内面には明瞭な段を有する。杯底部の回転ヘラケズリは半時計回りに体部2/3以上に及ぶ。内面から立ち上がりの外面にかけて朱の痕

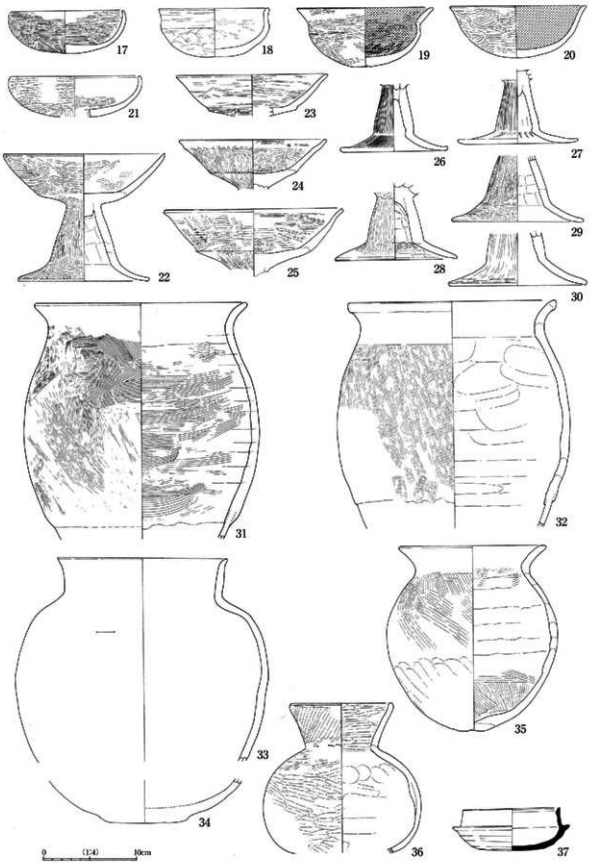


図187　SZ001周溝内出土土器実測図（1）（S＝1/4）

跡が明瞭に残る。朱の付着には濃密が認められ、内面に朱を塗ったのではなく、朱を入れた容器として使用された可能性も考えられる。受け部上には蓋をして焼成した痕跡が観察され、底部には別個体の破片癒着がみられ、重ね焼きが確実であるが、セットをなす蓋は存在しない。

土器集中②の両側からは土師器甕・甑などが出土している。土器集中②ほどのまとまりはみられなかったが、比較的多くの土器がこの付近より出土している。32はハケ調整甕で、胴下半の接合部以下を欠損し、底部は認められない。また、近接して31の内外面ハケ調整甕が出土している。32同様に接合部以下の底部を欠損する。このほか、ハケ調整で球胴の小型甕（35）も出土している。

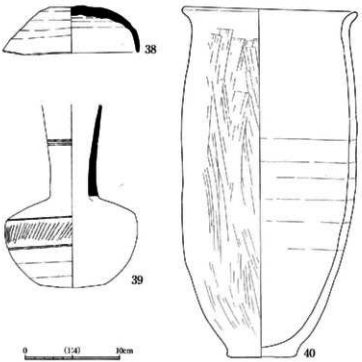


図188　SZ001周溝内出土土器実測図（2）（S＝1/4）

壷は直口壷が2点出土している。大型の33・34は直接の接合関係はないが、胎土などより同一個体とみられる。体部外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整が施される。底部は平底で穿孔などは認められない。36は該期土器組成に新たに加わる小型の直口壷である。口縁部は内湾し、胴最大径は下方にみられる。周溝南側（覆土中下層）と東側（覆土上層）から出土した破片が接合し、墳丘上からの転落が確実視される。

18の杯はいわゆる模倣杯で、口縁外面はミガキ、体部外面は静止ヘラケズリの後ミガキ調整が施される。杯内面に黒色処理は施されない。周溝北側覆土中上層から出土していて共伴関係の確定は難しいが、出現期の模倣杯として組成をなす可能性は高いと考えられる。

高杯は脚部を中心にさらに6個体を図化・掲載した。26・27はともに杯部が存在しないが、脚形態・胎土・色調ならびに脚内面のナデ調整など酷似し、これもまた2個体一対として同一製作者の可能性が想起される。29は杯部を欠損するが、形態・胎土・色調ならびに脚部内外面の調整方法において15・22に極めて類似する。

また、38の須恵器蓋は周溝南側で覆土最上層の8層上面より出土している。覆土上位出土の須恵器長頸壷（39）や土師器長胴甕（40）と合わせて古墳時代後期の所産で、本墳に伴うものではない。出土層位が洪水の影響をまったく受けていないと断ずることはできないが、周溝埋没時期を何ううえで示唆的な資料となりうる。また、38は焼け歪みが著しく、降灰ならびに同時焼成された他器種片が癒着する焼成不良品で、近隣に生産地が存在することを示唆するものであろうか。

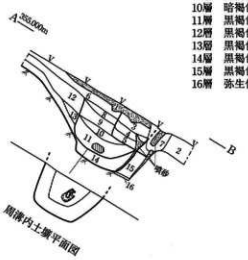
以上の様相より、古墳時代中期後半代の円墳と考えられる。

SZ003（篠ノ井・高畑3号墳）（PL－25・26・27・28、PL－XII－8・9・12・13）

調査区のほぼ中央部、東壁寄りに位置する。北側でSZ004と隣接するが、周溝間の重複はみられない。南西側ではSZ002と並列するが、SZ004との位置関係に比べ、一定の間隔を置いた位置関係となる。

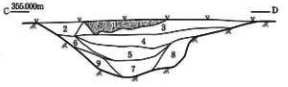
直径は周溝外法で17.5m、周溝内法で13.0mを測る円墳である。東側で調査区外へと続くが、ほぼ全体形が把握できた。周溝は最大幅3.0m、最小幅1.5mを測り、南西側で太く、北東側で細くなる。周溝底は北西側が最も

1層　にぶい黄褐色砂層　洪水砂
2層　暗褐色砂質土層
3層　黒褐色粘質土層　SB037覆土
4層　暗褐色粘質土層　SB037覆土
5層　黒褐色粘質土層　SB037覆土
6層　暗褐色砂質土層
7層　黒色粘質土層　ピット覆土
8層　黒褐色粘質土層　焼土粒・炭化物含む　土壙覆土
9層　黒褐色粘質土層　土壙覆土
10層　暗褐色砂質土層　土壙覆土
11層　黒褐色粘質土層　土壙覆土
12層　黒褐色粘質土層　周溝覆土
13層　黒褐色粘質土層　周溝覆土
14層　黒褐色粘質土層　周溝覆土
15層　黒褐色粘質土層　弥生住居覆土
16層　弥生住居貼床

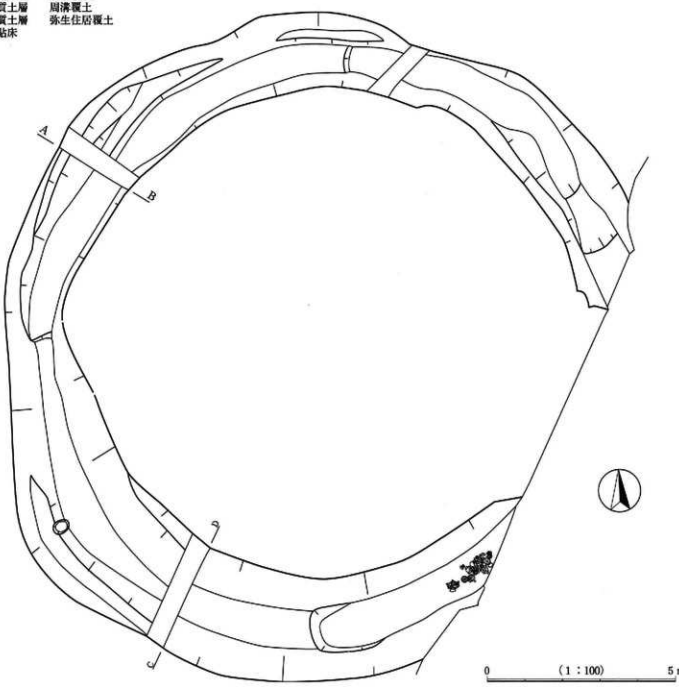


0　(1：50)　5m

1層　にぶい黄褐色砂層　洪水砂
2層　黒褐色粘質土層　周溝覆土
3層　黒褐色粘質土層　焼土粒・炭化物を含む　周溝覆土
4層　暗褐色粘質土層　周溝覆土
5層　黒色粘質土層　周溝覆土
6層　黒褐色粘質土層　周溝覆土
7層　黒褐色粘質土層　土器含む　周溝覆土
8層　暗褐色砂質土層　周溝覆土
9層　暗褐色粘質土層　炭化物含む　周溝覆土



0　(1：50)　5m



0　(1：100)　5m

図189　SZ003実測図（S＝1/100）

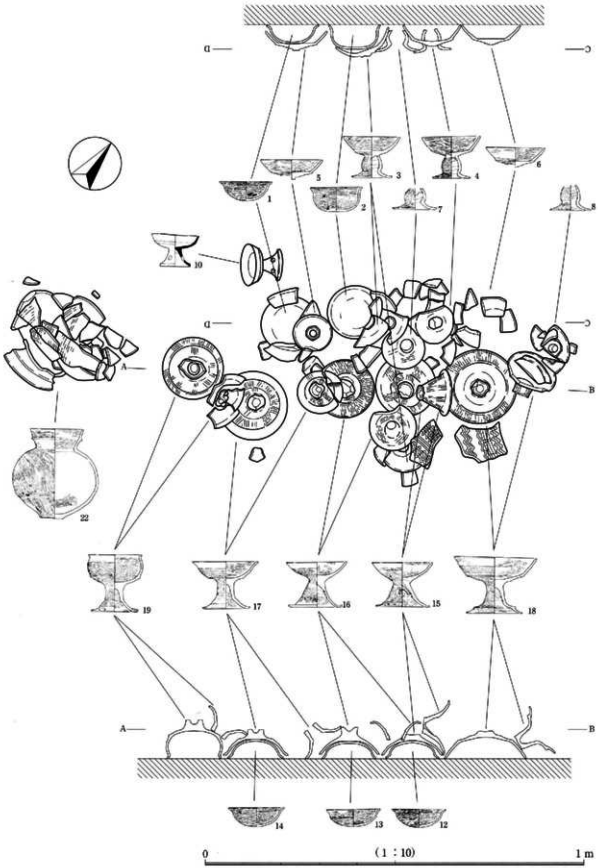


図190　SZ003周溝内土器出土状況（S＝1/10）

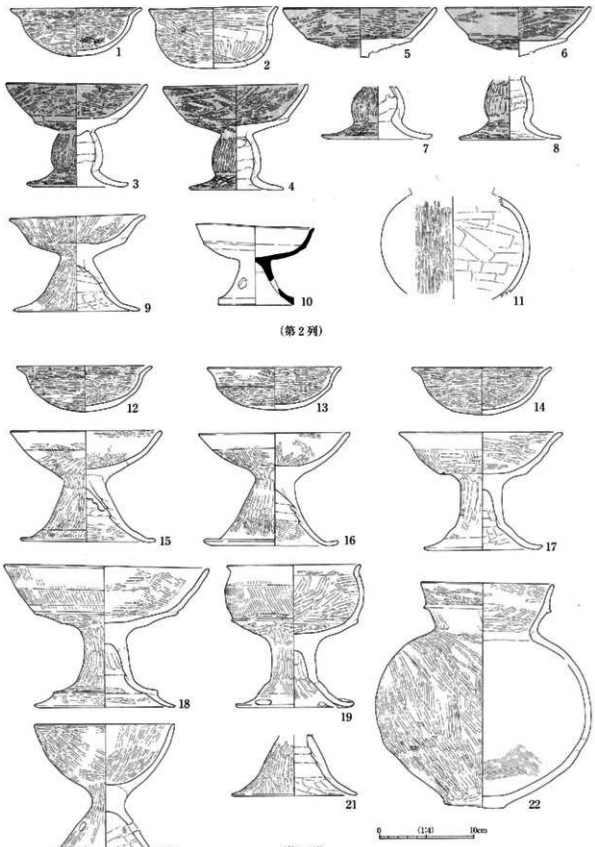


図191　SZ003周溝内出土土器実測図（1）（S＝1/4）

浅く、東側ならびに南側に階段状の掘り込みが検出された。ただし、この階段状の掘り込みはそれほどの高低差がなく、SZ001でみられたような大きな段差とはなっていない。埋め戻しと考えられる整地土層は最も掘削が深くなる南側で確認されたが、他の地点では観察されなかった。また、この階段状の掘り込み幅はほぼ一定の範囲となり、これを周溝掘削の作業単位と捉えた場合、周溝を4分割して掘削した可能性が考えられる。周溝の断面形態は周溝外側が緩く、墳丘側に急に立ち上がる。この形態は周溝の太さに関わりなく、基本的な形態と捉えられる。

周溝内ではちょうど北西側の土層観察用のベルト（A－B）にかかる位置で土壙墓が1基検出されている。幅0.9mを測る長方形土壙と考えられるが、北側では周溝覆土との区分が不明瞭で把握できず、全長は明らかにできない。土壙底からは頭蓋骨が検出された。頭蓋骨以外に骨片の広がりを探したが、不明瞭であった北側を含め他に骨片は確認されなかった。木棺の痕跡も確認されず、特に頭蓋骨下で木棺底板や遺体を包んだ有機物の痕跡を精査したが認められず、土壙への直葬と考えられる。副葬品等の遺物も出土していない。土壙覆土は周溝覆土と類似する暗褐色から黒褐色粘質土を主体とするが、土層観察用のベルトにかかっていたため、周溝覆土を掘り込んで構築されていることが確認された。仁和洪水砂下に堆積する6層直下より掘り込まれ、掘削深度は約0.55mを測る。覆土最上層の8層では焼土粒・炭化物が検出されたが、これは下層に及んでおらず、土壙内で火が使用された痕跡は認められない。埋葬完了後、土壙上面で火を使用したのであろうか。副葬品等が出土していないため時期の特定は難しいが、上層ではSB037に掘り込まれていることが確認され、仁和洪水以前の平安時代前半期を遡ることが確実である。また、周溝覆土を掘り込んでいることからは周溝がある程度埋没した段階以後、SB037構築（9世紀代）以前に限定される。周溝埋没がかなり進んだ段階での構築であることから、本墳との直接的関連性は薄く、周溝内埋葬とは異なる後代の独立遺構であると考えられる。

墳丘は確認されなかった。検出時には墳丘下に存在するSB032・SB047などの輪郭が不明瞭ながら確認することができ、墳丘は最下層の一部が若干残存していたに過ぎないと考えられる。また、SB037・SB040など後代の竪穴住居が墳丘を掘り込んで位置する状況は他古墳にはみられない様相で、この点からも墳丘の削平が他古墳に比べて著しかった可能性が高いと考えられる。

埋葬施設は痕跡を含めまったく検出されなかった。また、副葬品と考えられる遺物の出土も認められない。

本墳に伴う遺物としては、周溝南側の東壁際より周溝底に設置された土器群が検出されている。写真でみると土器群が浮き上がっているが、これは周溝底下に竪穴住居が存在していて、これを多少掘り込んでしまったことによる。写真奥側にみられる掘り込み上面が周溝底となり、ほぼ底面に設置されていると把握できる。土器群は土師器・高杯を主体とし、土師器杯・壺・須恵器高杯より構成される。配列状態は周溝の周回方向に合わせて土師器・高杯が二列で逆位に設置されて中心をなし、その北側に正置されたと考えられる須恵器高杯が1点、また、西側に若干距離を置いて列の延長線上に土師器壺が1点配置されていた。土師器杯は逆位に設置された高杯杯内より同様に逆位に伏せて入れ子状をなして検出されている。

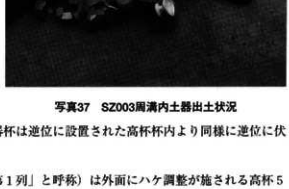


写真37　SZ003周溝内土器出土状況

二列の高杯のうち、南側の列（図190のA－B列、以下「第1列」と呼称）は外面にハケ調整が施される高杯5個体より構成される。西端部に杯部椀形の高杯（19）、東端部に有稜の大型高杯（18）を置き、この間に小型高

杯（15～17）が配される。いずれも逆位に設置され、脚部は折れた状態で検出されている。脚部はどの個体も西側の杯部と接合し、逆位に設置後、西側より東方向に脚部を破砕した可能性が想定される。中央に配された3個体の小型高杯内には高杯同様に伏せられた土師器杯（12～14）が入れ子をなして設置されていた。杯はどれも完形で、重なる高杯との間に土層が存在しなかったことから、杯と高杯の設置は連続して実施されたと考えられる。両端部の高杯杯内からは杯の出土がなかったが、東端部に配置された18の高杯杯下よりは20の高杯が出土している。20の高杯は脚部が裾と脚の2片に、杯部はバラバラに割れ、口縁は1/2弱と他に比して残存状況が悪い。さらに出土状況は18下の土に混じって出土しており、杯のように高杯内に納められたものではない。また、西側の17の高杯杯部周辺からは21の高杯が出土している。この高杯は唯一杯が存在しない個体で、接合片もみられない。さらに赤彩された第2列と同様な形態の高杯脚部片（1/2弱）が17の南側下層より出土している。この破片も21同様に接合片はまったく認められず、当初から脚部片のみの状態であったと考えられる。

北側の列（図190のC－D列、以下「第2列」と呼称）はミガキ調整後赤彩が施される小型高杯4個体（3～8）より構成される。いずれも逆位に設置され、脚部はすべての個体で割れていた。脚部が第1列南側に大きく離れる3のような事例などもあって明瞭さを欠くものの、杯5と脚7、杯6と脚8が同一個体とみられ、基本的に脚部が杯部の東側に位置して第1列同様に西側から東方向にむけて折られたと考えられる。杯は逆位に設置された西側2個体の高杯内（3・5）より入れ子をなしていたが、東側の2個体からの出土はない。杯は完形で高杯杯部との間に間層を挟まないことから、第1列同様に連続して設置されたと考えられる。また、最も西側の高杯5の下層からは11の直口壺が出土している。胴部1/3程度の破片で、器壁表面が剥離するように割れており、破砕された可能性が考えられる。口縁ならびに底部はもとより接合する破片がまったくみられず、単独破片の出土はいささか不自然な出土状況であった。

土器列の検出時の破片の重なりをみると、まず、第2列5の杯部片が第1列16の杯部上に被さり、また、第2列5の脚部と考えられる7は第1列15の杯部上に被さることから、5の脚部破砕時には15・16が設置されていたと捉えられる。さらに第2列3の杯部片は第1列16の杯部上に被さっており、3の破砕時には16が設置されていたと想定できる。以上の破片の重なりからは第1列15・16と第2列5・3は同時に設置されたと理解される。これらはいずれも高杯杯内に杯が入れ子に配されたもので、破片重複がない17を含めて高杯と杯を重ねるものは同時に二列に設置されたのであろう。一方、第1列18の伏せられた杯内からは第2列4の脚部片が出土しており、第2列4の脚部破砕時には第1列18は設置されていなかったことが確実である。また、第2列4の破片は第2列5の脚部である7の上に被さっており、4の破砕時にはすでに7が存在した可能性が考えられる。このことからは第2列4は第2列5の脚部破砕後に設置され、さらに4の脚部破砕後に第1列18が設置されたという各個体ごとの追加設置・脚部破砕という状況が想定される。これら第2列4と6・8、第1列18はいずれも杯を伴っていなく、これが設置状況の違いを生じさせている一因の可能性として注意される。

脚部の破砕は第2列3の脚部が第1列16の脚部下に入りこんでいることから3が16に先立つことは確実で、第1列に先行して第2列が実施されている可能性が高い。さらに第2例内でも最初に設置された2個体の破砕後、追加設置・脚部破砕が行われた可能性が考えられ、列として一斉に破砕を行っているのではないとみられる。第1列は第2列とは対照的に、追加設置された18の杯部上にこれに先立って設置された15の脚部が重なることから、18の設置後に一斉に実施された可能性が考えられる。さらに第1列16の杯部破断面上に17の脚部が被さることが示すように、東側の個体より西側の個体へと実施されていった可能性が高いと考えられる。

第2列に接して配置された須恵器高杯は逆位ではなく、破砕もみられない完形品であることから、列をなす土器群とは取り扱いが異なっている。この須恵器高杯下よりは9の土師器高杯が出土している。ほぼ完形個体で、

須恵器高杯下の土の中に埋まった状態で出土した。土師器壷は土器列の延長線上に一定の間隔を開けて独立的に配置されている。口縁部を下にして潰れた状態であることより墳丘上からの転落とも考えられるが、周溝周回方向に合致した土器列延長線上に位置することから、他の土器とともに周溝内に配置されたと捉えられる。

さて、二列の高杯は列ごとに器形や調整方法が同じ高杯によって構成され、混在しないという特徴を持っている。これは列をなして配置された土器群が意図的に選別されていたことを示している。つまり、配列以前の使用単位がこの列に反映されている可能性が想起され、それが同一箇所に配置されるという廃棄パターンをも示す良好な状況と評価できるであろう。

第1列より出土した高杯は7個体認められ、このうち、列をなして設置された15～19は内外面に1次調整のハケメを各所に残している。15・16は浅い半球形の杯部にハ字形に広がる脚部形態となる。外面調整はハケメによる1次調整後、粗いミガキが施されハケメを残す。口縁部内外面はヨコナデが加えられハケメはスリ消されている。脚内面は杯脚連結のホゾを一方に押しつぶしてから軽いナデを行い、脚成形痕を明瞭に残している。脚裾はハケ調整後ナデが加えられるが、ハケメは各所に観察される。この15・16の2点の高杯は器形・大きさ・成形・調整・胎土・色調のいずれの点でも酷似し、特に脚内面に残る製作痕は他人の空似以上に見えない部分に残る製作者のクセとして理解され、同一者によって製作が行われた可能性を想起させる。17は外反する口縁の浅い杯部で、杯下半の屈曲部は接合部を利用しているが、明瞭な稜をなしてはいない。脚部は膨らみをほとんど持たない柱状脚にハ字形に広がる裾部形態となる。調整はハケメによる1次調整後、粗いミガキが施され各所にハケメを残す。口縁内外面はヨコナデが加えられている。脚内面はヨコナデにより、裾の接合痕のみ残す。裾部はヘラ状工具によるナデが施される。本個体は杯・脚・脚裾の各接合部が膨らみを有して、痕跡がよく残ることが特徴として指摘される。18は有稜の大型高杯である。口径21.7cm、器高15.0cmを測る。杯部は外傾して直線的に延び、口縁径は脚裾径を大きく上回る。杯下半では底部と口縁部の接合部を利用して、直上部をヨコナデによって凹ませ、稜を形成している。脚部は膨らみをほとんど持たない柱状脚で、裾部は接合部を段として1条の稜線となしている。調整はハケメによる1次調整後ミガキが施され、杯内外面・脚裾内外面に明瞭にハケメを残している。脚内面は連結用のホゾの突出を除去し、ナデによって丸く収めている。脚成形痕はみられないが、裾接合部のみ痕跡を残す。脚部形態ならびに脚内面の状況は17の高杯に類似することが指摘される。19は椀形杯部の高杯である。口縁直下で大きく外反して口縁をなし、内面には屈曲点が明瞭な稜をなしている。杯下半には杯底部と脚部の接合部を利用して1条の稜を作り出している。脚部は膨らみを持たない柱状脚で、裾接合部が膨らんで脚端へとハ字形に広がる形態を呈する。調整は粗いハケメによる1次調整後、ミガキが施され、杯外面・口縁内面・脚裾内外面にハケメを残す。なお、杯内面はミガキによりハケメはほとんど認められない。脚内面は残存状況がよくないが、ホゾの突出を除去して、ナデによって丸く収めている。脚成形痕も縦方向のナデによって残存していない。20は鉢形杯部の高杯である。脚上部より半球形を呈し、口縁部は丸く収める。内外面ともに平滑に仕上げられ、稜あるいは不自然な屈曲はみられない。脚部は中位で若干膨らみを有するハ字形を呈し、水平方向への裾広がりはみられない。脚上部は中実で、ホゾによる接合方法はとらない。脚部中位には円孔が3方に穿たれる。調整はミガキで、ハケメは観察されない。脚内面は細かいハケメ調整の後、ヘラ状工具によってナデ調整が施されている。

杯は3点出土している。いずれも完形品で、14のみ一部割れている。調整は3点すべて内外面ミガキ調整が施され、平滑に仕上げられている。12と14は丸底で口縁が短く外反し、口縁内面は内斜する面を持つ形態を呈する。12は口径14.3cm、器高4.9cm、14は口径14.8cm、器高5.0cmをそれぞれ測る。口径が若干異なるが、ともに胎土には雲母を含み、器形も同一である。13は口径14.2cm、器高4.5cmを測り、丸底で口縁部は体部中位で屈曲して

外反する面をなし、いわゆる模倣杯の形態を呈する。12・14とは器形が異なるが、胎土に雲母を含む点や色調は類似している。

壷は有段口縁壷が1点出土している。出土時にはバラバラに割れていたが、完形に復元された。口径14.2cm、器高23.7cmを測る。頸部は肩部よりやや外傾して立ちあがり、ほぼ直線的に口縁部へと続く。有段部は外面に突帯を貼付けて形成され、内面段部はみられない。体部は胴中位で最大径となる楕円球形で底部は平底である。底部中央には凹みが認められ、輪台技法による可能性も考えられる。調整はハケメによる1次調整後、ミガキが施される。胴部外面ならびに口縁内面には粗いハケメが残されている。

第2列より出土した高杯4点は2点が杯部と脚部を別々に図化・掲載しているが、杯部5と脚部7、杯部6と脚部8は接合がほぼ確認できており、同一個体と判断される。4点の高杯はいずれも円盤状に成形された杯底部から接合面を利用した段を経て内湾気味に開く杯形態と強い膨らみを有してすぼまった脚下端より外側に大きく開く脚形態が共通する。また、ミガキ調整の方向も同一で、赤彩もすべての個体で認められ、調整・仕上げも共通する。大きさはほぼ同一であるが、5・7の個体が口径・底径ともに一回り大きい。また、脚内面に残る脚成形痕も5・7の個体のみがナデによって消されており、他の個体とは異なっている。微細な違いが認められ、すべてを同一製作者の手によると考えることは難しいが、4点の製作の指向性は基本的に同一であったと評価することは許されよう。杯部と脚部の分離状態は3以外の3点は杯底部や脚部に割れがなく、脚上面がほぼ水平な面をもつような不自然な状況であることから、鋭利な工具を使用して切り取った可能性が考えられる。また、3にのみ杯底面に打撃痕かと考えられる痕跡が認められ、杯底部の割れ方も異なる点が観察される。杯と脚が大きく離れて検出された個体であり、設置以前に破砕されて脚部と杯部がそれぞれ配置されたと考えられる。以上のように杯と脚の分離状態は第1列の高杯群とは明らかに異なり、脚破砕が第1列と第2列とでは異なるとした先の想定は土器に残された痕跡からも追認することができると考えられる。

杯は2点出土している。1は丸底で口縁で外反し、口縁内面に内傾する面をもつ形態で、第1列16・18と同一器形である。口径13.9cm、器高5.1cmを測り、第1列の2点よりも小さいが、色調・胎土を含めて非常に類似している。2は平底の深い杯である。口縁は外反し、口縁内面は面を持って屈曲点で稜をなしている。調整はハケメによる1次調整後、ミガキが施される。外面ならびに口縁内面にハケメが残っている。

10の須恵器無蓋高杯は欠損部がまったくない完形品である。杯部は蓋様の形状で、杯下半と口縁の間に1条の突帯を有する。口縁端部はわずかに外反して、明瞭な段をなしている。杯部の回転ヘラケズリは全体の1/2弱に及ぶ。脚部は貼付けで、ハ字形に広がって脚端部で面をなしている。透かし孔は3方向の円孔が斜め上方より穿たれるが、脚内面の円孔周辺は3箇所ともに器壁の剥離が認められ、焼成後穿孔の可能性も含め通例の穿孔とは異なる状況が想定される。焼成は堅緻、胎土は白色砂粒を含んで精良である。なお、口縁内面の一部には朱の付着が認められる。9は須恵器無蓋高杯下より出土した土師器高杯である。杯部は浅く、外面の屈曲点は接合部を利用して不明瞭な段状の稜をなしている。脚部はハ字形を呈し、縦方向のミガキ調整によっている。脚内面はホゾを潰した後ナデ調整を行うが、脚成形痕を明瞭に残している。脚裾部はヘラ状工具によるナデが施される。脚裾部は欠損部より器壁が剥離した不自然な状態で、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。11は直口壷の胴部片とみられる。胴部1/3程度の破片で、器壁が剥離して割れており、破砕の可能性が考えられる。

土器集中とは別に周溝内からも土師器高杯が出土している。23・24ともに周溝内に設置された土器群とは反対側の周溝北側より出土している。配置された状況は認められず、墳丘上から転落した可能性が考えられる。23の高杯は外反する口縁に浅い杯部で、杯屈曲部の接合面を生かして段状の稜をなしている。脚内面は脚成形痕を明瞭に残したナデ調整で裾部接合付近を中心にヘラ状工具によるナデを行う。形態・大きさ・成形・調整・胎土・

色調などいずれの点も須恵器高杯下より出土した9の高杯と酷似し、脚内面にみる成形や調整のクセからは同一製作者による製作の可能性を積極的に評価できる。また、第1列21の高杯脚部も大きさ・色調・脚内面の調整が同様で、杯部が残存していないため確実でないが、同様に評価することができる可能性が指摘される。24は脚部片である。膨らみを持つ脚形態は第2列の高杯に類似し橙色に発色しているが、赤彩は認められない。また、脚裾接合部を内面に突出させたまま残す点は第2列高杯群と大きく異なっている。

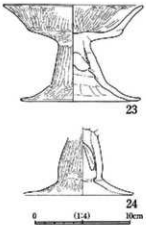


図192　SZ003周溝内出土土器
実測図（2）（S＝1/4）

このほか周溝内からは青銅製品・鉄製品・石製品の出土がある。25は帯状円環型銅鋲の破片で、周溝南西側の覆土中より出土した。残存長2cm未満の小片で、片側の端部のみが残存し、幅などは不明である。折り曲げによる切断や叩き延ばしの痕跡などは認められない。26は丸鞆かとみられる青銅製品の破片で、周溝北側の覆土中より出土した。断面形態をみると片側が丸みを持つ緩をなし、もう一方は平坦と表裏の区分が明瞭である。これにより向かって右下部に該当すると把握でき、角部には固定用の小円孔がみられる。27は銅鏃で、SZ003周溝付近の検出面より出土している。小型の柳葉形銅鏃で、残存長3.9cmを測る。鏃身部は切先を欠損し、土等が付着して脆弱である。鏃は観察され、両鏃造りである。関は両側ともに欠損するが、直角関である。茎部は先端を欠損し茎長は不明であるが、断面は円形を呈する。28も銅鏃で、墳丘下のSB050覆土中より出土している。SB050に帰属することが明らかであるが、周溝内出土の銅鏃と合わせて報告する。小型の柳葉形銅鏃で、残存長3.9cmを測る。鏃身部は切先を欠損するが、残存状況はよい。鏃が明瞭に観察され、両鏃造りである。関は両関ともに先端部を欠損するが直角関である。茎部は先端を欠損し茎長は不明であるが、断面円形で整形痕が観察できる。鉄製品は3点出土している。29は周溝南側の周溝覆土より出土している。刃部が確認されるため利器であることは確実であるが、種別については欠損等もあり、確定しえない。30は残存長3.5cmを測る工具類の柄部片かとみられる鉄製品片である。刃は確認されず、断面は台形を呈して非常に厚い。31は残存長3.7cmを測る棒状の鉄製品である。断面は正方形を呈する。30とは周溝北側の覆土中より出土しており、SB037・038・039・040が本来の帰属遺構である可能性が考えられる。石製品のうち、玉類は勾玉と管玉の出土がある。勾玉は周溝南側の覆土中より1点出土している。全長2.0cm、最大幅1.0cmを測る。く字形を呈し、尾部が非常に短いが欠損はなく、完形品である。穿孔は片側穿孔で、チャート系の石材製である。管玉は周溝南西側の覆土中より1点出土している。長さ1.6cm、幅0.45cmを測る完形品で、蛇紋岩製とみられる。このほか石製品としては、凹石や軽石の出土が認められた。以上の青銅製品・鉄製品・石製品のうち、本墳に伴うと判断されるものはなく、いずれも重複遺構などからの混入と考えられる。先行遺構に帰属すると考えられる銅鋲・銅鏃・勾玉・管玉は周溝の南西側より、後出遺構に伴うと考えられる丸鞆・鉄製品は周溝北側より出土していて、重複す

図193　SZ003周溝内出土金属・石製品実測図
（S＝22～25；1/2　26～28；1/3　29・3；1/1）

る遺構の時期別分布位置ともほぼ合致している。

以上の様相より、古墳時代中期後半代の円墳と考えられる。

SZ004（篠ノ井・高畑４号墳）（PL－25・29・30・31・32、PL－XII－９・10・12）

調査区の北東端部に位置する。南側でSZ003と隣接するが、周溝の重複はみられない。また、北側には弥生時代後期のSZ005が位置し、該期古墳群の展開はＸＩ区SZ011まで一定の間隔が開く。

西側が調査区外へと続き、1/2強が検出された。直径は周溝外法で18.3m、周溝内法で12.3m程度を測る。周溝は検出範囲では円形に途切れなく巡る。調査区外に前方部あるいは造出部が存在する可能性があるが、規模ならびに検出状況より円墳と捉えておきたい。周溝幅は2.7～3.5m、掘削深度は確認面より0.65mを測り、他古墳に比べて周溝幅が若干幅広である。周溝底は基本的に平坦で、他の古墳で確認されたような階段状の掘り込みは確認されなかった。ただし、最も周溝幅が増す東側では若干深くなる。図194－Ａ－Ｂ間の断面図をみると、周溝覆土最下層と捉えられた６層下に堆積する８～10層の暗褐色砂質土は地山漸移層と考えられる11・12層を掘り込むように堆積している。これらの土層中には遺物等がまったくみられなかったが、基盤層土の小ブロックが含まれていることから人為的掘削は確実視される。上層の堆積をみると、墳丘側からの流入土と考えられる７層や周溝覆土である６層がほぼ水平に堆積した８層上に堆積していることが確認でき、少なくとも周溝埋没が開始される段階では８層が水平面を有して堆積していたことがわかる。これらの諸点からは８～10層は周溝掘削に伴って掘り込まれたが、埋め戻しによって周溝底を整えた整地土層の可能性が考えられる。SZ001やSZ003のように明瞭ではないが、本墳においても埋め戻しによる周溝底の整地の可能性が指摘できる。周溝の断面形態は緩慢ではあるが、周溝外側が緩く、墳丘側に急に立ち上がる形態を呈する。

墳丘は検出時に墳丘部分で黒褐色系の粘質土層が確認されたことから、部分的ながら盛土が存在する可能性が予測された。この予測に基づき実施した墳丘精査では、墳丘部分を覆うように黒褐色系の粘質土層が面的に確認されたが、墳丘下に存在するSB044・SB045の輪郭がおぼろげながら確認される程度の非常に薄い堆積であった。調査区西壁の土層堆積状況で確認すると、２層耕作土層や洪水砂に比定される３層下に堆積する８層は北側で周溝内へ落ち込むが、南側では周溝外まで連続して延びる堆積が確認され、包蔵される遺物からも平安時代を主とした包含層に比定することができる。この８層包含層下には墳丘範囲を覆う黒褐色の粘質土の堆積が確認され（10～15層）、これが面的に確認された墳丘に関わる盛土層と捉えられる。下層遺構が存在しない基盤層上では15cm程度の薄い堆積で、墳丘下に存在するSB044の上面では小単位で凹凸を覆って平坦にすることを指向した堆積状況と判断され、墳丘構築のベース面として整地された墳丘最下層が残存しているにすぎないと考えられる。この点は調査区壁から離れる東側でも同様で、平安時代を主とする包含層に覆われる段階以前に墳丘の高まりはほとんど削平されていたと考えられる。なお、北側では墳丘から周溝上に洪水砂層の堆積が観察された。他古墳では周溝内の凹みに洪水砂層の堆積はみられたが、墳丘上で確認されたのは本墳のみである。純粋砂層が墳丘上でも形成される条件を備えていたものとして、墳丘の残存状況が他古墳とは異なっていたことを示す傍証のひとつとして注意されよう。

埋葬施設は痕跡も含めて確認されなかった。また、副葬品とみられる遺物の出土もない。

遺物は周溝内より土器が出土している。周溝南側で周溝底に密着した状態で配置された土器群が検出されている。土器群は土師器高杯・杯・壺・甕・甑、須恵器杯身・甑より構成される。横倒しになって割れたものや潰れたものが大半で、周辺の破片による接合でいずれもほぼ完形に復元されている。意図的に分割した部片の配列は認められず、破砕行為を含めて出土位置に配列されたと捉えられる。

土器群を子細に観察すると、幾つかの群としてのまとまりを見いだすことができる。墳丘側（南側）よりみて、

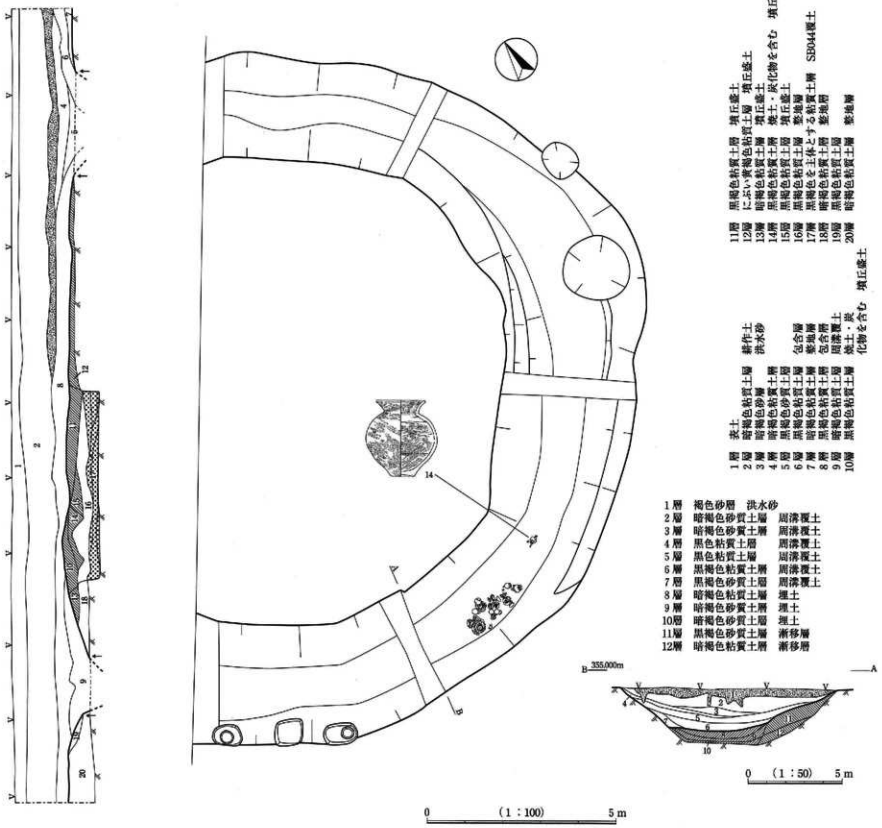


図194 SZ004実測図（S＝平面図；1/100 周溝土層断面図；1/50）

西側を第1群とし、順次連番を付して呼称する（図195）。

第1群は土師器壺・高杯・杯より構成される。大型の壺は正置されたと考えられ、体部上半と下半を繋ぐ屈曲点で潰れていた。この壺の東側の脇には杯が伏せて配置されていた。さらに壺の脇では有稜の大型高杯が破砕された可能性が考えられるが、この高杯の脚部は伏せられた杯上に載った状態で検出されている。大型壺の南西側には周溝底に朱の分布が認められ、その脇より土師器杯が1点出土している。

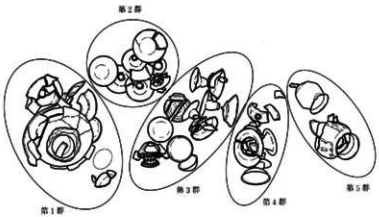


図195　周溝内出土土器群名

写真38　第1群検出状況

写真39　第1群朱検出状況

第2群は土師器高杯・鼓より構成される。高杯の脚部はほとんどのものが正立した状態で検出され、杯部がずれ落ちるような状態で検出された。当初、完形で正置された高杯の杯部が割れ落ちた状況かとも考えられたが、脚部裾は南側からみて半時計回りに順次上に重ねられていることが確認された。さらに裾部は直立する脚部に接する付近まで重ねられており、完形の場合、杯部が接触して検出された状況には配置できない。このため、高杯は杯部を折り取って脚部を配置した後、杯部がその脇に別途置かれたと判断される。西側には鼓と小型の高杯が配置される。鼓は口縁部が割れていたが、体部に破損はない。小型の高杯はバラバラで、脚部上に杯部が逆位に被さる状態で検出されている。

写真40　第2群検出状況

第3群は土師器高杯・杯、須恵器杯身・鼓より構成される。この群にのみ、須恵器が認められる。土師器高杯は北東側に3個体並び、いずれも横倒しの状態で、杯部と脚部が割れていた。打ち欠きの痕跡は明瞭ではないが、3個体が3個体ともに同様な割れ方をしていることは極めて不自然で、人為的な破砕の可能性が想起される。土師器杯は2点が正置され、破砕などは行われていない。須恵器杯身は2点ともに伏せられていた。なお、この身とセットになる蓋は存在しない。須恵器鼓は横倒しの状

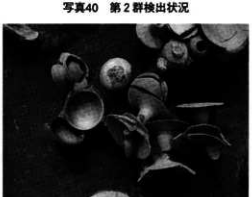


写真41　第3群検出状況

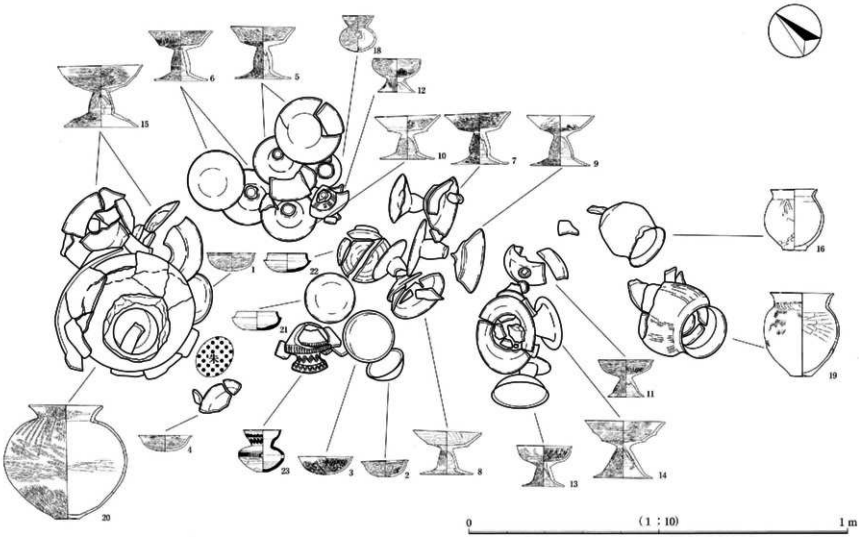


図196　SZ004周溝内土器出土状況（S＝1/100）

態で、体部下半から底部にかけて割れている。特に底部は破片が肩部下にみられ、出土位置の不自然さからは意図的な破砕の可能性が考えられる。

第４群は土師器高杯３点より構成される。杯部有稜の大型高杯の両側に小型の高杯が配置される。中央の有稜高杯は横倒しで、杯部が破砕していた。西側の高杯は横倒しの状態であったが、東側の高杯は杯と脚が分離したうえ、逆位で検出されている。

第５群は甕２点より構成される。共に南側に横転し、底部に割れが認められた。明確は破砕痕跡はみられないが、不自然は割れ方をしており、破砕等が行われた可能性も考えられる。

このように土器群は器種構成・配列ならびに意図的な破砕が前述のように小単位ごとに異なっている。一見全体がひとつのまとまりとして配置されたとも取れるが、５群程度の小単位で構成された配列と考えられる。この群という小単位が何を反映しているのか、製作・使用・供献集団などさまざまな可能性が想起されるが、この点については他古墳で確認された土器群の単位との比較検討や各群を構成する土器の製作技法を通してみた製作者の共通性などの視点により明らかにできる部分も多いと予測される。

写真42　第４群・第５群検出状況

写真43　壺検出状況

また、西側に一定の間隔をおいて、壺が１点出土している。写真でみると（写真43）、周溝底より浮き上がった状態で墳丘からの転落遺物ともとれるが、土器下の堆積土は前述の埋め戻し整地土層と考えられ、出土高も他の土器群とほぼ同一である。他古墳における壺の特別な配列状況を念頭に置くならば、前述の土器群とともに周溝内に配列されたものと捉えられる。横転状況で出土し、底部ならびに口縁部に破損がみられるが、破片も破損箇所に接して出土している。

第１群出土土器は土師器壺・高杯・杯である。20は大型の壺で、胴部中位に最大径をもつ球胴を呈し、肩が若干張る。底部は平底である。口縁部は頸部より外傾して直線的に立ち上がり、口縁外面に面を持つ。調整は外面がミガキ、内面がナデである。15は有稜の大型高杯である。口径22.4cm、器高16.4cmを測る。杯部は底部と口縁部の接合部を利用して段をなし、口縁中位に擬口縁状にさらに稜を作り出している。口縁は丸く収められる。脚部は膨らみをもつ形態で、脚下端がくびれずに裾部へと連結する。裾はハ字形を呈し、口縁同様に中位に接合面を利用して稜を作り出している。脚端部は面をもって収められる。調整は丁寧なミガキで全体的に平滑に仕上げられている。脚内面はホゾを潰し、ナデによって脚成形痕を丁寧に消している。裾部内面はヘラ状工具によるナデ調整である。なお、杯内面、脚裾内面ともに器壁の剥離が著しく、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。１の杯は口径12.9cm、器高4.8cmを測り、完形に復元された。半球形を呈し、口縁直下が外反し、内面は内傾する面をなしている。底部は凹んだ平底で、杯下半とは明瞭な稜をもって区分される。調整はミガキである。４の杯は口縁部1/2弱が欠損する。丸底で半球形を呈し、口縁部で短く外反する。調整はヘラケズリの後、ミガキが施される。

第２群出土土器は土師器高杯・甕で、中期型の高杯は5・6・10の３点が出土している。５は口径17.1cm、器高13.9cm、６は口径16.9cm、器高13.2cmをそれぞれ測る。杯は屈曲部で明瞭な稜を作り出して直線的にのび、

口縁を丸く収める。脚は膨らみを持つ柱状脚で、脚部接合直下でわずかに膨らんで大きく広がる裾部となる。脚端部は口縁同様に丸く収められる。調整は外面ならびに杯内面がミガキ調整である。脚内面はヘラ状工具によるケズリで、脚成形痕は裾接合部のみが残る。ただし、この裾接合痕も突出が器壁にナデ付けられわずかな痕跡として残っている程度である。ホゾは内面ケズリの際に工具によって切断されているが、5は先端が斜めに切断されたにすぎず、残存している。以上の器形ならびに成形・調整は2点に共通し、ミガキ調整の方向や脚内面の調整方法の合致は同一製作者による製作を想起させるほど類似している。10は口径17.4cm、器高11.6cmを測る。杯屈曲部は接合を利用して稜をなすが、外面にはこの稜上部を強いヨコナデ調整した工具痕の周回が観察される。口縁は直線的に延び、丸く収められる。脚部はわずかな膨らみを持つ柱状脚より大きく開く裾部となる。調整はミガキ調整であるが、杯部外面には工具によるナデ痕が観察される。脚内面はホゾを片側の器壁に押し付け、工具によってケズリ状の強いナデが施される。脚成形痕は残存せず、裾部接合痕を明瞭に残す。12は伝統的な中期型とは異なる新出の小型高杯である。杯部は半球形を呈し、口縁端部は面をもって収められる。杯内面は黒色処

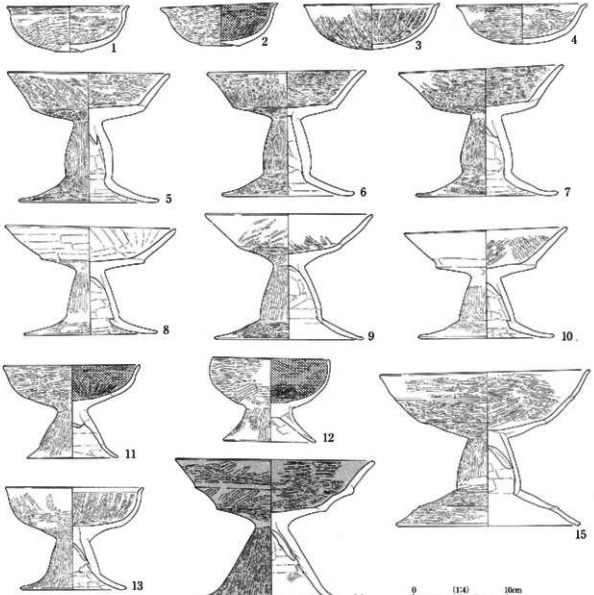


図197　SZ004周溝内出土土器実測図（1）（S＝1/4）

理が施されている。脚部はハ字形を呈する短い脚で、裾部は存在しない。調整はミガキであるが、脚部ならびに杯下半外面を主に１次調整のハケメが観察される。脚内面はヘラ状工具によってナデ調整が施される。18は鼎である。口径8.2cm、器高9.5cmを測る。頸部は胴端部上に接合していて、直線的に延び、口縁は丸く収められる。頸部中位にヨコナデによって段部が作り出されている。内面にはこれに呼応した段はみられない。胴部は胴中位に最大径を持つ偏球形で、底部は丸底である。胴中位には斜め上方より円孔が穿たれている。調整は外面ならびに口縁内面がミガキであるが、底部外面は器壁が荒れていて調整痕跡が失われ、混和材の砂粒が明瞭に観察される。内面はヘラ状工具によるナデである。

第３群出土土器は土師器高杯・杯、須恵器杯・鼎で、本墳出土の各群の中で唯一須恵器を含む群である。土師器高杯は３点出土している。７は口径17.5cm、器高13.9cmを測る。杯部は接合部で稜をなして屈曲し、直線的に延びて口縁を丸く収める。杯部は膨らみを持つ柱状脚より大きく開く裾部となる。調整はミガキである。脚内面はホゾを片側の器壁に押し付け、ヘラ状工具によってケズリ状の強いナデがほどされ、脚成形痕は残っていない。裾部接合痕はナデによって器壁に押し付けられており、わずかに痕跡を残す程度である。器形ならびに調整は第２群５・６に非常に類似している。ミガキ調整の方向や脚内面の調整も一致し、５・６に加えて７も同一製作者の手による可能性が指摘される。８は口径18.1cm、器高11.7cmを測る。杯部は屈曲部の接合を利用して稜をなし、外面の稜上部には強いヨコナデ調整を行った工具痕の周回が観察される。屈曲部より直線的に延び、口縁部は丸く収められる。脚部はわずかな膨らみをもつ柱状脚より大きく広がる裾部となる。調整はミガキである

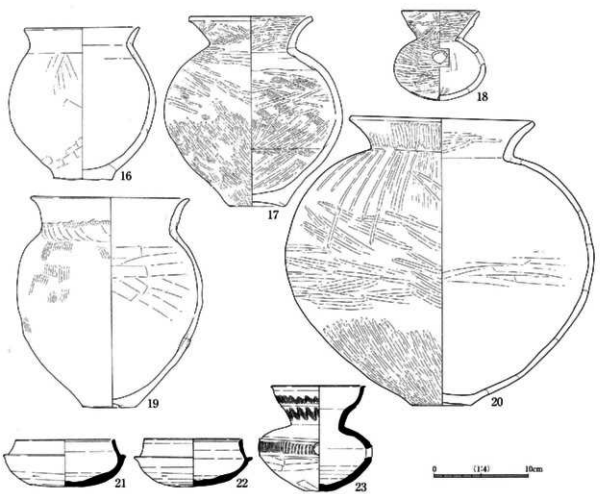


図198　SZ004周溝内出土土器実測図（2）（S＝1/4）

が、杯部内外面にはヘラ状工具によるナデ調整が観察される。脚内面はホゾを片側の器壁に押し付け、ヘラ状工具によるケズリによって脚成形痕は残っていない。裾部接合痕は明瞭に残している。器形ならびに調整、特に杯部にヘラ状工具によるナデを多用する点や脚内面の状態は第２群10と酷似する。杯段部外面に残る工具痕は同一の可能性が高く、同一製作者による製作の可能性が考えられる。９は口径17.8cm、器高13.4cmを測る。杯部は屈曲部で不明瞭な段をなして、直線的にのび、口縁部は丸く収められる。脚部は膨らみを有する柱状脚から広く広がる裾部となる。調整はミガキで、杯内外面の器壁の荒れが顕著な部分ではナデの痕跡が観察される。脚内面はホゾを押しつぶし、粗いヘラ状工具によるナデが施される。脚成形痕はほとんどみられないが、ナデ調整によって器壁は凹凸が顕著である。裾部接合痕はナデによる器壁への押しつけでわずかに残る。なお、杯内面には斑状の剥離が欠損部を中心とした一部に認められる。土師器杯は２点出土している。３は丸底で半球形を呈し、口縁部で短く外反する。口縁内面には内斜する面を有する。調整は細かいミガキが内外面共に施される。2は平底の杯である。底部は体部との境に稜を持つ凹んだ平底をナデによって作り出す。口縁部は外面で短く外反し、内面には内傾する面を持つ。調整はミガキで底部外面のみナデ、内面は黒色処理が施される。

須恵器杯は２点出土している。２点ともに杯身で、本来セットとなる蓋は存在していない。21は完形の蓋杯身で、口径10.6cm、器高4.9cmを測る。立ち上がりは内傾して直立せず、口縁は段が形骸化した面をもって収められる。受け部は鈍く短い。体部下半の回転ヘラケズリは体部1/2弱の範囲に半時計回りに行われている。胎土は白色砂粒を含んで精良、焼成は堅緻である。底部外面には器壁の剥離が、また、立ち上がり外面および内面に朱の付着痕跡が薄く観察される。22も完形の蓋杯身で、口径10.4cm、器高5.0cmを測る。立ち上がりは口縁部でほぼ直立し、明瞭な段をもって収められる。受け部は水平に延び、受け部直下に強いヨコナデが行われている。体部下半の回転ヘラケズリは半時計回りに2/3以上の広い範囲に施されている。胎土は白色砂粒等を多量に含んでやや粗く、焼成は堅緻である。なお、内面には朱が濃密に付着している。須恵器鉢は１点で、23は口径10.0cm、器高11.1cmを測る。頸部は中位で屈曲して段をなし、外面には１条の沈線が巡る。この沈線の上下にはそれぞれ波状文が施文される。口縁部は直下で外反し、平坦な面を持って収められる。肩部は強く張らない撫肩で、体部は最大径を中位に持つ偏球形を呈する。体部中位には２条の沈線によって文様帯が区画される。上側の区画線は肩部から遺構する角度変換点を強いヨコナデによって凹め、突帯状に整形されている。この文様帯内には刺突文施文後、やや斜め上方より円孔が穿たれている。底部内面は突き出しによって丸底化し、外面はタタキ後、ナデによってタタキが消されている。底部はナデによって小さな平底を作り出している。口縁内面ならびに頸部・胴部文様帯を中心に朱の付着が観察される。また、平底の底部周辺は丸く割れており、出土状況と合わせて、穿孔状の打ち欠きが行われたと推定される。

第４群出土土器は土師器高杯３点で、大型１・小型２より構成される。14は有稜の高杯で、口径21.2cm、器高15.3cmを測る。杯部が割れていたが、ほぼ完形に復元された。杯は杯下部ならびに口縁中位でそれぞれ段状の稜をなす有稜形態である。杯下部では屈曲点の接合面を利用して段をなしている。基本的に擬口縁状に作られるが、杯底部が巻き上げ成形のため、実測図断面のように先端側に粘土を足して稜を成形している箇所もある。この下稜から外反して１次口縁となり、擬口縁状に稜を作り出す。内面にも緩やかな段が認められる。２次口縁も緩やかに外反して、丸いながらもナデによって作り出された面をもって収められる。脚部はやや膨らみをもつハ字形脚で裾が若干開く形態である。杯部に呼応する稜はみられない。調整はミガキで、脚部外面ならびに杯部内面に１次調整のハケメが観察される。脚内面はヘラ状工具によるナデ調整であるが、巻き上げによる脚成形痕を明瞭に残す。ホゾは片側の器壁に押し付けてナデ付けられる。裾部はハケメの後、ナデ調整が施される。色調は黄白色を呈し、他の土師器とは大きく異なっている。また、杯部内外面、脚部外面には赤彩の痕跡がわずかに

認められ、本来赤彩が施されていたと考えられる。13は口径14.6cm、器高10.9cmを測る小型の高杯である。杯部は口縁内面に内傾する面を有する杯形態で、稜はみられない。脚部はわずかに膨らみを有する脚より裾が短く広がる形態である。調整はミガキで、杯内面において特に細かい。脚内面はホゾを片側の器壁に押しつけ、ヘラ状工具によるナデが施される。脚成形痕は残っていないが、裾接合部のみナデによって器壁に押し付けられているが残存している。裾部はヘラ状工具によるナデである。なお、杯形態ならびに杯内面の細かいミガキ調整は第3群3の杯に非常によく似ている。11は口径14.4cm、器高9.8cmを測る小型の高杯である。杯部は口縁内面に弱いながらも内斜する面を有する杯形態である。脚部はわずかな膨らみを持つが、脚部と裾部の区分は不明瞭で、ハ字形の脚に近い。調整はミガキで、杯部外面は横方向のミガキが顕著である。杯部内面は黒色処理が施される。脚内面はホゾを片側の器壁に押しつけ、ナデ調整が行われるが、脚部成形痕は残っている。裾部はヘラ状工具によるナデ調整が施される。杯内面に朱の付着がみられる。また、杯部外面には破損部に器壁の剥離がみられ、打ち欠きが行われた可能性が考えられる。

第5群出土土器は土師器甕2点である。16は口径12.3cm、器高16.1cmを測り、ほぼ完形である。口縁は短いく字形を呈し、丸く収められる。肩は張らずに、胴中位に最大径を持ち、底部は平底である。調整は内外面ともにナデ調整で、器壁は平滑に仕上げられている。なお、底部のみが抜けるように割れている。打ち欠きの痕跡は認められないが不自然な割れ方で、意図的な破砕の可能性も想定される。19は口径16.8cm、器高17.2cmを測る甕で、出土時には割れていたがほぼ完形に復元された。頸部は直立し、口縁部で外反する。肩は張らずに最大径を胴中位にもつ。胴下半には赤変を伴う器壁の荒れが観察され、これが被熱によるものであれば、使用された甕が周溝内に配置されたことになり、注意される。底部は平底で、輪台技法によって成形されている。調整は外面がハケ後ナデ、内面がヘラ状工具によるナデである。

17は土器群より一定の間隔を開けて出土した土師器壺である。口径13.1cm、器高20.0cmを測り、ほぼ完形に復元されている。頸部は肩端部上より外反し、口縁部は明瞭な面を有する。肩は張らずに胴中位に最大径を持つ球形を呈する。底部は中央が凹み平底で、粘土板ではなく、複数の粘土塊をつなぎ合わせて成形されている。なお、底部内面は丸底に仕上げられている。調整は外面がハケ調整後ミガキで、底部付近に一部ハケメが残存する。底部外面もミガキ調整による。内面は口縁がミガキで、胴から底部はハケ調整後、まばらではあるがミガキ調整が行われている。

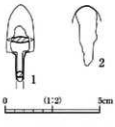


図199　SZ004周溝内出土銅鏃実測図（S＝1/2）

このほか周溝内からは銅鏃が2点出土している。1は柳葉形銅鏃である。鏃身部は破砕が著しく、刃部はまったく残存していない。鏑も不明であるが、断面形態によって両鏑造りである可能性が高いと考えられる。関部は直角関である。茎部は1.4cmほど残存し、断面形態は円形である。2は残存状況が極めて悪い銅鏃である。切先部分の一部が確認できるのみで、全体的に土が付着し、脆弱な状態であるため、詳細は観察できない。切先の形態からは本遺跡で数多く出土している小型の柳葉形銅鏃よりも一回り大きな可能性が考えられる。これら2点の銅鏃はとも周溝北側の覆土上層より出土していて、形態からも本墳に先立ち周溝内への混入が確実である。北側では弥生時代後期と考えられるSB049を周溝が掘り込んでいて帰属遺構の候補となるが、周溝覆土上層からの出土と周溝外からの混入を含めて確定しえる状況ではなかった。また、検出面出土遺物として掲載した土製勾玉（図227－26）も本墳を覆う包含層中より出土している。銅鏃同様に先行遺構からの混入遺物と判断される。

以上の様相より、古墳時代中期後半代の円墳と考えられる。

SB013（PL－XII－11）

調査区のほぼ中央部の住居密集域で検出された竪穴住居である。SB023・SB052を掘り込んでいる。また、SB012との重複関係は定かでないが、SB012が上部に重複していると捉えられた。

東西辺は4.3mを測り、北側が調査区外となる。南北辺の残存長は約3.0mである。床面は脆弱で、貼床・硬化面などは検出されていない。柱穴も検出されなかった。当初、南側で検出されたピットが柱穴に該当すると想定したが、対置する位置からは検出されなかった。カマドは調査区壁際で火床が検出されている。袖部は残存せず、上部構造はまったく残っていなかった。また、煙道も検出されていない。火床は径0.4mの隅丸方形として検出され、中央部を中心に黄白色に熱変していた。火床周辺で袖部の痕跡を求めて精査を行ったが、まったく痕跡は見いだされず、破壊の著しさを示している。また、火床上に土器片等の投棄が一般的に行われるが、本住居では火床上からの土器等の出土は認められなかった。

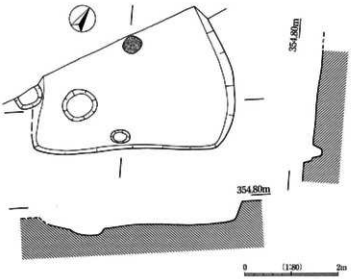


図200　SB013実測図（S=1/80）

遺物は床面直上を中心に、散発的に土師器・須恵器が出土している。1は床面上より出土した須恵器蓋である。復元口径12.0cm、器高2.9cmを測る。頂部には高さ0.6cmを測るつまみが貼付けられ、外面の回転ケズリは1/2程度実施されている。蓋内面には形骸化していないカエリが認められる。2も床面上から出土した須恵器蓋である。小片からの復元実測で、口径は20.0cmに復元された。つまみは欠損する。天井部は平たく、ハ字状に屈曲して口縁部をなす。天井部は回転ケズリが施されている。3は住居中央の床面上より出土した須恵器高杯である。杯部は欠損する。脚端部は垂直に屈曲して、強いヨコナデによって凹面をなす。4は須恵器杯で、南側ピット際の床面直上より出土している。口径14.2cm、器高4.4cmを測り、底面はヘラ切り後ケズリ調整を行っている。5は須恵器瓶で火床東側の床面上、6は須恵器甕で北東隅部の覆土中位より出土している。7は土師器甕で東側隅部床面上から出土した。外面は細かいケズリ調整で、内面はナデ調整である。復元口径は20.4cmを測る。

以上の様相より、奈良時代前半期と考えられる。

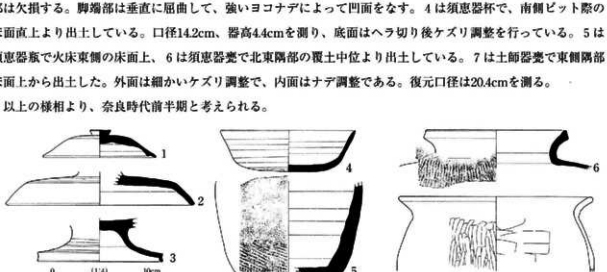


図201　SB013出土遺物実測図（S=1/4）

SB033（PL－33、PL－XII－12）

調査区のほぼ中央、東壁際で検出された竪穴住居である。ほぼ全体が確認されたが、南側隅部付近は本区を二分した北側調査区の南壁際に該当し、調査を実施することができなかった。また、図面上SB018を確実に掘り込

んでいるが、従前の理由により、調査時に重複関係を確認してはいない。東側隅部はSK022に掘り込まれるが、SK022底部下で隅部形態が確認されている。

正方形プランを呈し、4.8×4.9mを測る。床面は全面で貼床が検出された。柱穴は4箇所確認され、4主柱構造である。カマドは北西壁中央部で検出された。火床は0.4m四方の方形に近い形態で検出され、中央部のみ黄白色に熱変していた。袖部は外側の粘土がほとんど認められなかったが、焼けたカマド内壁は左右ともに確認された。ただし、右袖の残存状況は悪く、壁下部の一部が確認されたにすぎない。また、奥壁では左右内壁のような焼けた壁面は確認されなかった。残存状況が比較的良好な左袖先端部では板状の河原石が立てた状態で粘土内に埋め込まれていることを確認した。煙道は検出されていない。

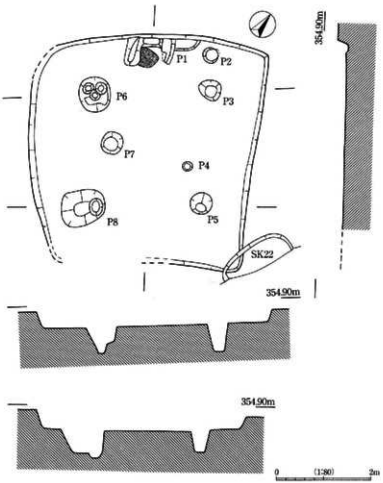


図202　SB033実測図（S=1/80）

遺物は覆土中より、土師器・須恵器・ガラス玉が出土している。須恵器は蓋1・杯1・高台付杯2を図化・掲載した。蓋と杯は覆土中出土で、破片からの復元である。2の杯底部は回転ヘラ切りの痕跡を残す。3はP6脇の覆土上層より出土している。口径12.3cm、器高3.8cmを測る。4は住居中央覆土中位より出土している。口径14.4cm、器高5.2cmを測る。内面には墨の痕跡が観察され、転用硯として使用されたと考えられる。土師器は杯2・甕1を図化・掲載した。5は覆土中より出土した平底の杯で、内面黒色処理が施される。6はP3より出土している。底面は丸く、口縁と体部に明瞭な稜線をもつ。内面は黒色処理されていなく、墨の痕跡が観察されることから転用硯として使用されたと考えられる。7は内外面ハケ調整による甕である。ガラス玉は覆土中より1点出土している。直

図203　SB033出土遺物実測図（S=1～7；1/4　8；1/1）

径0.4cm、厚さ0.3cmを測る小型品である。スカイブルーで透明度が高く、円形の気泡が多量に観察される。なお、ガラス玉は本住居に帰属するとは考えがたく、重複関係を有するSB018より混入したと考えられる。

以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

SB034・SB036（PL－33）

SB034　SB036を掘り込んで構築された竪穴住居である。北側ではSE011に掘り込まれている。4.0×3.6mを測る方形プランを呈する。床面は貼床や硬化面は確認されず、脆弱であった。暗褐色粘質土の覆土を除去した段階で平坦面が確認され、カマド火床とほぼ同一高であったことから床面と判断した。なお、調査最終段階で床面の断ち割りを実施したが、下層に貼床などは確認されていない。柱穴は5箇所検出されている。1箇所は住居中央部で、残る4箇所は隅部に認められる。カマドは北東壁中央部より検出された。壁際で火床が検出され、カマド自体は壁外に位置する構造となる。火床は径0.4mの不整円形として検出され、中央部を中心に黄白色に熱変するなど、よく焼けていた。袖は残存していない。カマド内部は焼土・炭が認められたが、焼けた壁などは確認されなかった。なお、掘方にみる形状は方形を呈する。煙道は検出されていない。カマドが壁外に位置することから、カマド上部に直接煙突が付く可能性が考えられる。

遺物は覆土中より土師器・須恵器・鉄製品がある。1は須恵器広口壺で口径9.4cmを測る小型品である。2は土師器甕で、内外面ハケ調整が施され、底面には木葉痕が残る。鉄製品は残存長は3.7cm、厚さ0.4cmを測る断面正方形・中空の細い棒状片が1点出土している。

以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

SB036　SB034に掘り込まれた竪穴住居である。4.2×4.2mを測る、正方形プランを呈する。床面は柱穴内側で

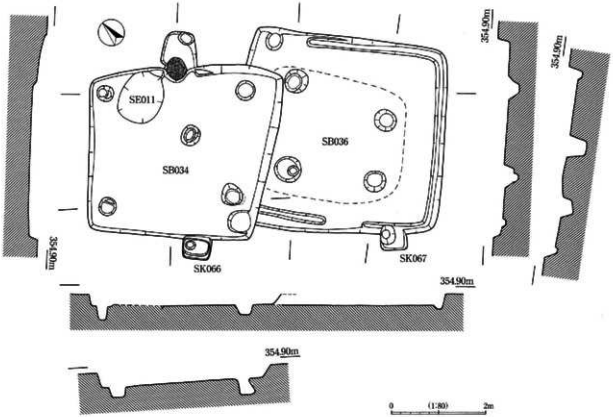


図204　SB034・SB036実測図（S=1/80）

硬化面が確認された。柱穴は4箇所確認され、4主柱構造である。壁際では壁溝が検出されている。幅0.2mほどの溝が壁際に周り、南西壁中央部で途切れている。カマドは検出されていない。ただし、SB034との重複部分で検出された焼土は壁内まで焼土粒の分布が続くことから本住居のカマドに関連する可能性が考えられる。明確な形状を保っていなかったため確定的でないが、北西壁中央部にカマドが存在した可能性が想定される。

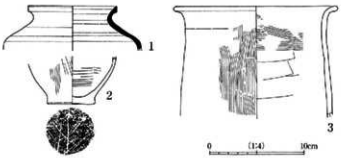


図205　SB034・SB036出土遺物実測図（S=1/4）

1・2；SB034　3；SB036

遺物は覆土中より土師器・須恵器が出土している。土器片のうち、図化・掲載できたのは土師器甕1点である。口縁部が強く外反し、内外面ともにハケ調整が施される。

以上の様相より、奈良時代前半期に該当すると考えられる。

SB042（PL－34）

調査区のほぼ中央、西壁際で検出された竪穴住居である。南北で一辺5.2mを測り、西側は調査区外となる。他住居との重複関係はなく、南側でSE012・SK061に掘り込まれている。

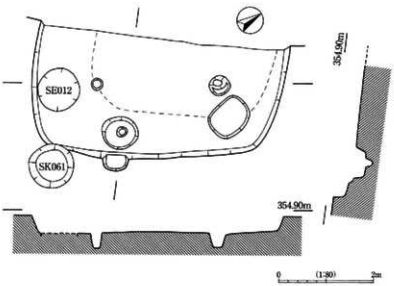


図206　SB042実測図（S=1/80）

床面は貼床が検出された。柱穴は2箇所確認されている。位置からみると4主柱構造であることは確実である。カマドは確認されていない。なお、北壁確認部や住居中央で焼土粒や炭の若干の散布を確認したことから、調査区外に存在した可能性は高いと考えられる。

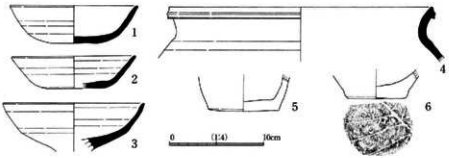


図207　SB042出土遺物実測図（S=1/4）

遺物は覆土中より土師器・須恵器が出土している。須恵器杯は2点図化・掲載した。1は覆土上層より出土していて、復元口径13.6cm、器高4.0cmを測る。2は床面上出土で、復元口径13.2cm、器高3.4cmを測る。3は高杯、4は甕でともに覆土中出土である。土師器は甕底部2点を図化・掲載した。ともに内外面ともにナデ調整が施され、6の底面には木葉痕が残る。

以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

SB031（PL－34）

調査区の北側、SZ004東側の調査区東壁際で検出された竪穴住居である。西側隅部を中心に検出されており、大半は東壁外となる。床面は中央部を中心に貼床が検出された。柱穴は１箇所検出されている。カマドは検出されていない。ただし、調査区東壁際の北壁で焼土ならびに炭層が住居内部に突出する形で検出されている。また、この焼土層に隣接して煙道状の浅い掘り込みが北壁外で検出されている。カマド内壁とみられる焼けた壁面や火床は検出されていないが、この焼土層周辺での焼土粒や炭が顕著にみられたことからも、カマド破壊に伴って形成された焼土・炭層である可能性が高いと考えられる。

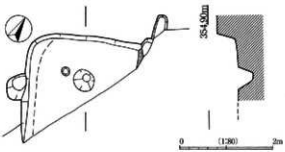


図208　SB031実測図（S=1/80）

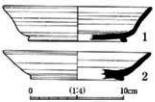


図209　SB031出土遺物実測図（S=1/4）

遺物は覆土中より土師器・須恵器片が出土している。図化・掲載したのは、須恵器高台付杯２点である。ともに破片からの復元実測で、口径は２点とも15.8cm、器高3.7cm・3.0cmをそれぞれ測る。高台は水平接地となる。

以上より、奈良時代に該当すると考えられる。

SB001（PL－34、PL－XII－11）

調査区南側、SZ001とSZ002の周溝上に跨がって検出された竪穴住居である。

3.80×3.65mを測る、方形プランを呈する。床面は全面で貼床が確認された。柱穴は検出されていない。南壁中央部の壁際では浅く細長い掘り込みが検出された。カマド対辺に該当することから出入口に関わる可能性を考慮して底面の精査を行ったが、梯子を設置したピット等は確認されなかった。カマドは北壁中央部で火床ならびに左袖の一部が検出された。火床は広範囲にわたって黄白色に熱変し、非常によく焼けていた。左袖は壁面より突出したごく一部が残存していたにすぎない。明確な焼土壁は確認されなかったが、暗褐色粘質土に貼り付いた焼土・炭を確認した。また、焼土層は奥壁へと続いている。右袖は残存していなかった。煙道は奥壁部分で焼土の切れ目があることから、奥壁と段をなして接続し、壁外へ延びると考えられる。ただし、壁外に延びる部分は検出されなかった。

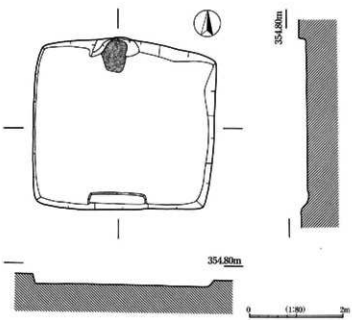


図210　SB001実測図（S=1/80）

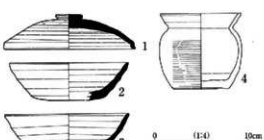


図211　SB001出土遺物実測図（S=1/4）

遺物はカマド内ならびに覆土中より、土師器・須恵器・凹み石・鉄製品が出土している。須恵器は蓋１・杯２、土師器は小型壺１を図化・掲載した。１の須恵器蓋は完形品で、

カマド火床上より逆位で出土している。口径13.9cm、器高3.7cmを測り、中央部がわずかに盛り上がるつまみを貼付けている。2の須恵器杯はカマド内より出土した破片で、底面にはヘラケズリ調整を施す。3の須恵器杯は覆土上層より出土した完形品で、口径13.2cm、器高4.1cmを測る。底面は糸切り痕を残す。4は土師器小型壺で、カマド内ならびにカマド前面の床面上より出土した破片が接合している。口径8.6cm、器高8.0cmに復元され、底部には糸切り痕を明瞭に残す。鉄製品は柳葉形鉄鏃が1点覆土中より出土している。鏃身部は鏃身長3.8cm、残存幅1.3cmを測り、両丸造である。頸部は残存長2.5cmほどで、断面は方形を呈する。関部は錆化により明瞭でないが、無関と想定される。なお、鉄鏃型式からは本住居に帰属するとは考えがたく、SZ002あるいはSZ002に破壊された住居に伴うと考えられる。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB002（PL－34、PL－Ⅻ－11）

SZ001墳丘上で検出された竪穴住居である。掘り込みはほとんど確認されなかったが、本住居が構築された段階ではSZ001の墳丘盛土がまだ残存していて、墳丘の大規模な削平が本住居廃絶以後に行われたと考えられる点で注意される。

3.10×2.90mを測る、方形プランを呈する。床面は柱穴の内側を中心に貼床が、壁際を中心に硬化面が確認された。柱穴は4箇所確認され、4主柱構造である。ただし、北側の2箇所は南側に比して浅い。また、南壁中央部の壁際でも1箇所ピットが確認されている。出入口施設に関わるピットの可能性が考えられるが、梯子等の出入口施設を設置した痕跡を把握することはできなかった。カマドは北壁のやや東よりから火床が検出されている。火床は直径0.3mの円形を呈し、中央部が黄白色に熱変していた。袖・煙道などの上部構造はまったく残存していなかった。

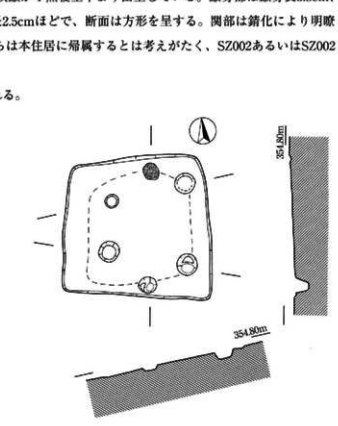


図212　SB002実測図（S=1/80）

遺物は覆土中より、土師器・須恵器が出土している。土師器杯を2点、図化・掲載した。1は口径13.1cm、器高3.7cmを測り、底面には糸切り痕を残す。体部外面には「壬」（あるいは「王」か）の墨書が認められる。内面内底や口縁部に墨の痕跡が観察され、転用硯として使用されたと考えられる。2は復元口径13.0cm、器高6.7cmを測る鉢状の杯で、内面は黒色処理が施される。

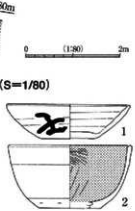


図213　SB002
出土遺物実測図（S=1/4）

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB007・SB008（PL－34・35、PL－Ⅻ－11・13）

SB007　SZ002西側の調査区壁際で検出された竪穴住居である。北西側約1/4が調査区外となる。検出時にはSB008を含めたより大きな住居跡として把握したが、調査の進捗によって暗褐色粘質土の分布範囲が一定の範囲にのみ認められたことから、この暗褐色粘質土の範囲をSB007、遺物を含むSB007の周囲をSB008と判断した。

このため掘り込みはほとんど確認できなかった。

4.10×4.60mを測る不整方形プランを呈する。床面は平面図（図214）にトーンで示した一部分において硬化面を確認したが、他は脆弱であった。柱穴は検出されていない。カマドは調査区壁際で火床を検出した。火床は径0.5m程度の円形を呈するが、黄白色に熱変した部分が残存しているのみで、焼土・炭はほとんどみられなかった。また、袖はまったく残存していない。

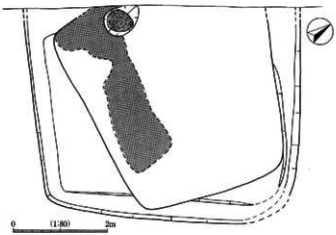


図214　SB007・SB008実測図（S=1/80）

遺物は土師器・須恵器・鉄製紡錘車が出土している。1の須恵器蓋、4の土師器杯、5の土師器甕、6の土師器壺はカマド火床上より破片として出土している。4の土師器杯は外面口縁下・内面はヘラミガキ調整が施され、底面は回転ヘラ切り未調整である。5の土師器甕はロクロ甕で、口縁内面にカキメ調整が施される。口縁はく字形に外反し、端部を丸く収める。6の土師器壺はカマド内出土片を中心に覆土中出土の破片と接合している。体部上半から口縁部は欠損する。2と3の須恵器杯は覆土中より出土している。2は細片からの復元で、底面は回転ヘラ切り後、ナデ調整を行っている。3は復元口径11.8cm、器高3.5cmを測り、底面には糸切り痕を残す。鉄製紡錘車は住居中央部覆土上層より1点出土している。軸が折れ、6片に割れて出土したが、それぞれが接合し、本来完形品であったと考えられる。全長23.5cm、紡錘車径5.1cm・同厚0.3cmを測り、軸部断面は円形を呈する。

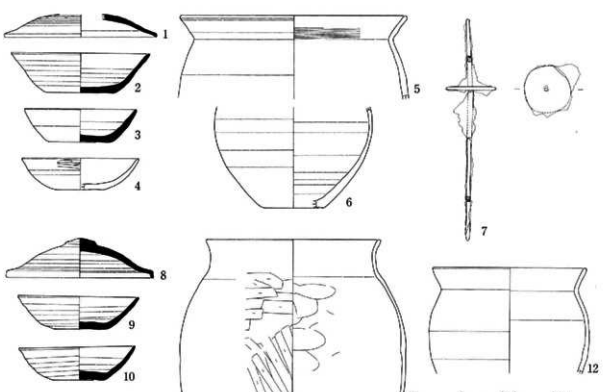


図215　SB007・SB008出土遺物実測図（S=1/4）

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB008　当初、SB007として検出し調査を行ったが、SB007が検出範囲中央部に存在することを把握したため、SB007の把握範囲外をSB008とした。

4.7×3.8mの方形プランを呈し、中央部にSB007が存在する。壁面は把握できず、明確な掘方は確認されていない。床面は脆弱で、貼床・硬化面等は検出されていない。柱穴ならびにカマド等も確認されなかった。

遺物はSB007範囲外の南壁際部よりまとまって土師器・須恵器が出土している。須恵器蓋1・須恵器杯2・土師器甕2を図化・掲載した。8の須恵器蓋は覆土中出土の小片で、復元実測を行った。つまみ下部のくびれはまったくなく、上面中央部が凹みを持たずに盛り上がる形態は鈍重な印象を与える。9は口径12.8cm、器高3.5cmを測り、底面には糸切り痕を残す。内底にはわずかであるが墨の痕跡がみられ、転用硯の可能性が考えられる。土器集中・覆土・SB007覆土中出土片と接合関係が認められる。10は完形品で、土器集中内出土品である。口径12.3cm、器高3.5cmを測り、底面には糸切り痕を残す。内底から口縁部にかけて墨の痕跡が残り、転用硯として使用されたと考えられる。11・12の土師器甕はともに土器集中出土である。いずれも1/3程度の残存率で、11は非ロクロ甕、12はロクロ甕である。

以上のように、SB008は竪穴住居と判断する要件を備えていない。しかし、土器片を含む暗黄褐色粘質土の存在やまとまりをもった土器の出土状況からは偶発的な背景によって形成されたとは考えづらく、SB007建て替えの可能性を含めてその存在を想定しておきたい。

SB009（PL－XII－11・13）

調査区のほぼ中央部で検出された竪穴住居である。SB010・SB012・SB023を掘り込んで構築されている。

4.3×3.8mを測る方形プランを呈する。床面はカマド前面を中心に、柱穴内部で硬化面が確認された。柱穴の外側においては脆弱で、硬化面の広がりは把握されなかった。柱穴は4箇所検出され、4主柱構造である。ただし、北西側の柱穴がやや内側に入り込み、柱穴配置は不整梯形となる。カマドは東壁のやや南寄りで検出されている。火床は直径約0.5mの円形で検出され、中央部が黄白色に熱変するなど、よく残っていた。袖は右袖が部分的に検出されたにすぎず、左袖は粘質土最下層が微量に残存していたことから痕跡として把握された。なお、右袖残存部から火床上にかけて石材の散乱が認められ、石芯構造であった可能性が考えられる。煙道は壁が若干外側に張り出していることが確認されたが、壁外に長く延びる状況では検出されなかった。

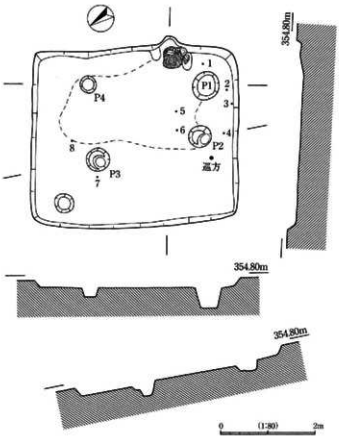


図216　SB009実測図（S=1/80）

遺物は床面上より、土師器・須恵器・灰釉陶器・銅地金張の巡方が出土している。1はカマド内より出土した

須恵器杯の破片で、外面に「真○」の墨書が認められる。2・3は須恵器杯で、2は覆土出土の小片からの復元実測である。3は5（床面上）より出土し、口径12.8cm、器高4.1cmを測る。SB010覆土中出土片との接合関係が認められる。ともに底面には糸切り痕を残す。5は灰釉陶器壺で、P1覆土中より出土している。底面には線刻がみとめられる。6～9は土師器杯である。6は床面上出土で、小片より復元実測を行った。復元口径12.8cm、器高4.0cmを測り、底面には糸切り痕を残す。7は覆土上位出土で、口径12.6cm、器高4.0cmに復元される。内面ミガキ調整で、底面には糸切り痕を残す。8はP1南側の2（床面より9cm上）より出土し、完形に近い。口径12.9cm、器高5.9cmを測る。内面はミガキ調整後、黒色処理がほどこされる。底面は糸切り後、ヘラケズリ調整が行われている。体部外面には「◉」の墨書が認められる。9はP1覆土より出土した小片で、口径13.0cm、器高4.0cmに復元された。内面はミガキ調整後黒色処理、底面には回転ヘラ切り痕を残す。10は土師器皿でP2南側の4（床面上）より出土している。口径11.6cm、器高1.9cm、底径6.5cmを測り、内外面ともにミガキ調整である。外面には「間」（あるいは「間」）、底面には「干」の刻書が認められる。11は土師器高台付杯でP1覆土中ならびにカマド内より出土した破片が接合している。内面はミガキ調整後黒色処理である。12・13は非ロクロのケズリ甕で、ともに小片からの復元図化である。12は覆土中、13は床面上より出土している。14はロクロ甕で、外面体部下半はケズリ、内面はカキメ調整が施される。カマド右袖脇の床面上から出土している。

巡方はP2西側（床面より5cm上）から1点出土している。青銅製で、表面にのみ金が貼られている。出土時には片側の方形窓短辺からほぼ直角に折れ曲がってL字形を呈していたが、これが人為的になされたものか、それとも埋没過程での偶発的結果かは判断しかねる。3.0×1.8cmの長方形を呈し、中央部に1.5×0.5cmの方形窓が開けられている。縁には幅0.05cmほどの細い刻線が全体を巡る。方形窓と短辺縁のちょうど中間には左右ともに円孔がみられ、片側に

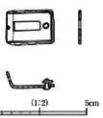


図217　銅地金張巡方実測図
(S=1/2)

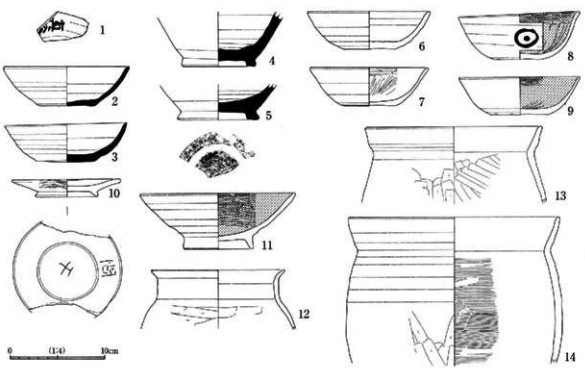


図218　SB009出土土器実測図（S=1/4）

は釘状の留金具が残存している。留金具は直径0.5cm程度の円形を呈し、円孔を貫いて裏面で別の押さえ金具に連結している。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB010（PL－XII－11）

調査区中央付近の住居密集域で検出された竪穴住居である。北西側でSB009に掘り込まれ、およそ1/4が失われている。

4.9×4.6mを測る方形プランを呈する。床面はカマド前面を中心に部分的に硬化面が検出された。柱穴は検出されていない。カマドは東壁やや南寄りで検出されている。焼土のみが検出され、袖などは残存していなかった。また、壁外を含め煙道は検出されていない。焼土は直径0.7m程度の不整形で、壁際までの広い範囲で検出されたが、全体的に二次堆積と考えられる柔らかい焼土の堆積であった。火床に該当すると考えられるよく焼けた部分は住居内側の一部で確認されたにすぎず、袖がまったく痕跡を残していないことを併せて、破壊の徹底ぶりが伺える。また、この焼土上部には浮き上がった状態で石材が検出されている。石材には被熱痕がみられ、カマド構築材であった可能性が考えられる。

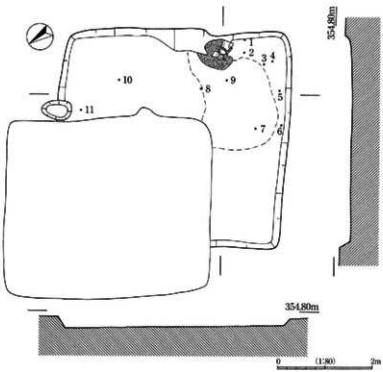


図219　SB010実測図（S=1/80）

遺物は土師器・須恵器・軽石が出土している。出土位置はカマド右脇から南東壁際に多くみられ、北西側では少ない。出土層位は確認面から床面上まで覆土中の特定の高さに集中せず出土しているが、床面上は破片が多く、残存率が高い個体は覆土中上位から出土するという傾向が認められる。なお、カマド上部で検出された石材のう

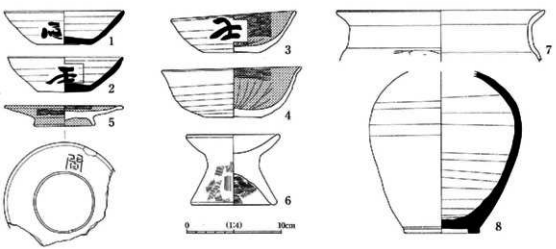


図220　SB010出土遺物実測図（S=1/4）

ち最も検出高が高いものは確認面まで達しており、残存率が高い土器の出土高と変わらない。このため、覆土上位にて出土した遺物を単純にすべて混入と評価することはできず、本住居に帰属するものとして取り扱った。1は須恵器杯で確認面から覆土上層出土である。復元口径12.8cm、器高3.5cmを測り、底面には糸切り痕を残す。体部外面には墨書がみとめられる。また、内底には墨の痕跡が認められ、転用硯として使用されたと考えられる。2も須恵器杯で、南東壁際の5（床面より16cm上）より出土している。口径12.3cm、器高3.7cmを測り、底面には糸切り痕を残す。体部外面には「壬」（あるいは「王」）の墨書が認められる。3は土師器杯で、5と3（床面上）から出土した破片が接合している。口径13.1cm、器高4.0cmを測り、底面には糸切り痕を残す。外面は回転ナデであるが、口縁部にミガキ調整が認められる。内面はミガキ後黒色処理が施される。体部外面には「壬」の墨書が認められる。4の土師器杯は南東壁際の6（床面より16cm上）より出土している。ほぼ完形で、口径14.7cm、器高5.2cmを測り、底面には糸切り痕を残す。内面はミガキ後、黒色処理が施されている。5は土師器皿で、北東隅部に近い4（床面上）より出土している。口径12.7cm、器高2.2cmを測る。皿部は内外面ともにミガキ後黒色処理が施される。また、皿部外面には「間」の刻書が認められる。6は高杯で北西壁際の11（床面から5cm上）で出土している。口径10.6cm、器高7.5cmを測る。杯外面はナデ調整、杯内面はミガキ、脚部は内外面ともにハケ調整である。極めて珍しい器形で、古墳時代遺物の混入の可能性が考えられるが、帰属する遺構の存在を指摘できないことから、本住居出土品として報告しておく。7の土師器甕はカマド前面の9（床面直上）より出土している。5字状の口頸部形態で、外面肩部には横方向のヘラケズリが認められる。8は須恵器壺で、カマド右袖脇の1（床面から14cm上）から出土している。体部以下はほぼ完存するが、口頸部を欠損する。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB037（PL－35、PL－XII－12・13）

SZ003墳丘・周溝上で検出された竪穴住居である。

6.26×5.30mを測る長方形プランを呈する。床面は住居中央部で貼床が検出されている。柱穴は検出されていない。貼床が住居中央部でのみ検出されていることから、この外側に掘方を伴わずに柱が立てられたと考えられる。カマドは北西壁中央やや西よりで検出されている。火床は直径0.5の不整円形を呈する浅い掘り込み内より検出されている。中央部が黄白色に熱変し、よく焼けていた。また、奥壁側の焼土際では直径0.1m・深さ0.04mを測る掘

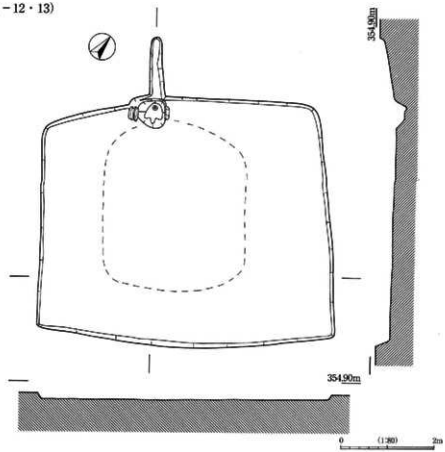


図221　SB037実測図（S=1/80）

り込みが確認され、位置からみて支脚を設置した痕跡と考えられる。なお、支脚は残存していない。袖は粘土ならびに焼土壁などは残存していなかったが、板状石が立てられた状態で検出されている。左袖では板状石が2石並列して設置されていた。カマド内側に板状石、外側に河原石を配し、外側の河原石は内から外へ斜めに設置されている。これは裏込めの役割を果たしていると考えられる。右袖ではちょうど左袖の石材に対応する位置で1石検出されている。各石材は1/3程度が埋め込まれており、カマド芯材であったと考えられる。なお、右袖の石材と壁の間から3の須恵器高台付杯が伏せられた状態で出土していることや左袖石材上から土器の出土がみられたことから、カマドは住居廃絶時には破壊され、石材がむき出しになっていたことが確実である。煙道はカマド奥壁で段をなして連結し、壁外に緩傾斜を有して1.3mほど延びる。煙道先端部からは6の土師器杯が出土している。

遺物はカマド火床上・袖石上部・覆土中より、土師器・須恵器・鉄製品・土製品が出土している。1は須恵器蓋でカマド火床上より出土している。2はカマド火床上と住居中央部覆土中出土片が接合した須恵器杯である。口径13.4cm、器高3.7cmを測り、底面には糸切り痕を残す。3はカマド右袖と壁の間より出土した須恵器高台付杯である。ほぼ完形品で、口径16.0cm、器高7.5cmを測る。5は貼床上から出土した土師器杯である。口径13.2cm、器高4.2cmを測る。外面下半から底面にかけてケズリ調整、内面はミガキ後黒色処理が施される。6は煙道先端より出土した土師器杯である。復元口径17.8cm、器高7.0cmを測り、底面には糸切り痕を残す。7・9は土師器甕底部である。9はカマド火床上ならびに左袖石材上から出土した破片が接合している。外面調整は器壁の荒れにより不明、内面はともにナデ調整である。7の底部には木葉痕が残る。8はカマド火床上から出土した土師器ロクロ甕である。鉄製品は貼床上の覆土上位から破片6点が出土している。いずれの破片も錆化が著しく、本来の形状を把握しがたいが、すべて断面方形の棒状品である。10のみ刃部が認められる。関形態は錆により定かでないが、直角関と想定される。個々の破片間に接合関係はないが、同一個体が含まれていると考えられ、小型の刀子2個体程度が存在したと想定される。土製品は北東壁にほど近い覆土最上層より1点出土している。

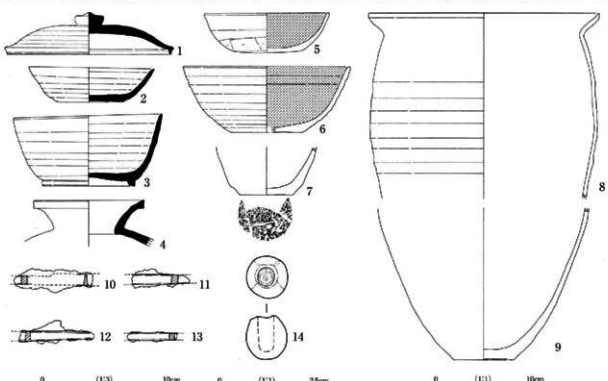


図222 SB037出土遺物実測図（S＝1～9；1/4 10～13；1/3 14；1/1）

直径1.1cmを測る偏球形を呈し、色調は透明度がまったくない薄い緑色で、施釉と考えられる。片側の頂部より直径0.5cmを測る円孔がみられるが、貫通していない。外面には高温下で溶解した白色の付着物が認められる。類例なく、製品の性格については不明である。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB040（PL－35、PL－XII－12）

SZ003墳丘ならびに周溝上で検出された竪穴住居である。SZ003ならびにSB053を掘り込んでいる。

3.30×3.16mを測り、ほぼ正方形のプランを呈する。床面は貼床が確認された。貼床はカマド前面から柱穴を結んだ内側で検出されている。柱穴は4箇所検出され、4主柱構造である。カマドは北西壁中央部で検出された。火床が壁外で検出され、カマドのみが壁外に突出する形態と把握される。袖、煙道など上部構造は残存していなかった。火床は0.5×0.4mの楕円形で検出され、住居側が黄白色に熱変するなど、よく焼けていた。火床上からは土器や石材の出土がみられたが、これらの石材が芯材となるかどうかは確定されない。なお、火床周辺にまったく袖の痕跡が認められなかったことからは、既に破壊されていたと考えられる。

遺物はカマド内や覆土中より、土師器・須恵器・ガラス玉の出土がみられる。1は土師器杯で、カマド火床上より出土している。口径13.1cm、器高4.9cmを測り、底部は平底である。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ後黒色処理が施される。底面は糸切り後、ケズリ調整が行われている。内面には全体の半分程度、ススの付着が認められ、灯明皿として使用された可能性が考えられる。なお、転用された灯明皿に通常認められる口縁部の打ち欠きは残存部では確認できない。2の須恵器杯は北西壁の壁外より出土している。本住居に直接伴うか否か不明であるが、周囲に該期遺構がみられないことから本住居に関連する遺物として併せて掲載する。3は赤彩された鉢、4は指ナデによって整形されたミニチュア土器である。ともに弥生土器で、床面下に存在するSB053に帰属すると判断される。5はスカイブルーのガラス玉で、直径0.3cm、厚さ0.3cmを測る。上下面ともに面取りがなされているが、側面は直立せず、平行四辺形を呈する。透明度が高く、内部には円形の気泡が多量に観察される。SB053にほど近い、覆土最上層より出土している。SB053想定範囲内ではないため本住居で扱うが、SB053として扱った管玉と近接し、出土高もほぼ同じであることから同様にSB053に帰属すると考えられる。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

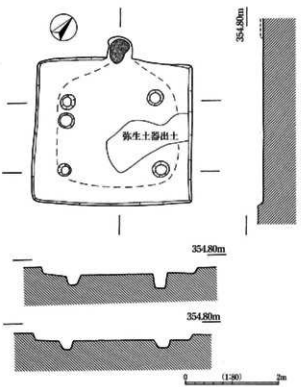


図223　SB040実測図（S=1/80）

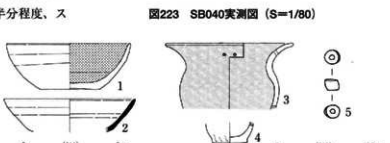


図224　SB040出土遺物実測図（S=1～4；1/4　5；1/1）

個別報告外遺構ならびに検出面出土遺物（PL－35、PL－XII－12・13）

1～8はSB040下層で存在のみ確認されたSB053出土土器である。大形壺が複数個体出土する。甕の形態等より箱清水式新相に該当する。9～12はSB040南側で存在のみが確認されたSB055出土土器で、古墳時代前期と考えられる。13～25は土坑・検出面出土土器である。13の杯蓋は古墳時代後期の所産で、本地点では唯一の該期遺

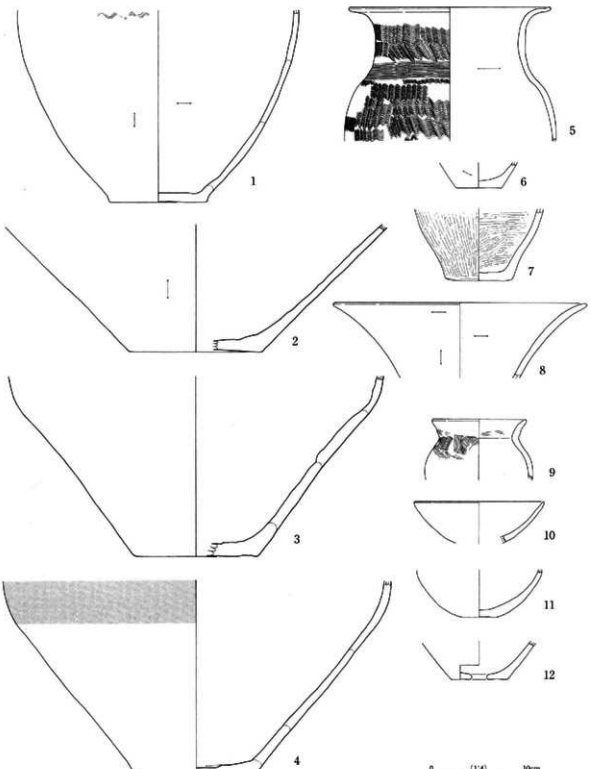


図225　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（1）（S=1/4）1～8；SBO53　9～SBO55

構となる。15は「壬」か、17は「不」かとみられる墨書が確認され、不明の23を含めて奈良～平安期には土坑からも複数例の墨書土器が出土している。また、14・24には「×」のヘラ記号が確認できる。26は土製勾玉で、壁中・包含層上層より出土した。27は滑石製勾玉片で、各面とも平滑に仕上げられている。想定される帰属遺構が不明だが、古墳時代前～中期であろうか。28はスカイブルーのガラス製小玉、29は緑色凝灰岩製の細形管玉である。30は有茎の打製石鏃で完形品ある。31は磨製石鏃で円孔が確認される。32の石製品は不定形の突出部に擦痕が認められる。33・34は凹石、35は砥石で、34は軽石製である。36～38は検出面出土の鉄製品で、36は針状品、37・38は刀子片とみられ、いずれも奈良時代以降に属すると考えられる。

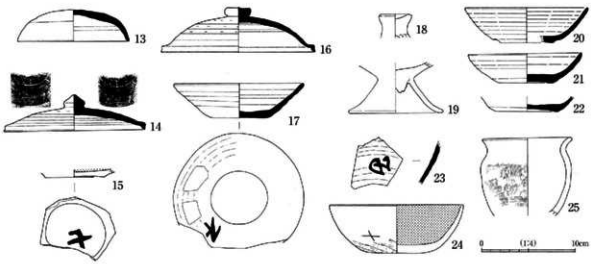


図226　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（2）（S=1/4）

13；SK006　14；SK018　15；SK002　16・17；SK004　18～22；SK013　23～25；検出面

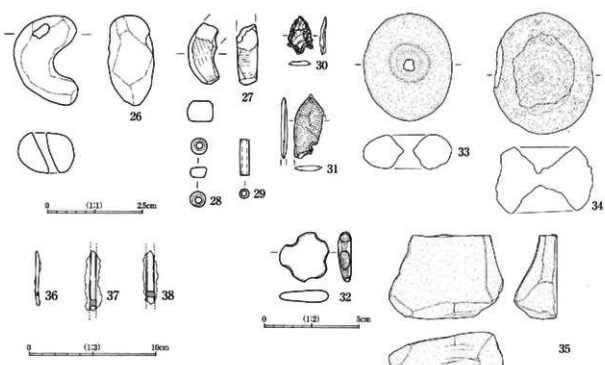


図227　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（3）（S=26～29；1/1　30・31；1/2　32～38；1/3）

32；SK043　33；SK016　34；SK002　35；SK003　その他；検出面

Ⅶ　XⅢ区の調査

1　XⅢ区の概要

本地区は事業着手以前から継続実施した協議の中で、型川堤防内における工事ということから調査対象地より除外されていた。これにより発掘調査に併行した平成12年11月より工事着手されたが、この橋脚設置の基礎掘削中に埋蔵文化財の包蔵が確認された。急遽、事業主体者である長野建設事務所、工事請負業者である川中島建設株式会社と保護協議を行い、両者のご理解とご協力により、実施中であったXI区の調査を一時中断して、平成12年11月下旬に発掘調査を実施した。

検出された遺構は円墳１・井戸２・土坑１・ピット１である。

円墳は古墳時代前期後半代に遡り、井戸・土坑・ピットは平安時代以後となる。ただし、前述したように包蔵確認が工事中で、その時点で掘削を中止して調査面を設定したが、掘削は他地区の確認面下まで達してしまっている。調査面は標高353.9mを前後する高さで、XII区南端SZ001確認面よりも0.7mほど低く、浅い掘り込みの遺構などは確認できないまま、滅失したものがあると考えられる。掘削法面（西壁）を検討したところでは、若干のピット状の掘り込みは確認されたものの、竪穴住居の存在をはじめ、密な遺構分布は認められなかった。ただし、南・西壁は存在せず、北壁も自転車道保護のための盛土により広く遺構分布の状況把握をすることはできなかった。一方、検出遺構よりも下層（古墳周溝底下）で遺構は確実に存在せず、XII区でのように古墳周溝下に弥生時代後期を中心とした遺構の残存部が確認されるよ

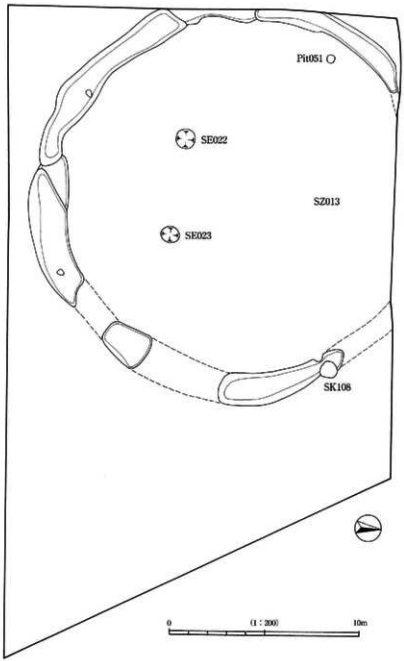


図228　XⅢ区遺構分布図（S=1/200）

うな状況はみられなかった。確実ではないが、弥生時代後期を中心とした集落域は本地点まで濃密な遺構分布で広がってはいなかったと想定される。

遺構番号	形態	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品	鉄製品	報告頁	時期	
	規模 m	底面	その他	備考	先	後		実測数	破片重量	土製品 玉類	青銅製品		時代	細別
SZ013	円墳 外法 21 内法 18.5					SE022 SE023 SK108 Pit053		2				208	古墳	前期
SE022	円形 1.10	未完掘	石材あり		SZ013		素掘。 井戸枠の痕跡なし。		0.26			211	平安以後	
SE023	円形 0.95	未完掘 湧水 あり			SZ013		素掘。 井戸枠の痕跡なし。		0.18		銅銭 型宋 元宝	211	中世	
SK108	不整方円 0.8×0.75	平坦			SZ013							211	不明 (SZ013 以後)	
Pit53	円形 0.40				SZ013								不明 (SZ013 以後)	

表 13　XIII 区検出遺構一覧表

2　検出された遺構と出土遺物

SZ013（篠ノ井・高畑13号墳）（PL－36、PL－XI　XIII　XII－1）

周溝外法約21m、内法18.5mを測る円墳である。周溝は北側で調査区外へと続き、西側は周溝外側が調査区外となるが、ほぼ全体形が把握できたと考えられる。

周溝の形状は円形を呈する。掘削深度は一定ではなく、部分的に深く掘り込まれている。周溝はこの深く掘り込まれた土坑状の部分が連続する形で検出されている。深く掘り込まれた部分の間、平面図（図229）において細点線で表示した部分は、確認面でほぼ周溝底が検出されており、ほとんど掘り下げることができなかった。ただし、底面とはいえ周溝の痕跡は明瞭で、ブリッジ部は存在せずに円形に巡っていることが確認できた。

周溝の掘削は深く掘り込まれた土坑状部分が一定の間隔を開けて認められ、掘削幅ならびに深さがまちまちであることから、これが基本単位と考えられる。その深い部分をより浅い掘削によって連結し、周溝としていると想定される。いずれの箇所も覆土は暗褐色粘質土の単一土層で、土師器壷もこの土層より出土していることから、周溝掘削後に埋め戻しにより周溝底部高を一定の高さにするという工程はなかったと考えられる。

周溝断面は墳丘側に傾斜が急で、外側に緩い形態を呈する。これはいずれの場所でも共通する形態である。

墳丘は面的にまったく確認できなかった。墳丘が掛かる北壁も北側に接する自転車道保護のために盛土されており、掘削断面による墳丘の有無を検討することはできなかった。周溝内でも墳丘崩落土や葺石の崩落は確認されていない。

埋葬施設は残存していなく、痕跡も見いだされなかった。

出土遺物は、土師器（壷・高杯）、須恵器（甕）が周溝内より出土している。

1は有段口縁壷で、周溝No.1地点の周溝底より出土している。割れていたが、ほぼ完形に復元された。出土状況は周溝内側壁に接して口縁部が下側を向いて横転していた。この口縁部片が体部片下に入り込んで割れた状況は周溝内に設置されたと過程した場合不自然で、周溝の埋没がほとんどない初期の段階で、墳丘上に設置されたものが転落したと想定される。口径16.3cm、器高29.9cm、底径6.2cmを測る。口縁部は有段形態で、一次口縁は頸部から外傾し、擬口縁技法で段部突帯を成形している。内面は角度変換がみられるが、段は形成されない。二次口縁は一次口縁の内面に合わせてほぼ垂直方向に積まれ、口縁端部は丸く収める。なお、一次口縁は1.5cm、

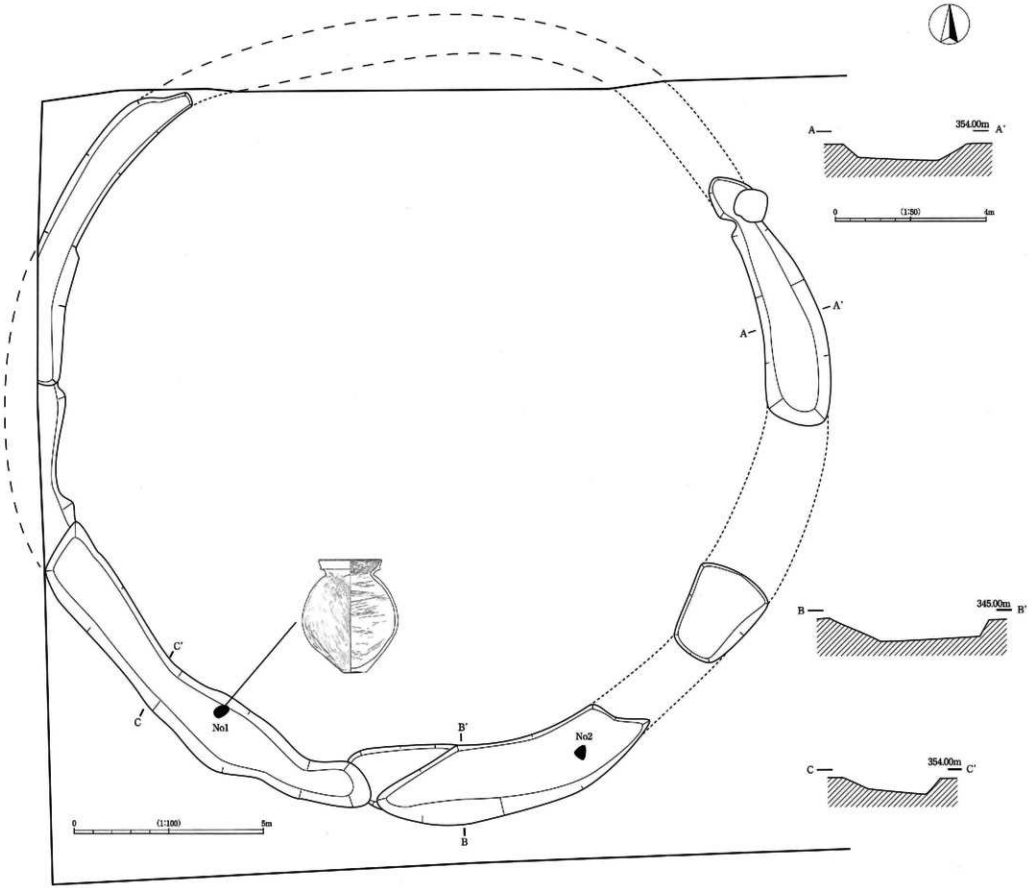


図229　SZ013実測図（平面図；S＝1/100　断面図；S＝1/50　土師器；S＝1/10）

二次口縁は2.5cmを測り、口径は胴最大径に及ばない。外面はナデ調整、内面はミガキ調整を施す。頸部内面はケズリによって直立させている。肩部はそれほど張らずに胴中位で最大径となり、楕円形を呈する。外面はハケ調整後ミガキ調整、内面はナデ調整後ミガキ調整が施される。底部は中央部が凹むが輪台技法ではない。また、底部穿孔は認められない。

2は高杯脚部片で、周溝覆土中より出土している。杯部片はみられない。柱状脚部は残存長6.7cmを測る中実成形で、直径は最大2.7cmと細い。脚上方が外側に開き始めているので、杯部との接合直下で割れたと考えられる。外面は縦方向のミガキ調整、脚内面はナデ調整が施される。胎土には石英・長石・白色砂粒等を若干含み、胎土・焼成ともに1の有段口縁壺と類似する。また、この高杯も壺同様に周溝内に設置された痕跡はなく、墳丘上から転落した可能性が考えられる。なお、有段口縁壺、中実成形の高杯は基本的なセット関係として編年的な齟齬はなく、共伴した一括遺物である可能性が高いと考えられる。

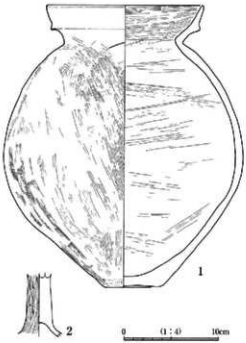


図230 SZ013出土遺物実測図（S＝1/4）

このほか、No.2地点よりは須恵器甕が1点出土している。出土高はほぼ確認面で、周溝底より浮き上がった状態で出土している。横転した状態で、口縁部ならびに上方に当たる体部は欠損している。外面は平行タタキ調整後、ナデによる半スリケシ、内面は当て具痕スリケシで、古墳時代後半期に該当すると考えられる。後出する時期の須恵器が周溝覆土下層に含まれていることは、周溝の埋没過程を示す、あるいは、周溝埋没後掘り込みを伴う別遺構が存在したことを示す資料として注意される。

以上の様相より、本墳は古墳時代前期後半代に該当すると考えられる。また、本墳は全長（周溝外法の直径）が20m代になり、他地区で検出された円墳と比較して一回り大きい。さらにSZ002（XII区）や方形周溝墓（大規模自転車道地点）とともに古墳群形成の初期に位置づけられると考えられる。

SK108は0.8×0.75mを測る不整方形の土坑である。出土遺物はなく、時期不詳であるが、SZ013周溝を掘り込むことは確実で、後出する時期の所産である。

SE022・SE023（PL－XI　XIII　XII－1）

SE022　直径1.1mを測る円形・素掘の井戸である。SZ013墳丘を掘り込んでいる。壁面は明瞭に確認されたが、井戸枠の痕跡は確認されなかった。確認面下1.5m程度まで掘り下げを行ったが、底部には達していない。

出土遺物は四耳壺片ほか土師器・須恵器片が極少量出土しているにすぎない。出土遺物からみて、平安時代以降と考えられ、他地区の様相からは中世段階に使用されていた可能性が高いと考えられる。

SE023　直径0.95mを測る円形・素掘の井戸である。SZ013墳丘を掘り込んでいる。SE022同様に壁面は明瞭に確認されたが、井戸枠の痕跡は確認されなかった。確認面下約1.5mで、湧水が認められた。出土遺物は極少量の土師器・須恵器片とともに銅銭が1点出土している。銅銭は「聖宋元宝」で、1101年鋳造の北宋銭である。12世紀代に本井戸が使用されていたことを示す良好な資料と評価できる。

図231 SE023出土銅銭拓影（S＝1/2）

なお、SE022・023覆土中に含まれる土器片は極めて少なく、他地区における状況を加味すると、SZ013は若干の墳丘の高まりを残していて、平安時代以降の遺構分布も粗であったことを示す可能性が高いと考えられる。

Ⅷ　A区の調査

1　A区の概要

A区の発掘調査は平成15年10月～12月に実施した。遺構確認面は２面確認され、１次面・２次面として調査を行った。隣接するⅫ区・Ⅻ区をはじめ、各地区は１次面のみであり、本区のみ２次にわたる遺構確認面が存在したこととなる。後述するように、１次面は平安時代以降の新しい遺構確認面に該当し、同等の確認面は他地区ではみられない。ただし、２次面との深度差は小さく、１次面遺構底面直下に設定されたため、独立した遺構面とはいえず、上層の残存状況が良好であった結果と評価される。他地区調査面との対応関係は２次面が他地区の遺構確認面に該当すると捉えられる。

１次面の調査

確認面の土層は灰褐色系の粘質土で、大半の遺構覆土にもこの確認面同質土のブロックが混入していて、他地区では認められない状況であった。このため、他地区の遺構確認面とは異なる状況と判断され、上層遺構が良好に残存していた結果と捉えた。検出された遺構は古墳時代前期のSB134を除いて時期決定の要素が薄いが、各時期の遺物が混在する状況からは平安時代以降と考えられ、中世段階まで下る可能性が高いと考えられる。居住に関わる遺構は２次面遺構と関連するSB134のみで、他に住居跡は検出されなかった。基本的に溝と土坑から構成され、居住域周辺部に該当すると考えられる。

溝跡は調査区西側にSD022・SD023が分布する。両者の位置関係からは一連の大溝として、大規模な方形区画溝となる可能性も考えられるが、覆土が大きく異なる点からは別遺構と判断される。自然堤防上と千曲川を繋ぐ導排水機能が想定され、同一地点に継続して溝が配置されたと捉えられる。このほかの溝跡は規模も小さく、また、調査区内で収束することから区画溝的な性格と考えられる。

土坑は調査区全面より検出されている。楕円形の大型土坑を含み、建物柱穴となるものは認められない。SK162は中でも大型の土坑で、内部より焼土・炭層が検出された。それらを除去すると、土坑やや東寄りで非常によく焼けた焼成面が確認された。遺物の出土や炭化材等の検出はなく、何を焼成したのかを明らかにすることはできなかったが、火の使用は確実である。また、SX005は当初竪穴住居跡の可能性を想定して調査を実施したが、床・柱穴をはじめに

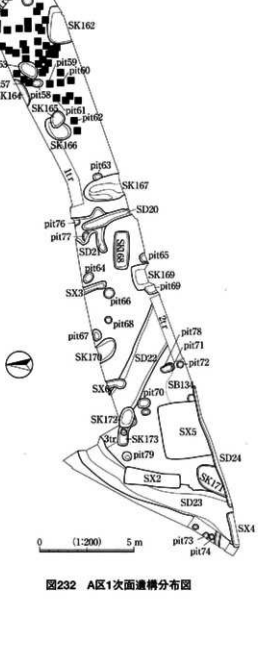


図232　A区1次面遺構分布図

居住に関わる施設は確認されず、住居である可能性はほとんどないと判断された。

方形ピット群は調査区東側で検出された。主軸は他地区に比して明瞭ではないものの南北軸・東西軸はほぼ認められ、一連のピット群を為す可能性が考えられる。下層に存在する弥生時代後期～古墳時代前期以外の遺物の出土はないが、他地区同様に検出されたすべての遺構を掘り込み、最も新しい時期の所産と考えられる。

遺構名	形態 規模m	付属施設				重複関係		土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製 品	報告 貫	時期		備考
		底面	付属 施設	柱穴	その他	先	後	実測 数	重量 (kg)				時代	細別	
SD020	幅 0.60			なし					0.58				平安以降		
SD021	不整形 幅 0.45			なし			SD020		1.33				平安以降		
SD022				なし			SK172 SX006 P070		4.16				平安以降		
SD023	幅 1.60m			なし			SD024 SK171 SX002 SX004		10.95				平安以降		
SD024		平坦		なし			SD023 SK171 SX005		0.43				平安以降		溝であるかどうか不明
SK162	不整方形 2.40	平坦 脆弱	火床状の 焼成面	なし					0.79			226	平安か		焼土・炭が覆土中より多量に検出 火床上の焼成面が確認され焼成土坑であることは確実であるが、何を焼成したかは不明。
SK163	楕円形 1.10×0.80	平坦	なし	なし					0.33				不明		
SK164	楕円形? 1.10	平坦	なし	なし					0.63				不明		
SK165	楕円形 0.90×0.70	平坦	なし	なし		SK166			0.1				平安以降		
SK166	楕円形 1.50×1.00	平坦	なし	なし			SK165		0.92				平安以降		
SK167	楕円形 幅 1.25	平坦	なし	なし		P063			1.38				平安以降		
SK168	隅丸方形 2.00×0.80	平坦	なし	なし					0.05				平安か		
SK169	方形 1.30	平坦	なし	なし					1.89				平安か		
SK170	不整円形 1.00	平坦	なし	なし					1.28				不明		
SK171	楕円形 幅 1.30	平坦	なし	なし					0.93				平安以降		
SK172	楕円形 1.10×0.70	平坦	なし	なし			SD022 SK173		0.67				平安以降		
SK173	不整形 幅 0.56	平坦	なし	なし				SK172	0.15				平安以降		
SX002	長方形 幅 2.35	平坦			覆土中より骨片	SD023			0.97				平安以降 (中世以降か)		
SX003	溝状	平坦	なし	なし					0.33				平安以降		SX006 と類似
SX004	長方形	平坦	なし	なし					0.01				不明		
SX005	方形	平坦	なし	なし	覆土は砂質土				2.71				不明		
SX006	溝状	平坦	なし	なし									平安以降		SX003 と類似

表 14　A 区 1 次面検出遺構一覧表

2次面の調査

1次面調査遺構の底面直下で中間層を挟まずに設定された遺構確認面である。遺構底面は基盤層に達し、他地区の検出遺構と同様の状況で、調査面として対応すると捉えている。調査区は西側で1次面に比して短くなっているが、これは西側で隣接する本線部分（XⅡ区）が最大比高差3m程度までの盛土工事が完了し、安全性が確保できないことや掘削土の除去作業において1次面同様の作業スペースが確保できなかったことにより、調査範囲を狭めたことによる。なお、1次面で調査を実施したSD023は底面が基盤層に達しており、調査区を拡張したとしても下層遺構が検出されることはなかったと考えられる。

遺構は調査区全面より弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡などが検出されている。これに合わせて1次面で確認された井戸跡（SE037～039）の調査も実施した。

遺構の検出状況は重複が極めて激しく、1次面とは対象的にまったく重複関係をもたない単独立地の遺構は皆無であった。これに調査区の狭長さも相まって、調査区東側隅部を除くほぼ全面が掘り下げ対象となり、遺構の把握は困難を極めた。

井戸跡は南壁際にSE037～039の3基が隣り合う状況で検出されている。円形・素掘の井戸跡で、井戸枠の痕跡は認められなかった。いずれも確認面下1.2m程度で湧水点に達している。SE039では北西側の井戸本体より南東側の調査区南壁に向かって3段の階段状の掘り込みが確認された。SB138の貼床が明らかに掘り込まれるとともに各段の掘り込み壁面が剥がれ落ち、容易に検出された。井戸に掘り込まれる重複遺構の可能性を考慮したが、井戸と時期差をもつ状況は認められず、一連の遺構として掘り込まれたと判断された。この階段状遺構は階段面が水平でなく、井戸内部に向かって傾斜を有する。このため、水汲み用の階段とするには足下が不安定で、あるいは井戸掘削に伴う階段状施設の可能性が想起される。なお、本地点で調査を実施した井戸跡の中で、こうした階段状遺構が検出されたのは本例のみである。

図233　A区2次面遺構分布図

住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が9軒検出され、これに1次面検出のSB134を加えて10軒確認された。調査区が狭長なため全体が把握されたものはなく、いずれもが部分的な検出に止まる。また、すべての住居跡には重複関係が認められ、継続的に居住地として選択されたことが理解される。弥生時代後期・吉田式期は、各住居の覆土中より土器小片の出土がみられるが、確実に該期に属する遺構の検出はなかった。集落の形成は箱清水式期の中頃から開始され、古墳時代前期まで継続的に住居の分布が認められる。位置が完全に合致し、建替えの可能性がある住居はSB142→SB139で、他は位置を異にして重複する。主軸方向はSB136が北東-南西方向であるが、他はおおむね北西-南東方向をとる。このように近似した時期の住居跡が継続的に重複する状況他調査区においてはみられず、ここに本地点の特色があるといえよう。なお、同時期集落はXII区・B区・C区・D区と東西方向に塁川に沿った状況で展開しており、既存調査区である大規模自転車道地点を加えて、本地点がほぼその東端部に該当する。出土遺物ではSB136とSB138で鉄鏃、SB136でヤリガンナ、SB135で刀子